

大阪医科大学附属看護専門学校 閉校記念誌

83年の航跡

1929年 ▶ 2012年

大阪医科大学附属看護専門学校 閉校記念誌

83年の航跡

1929年 ▶ 2012年



閉校のごあいさつ



学校法人大阪医科大学
理事長 植木 實

この度、平成24年3月31日を以て設立83年の歴史を有する大阪医科大学附属看護専門学校を閉校することになりました。

大阪医科大学は、昭和2年2月28日に前身である財団法人大阪高等医学専門学校（修業年限5年）として認可を受け、同年4月27日に東淀川区下新庄の仮校舎で第1回入学式を挙行、その後、昭和3年8月31日に現在地に完成した新校舎に移転しました。

一方、本校は、附属看護婦学校として2年遅れの昭和4年3月26日に設置認可を受け大阪市北区萬歳町梅田病院内にて開校しました。昭和5年、本学附属病院である三島病院（旧称）の新設・開院と共に現在地に移転し、その後助産婦学校を併設しました。昭和25年には、文部省の指導及び社会の要請に基づいて乙種看護婦学校、同28年に附属准看護婦学校、同33年に附属看護婦学校二年課程、同58年に附属看護専門学校第一看護学科設置など、種々の変遷を重ね現在に至っています。本校では「医療・保健・福祉のあり方を認識しつつ、高度医療を担うよき看護師の育成」を目的として教育にあたり、4千人余の優秀な看護師を育成、卒業生は附属病院や近畿地区の病院を中心に、全国で活躍されています。

近年、急速に進歩する医療界では、文部科学省の指導もあり、より高度な知識と技術を持ち、且つ多様な領域で力を発揮できる、保健師や助産師などの資格取得が可能な4年制看護学部での看護師の育成が求められています。それを受け、本学でも看護学部の設置が決定され、文部科学省に申請致しました。平成21年にその設置が認可され、同22年より新入生を迎えるに至りました。

しかし、一方で本校は施設や運営の関係もあって閉校の止むなきに至り、看護基礎教育は看護学部が発展的委譲することに決定されました。本校が過去83年間にわたって優秀な卒業生を輩出し、近隣地区の看護医療を担ってきたことに特段の感慨を催すと共に、関係各位に心から感謝申し上げます。そして、本学の連携病院、近畿そして全国の病院で活躍されておられる本校の卒業生の皆様にエールを贈り、皆様が本校の卒業生であることを誇りに、これからも職務に精励していただきたいと思えます。

最後に、本校の運営に携わられた歴代の学校長、教職員の皆様に心から御礼を申し上げまして、閉校のごあいさつといたします。

育み継なく

大阪医科大学附属看護専門学校
学校長 神谷 美佐子



大阪医科大学附属看護専門学校は平成22年4月の大阪医科大学看護学部開設に伴い、平成24年3月をもって閉校することになりました。

本校は、昭和4年大阪高等医学専門学校附属看護婦学校として開設され、今日まで83年の長きにわたり、4千人余の有能な卒業生を社会に送り出してきました。隣接しています大阪医科大学附属病院とその前身である大阪高等医学専門学校附属病院（三島病院）で臨床実習を行い、最先端の医学・医療を学ぶ環境に恵まれ、高度医療を受けられる患者様への看護を経験することができました。また、60余年の全寮制生活では、学業のみならず人間としての豊かさを身に付けるための教育を行い、医療従事者として社会人として必要な躰やマナーなど多くの学びの場を与えました。本校は「看護師として必要な専門知識と実践力を修得させ、よき社会人としての人格形成に努めるとともに、保健・医療・福祉の分野はいうまでもなく、広く社会に貢献できる看護師を育成する」のもとに教育を行い、その卒業生の多くは保健・医療・福祉の看護実践活動ならびに教育の各分野で活躍し大きな役割を果たしています。昨今の社会・医療は数々の問題を抱え、看護に求められることも多岐に亘り、看護職者の自律が求められています。本校で看護の原点を学んだ卒業生の皆様が今後さらに活躍されることを願っています。

本校の看護基礎教育の場は、昭和4年に大阪の地「梅田病院」よりスタートし、その後大阪医科大学構内の生理学研究棟そして恩賜館での学び舎を経て昭和39年看護婦学校の校舎が竣工するまで移転を重ねてきました。平成17年大学化を見据えた新校舎の完成は、看護基礎教育の歴史の継承と今後一層の発展を祈念するものであります。

私も本校の卒業生でありこのたび母校がなくなることには、一抹の寂しさを禁じえません。看護師教育課程の背景は異なっても、卒業生としての誇りと自信は一人ひとりの大きな礎になっているものと確信しています。そして医療の発展のため患者様のために職務に精進して頂くことを心から期待しています。ここ北摂の地にしっかり根づいた看護のこころ、人が人を育てる、そしてその環境づくりはこれからも育み継ないでいかれることでしょう。

最後になりましたが、これまで本校の運営に携わって下さいました多くの方々、ご指導・ご支援を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

良き看護師育成のステージ



大阪細菌研究所附属梅田病院



大阪高等医学専門学校正門



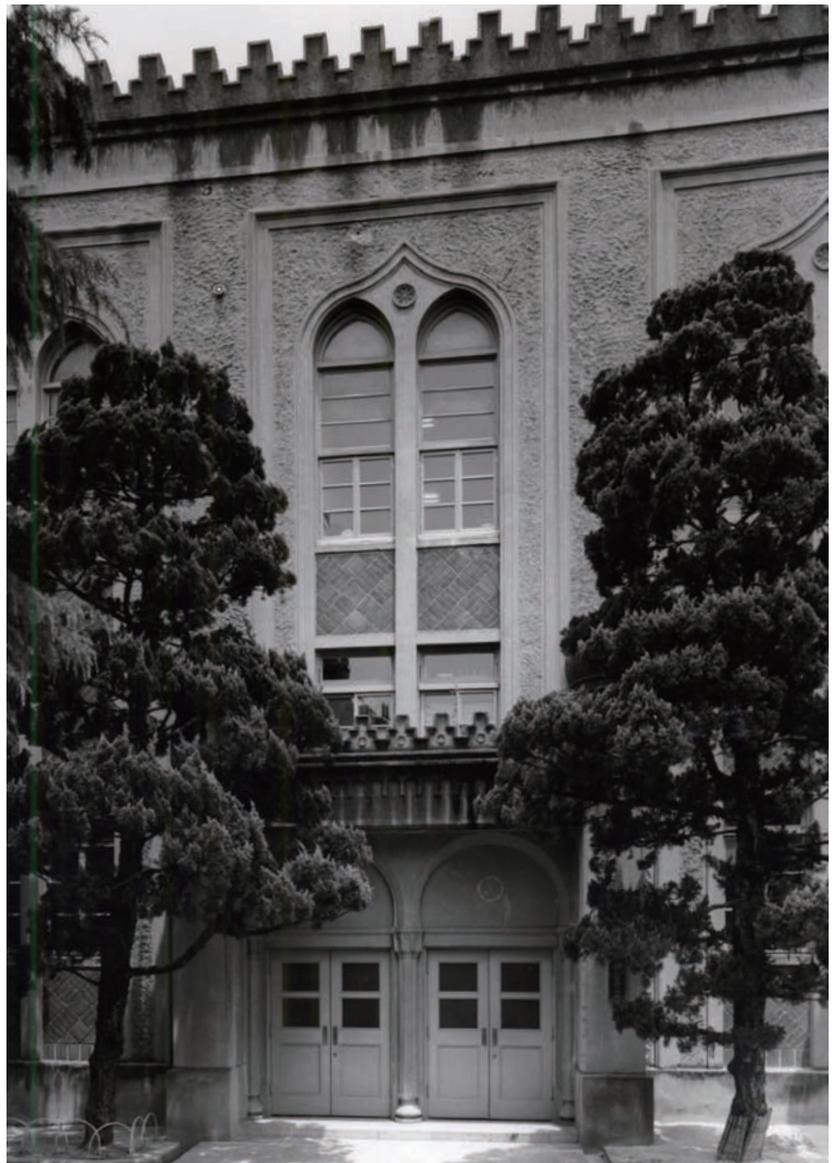
附属看護婦学校及び寄宿舍



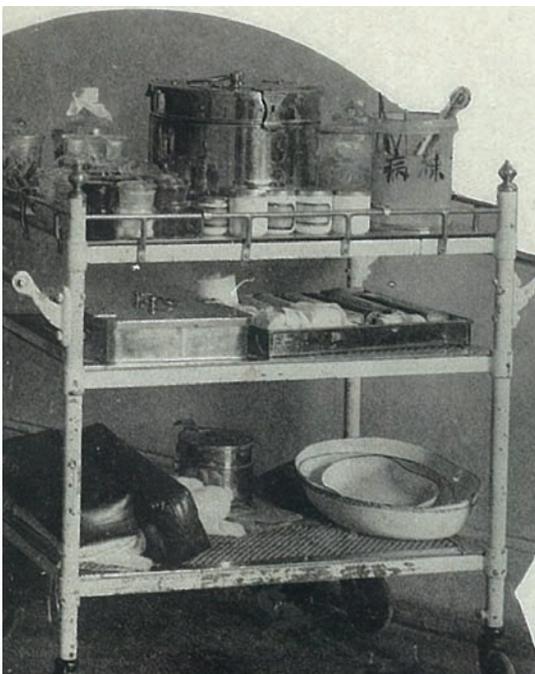
三島病院

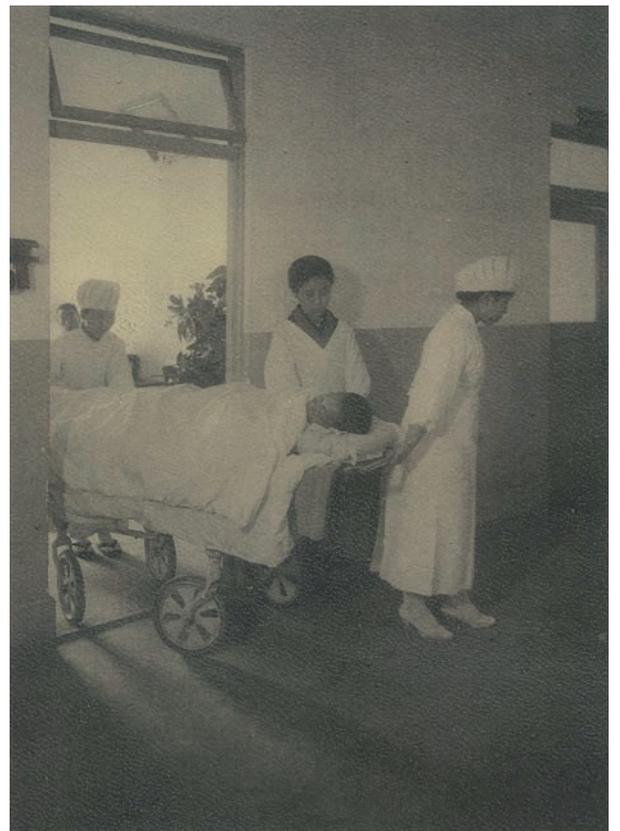
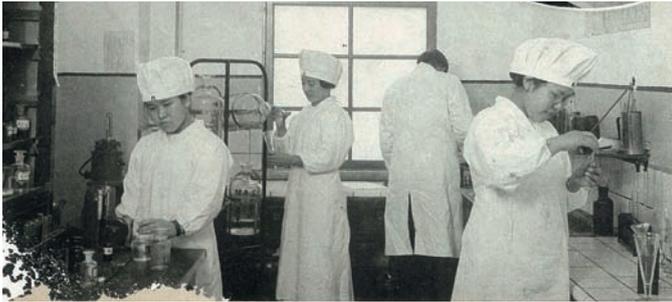


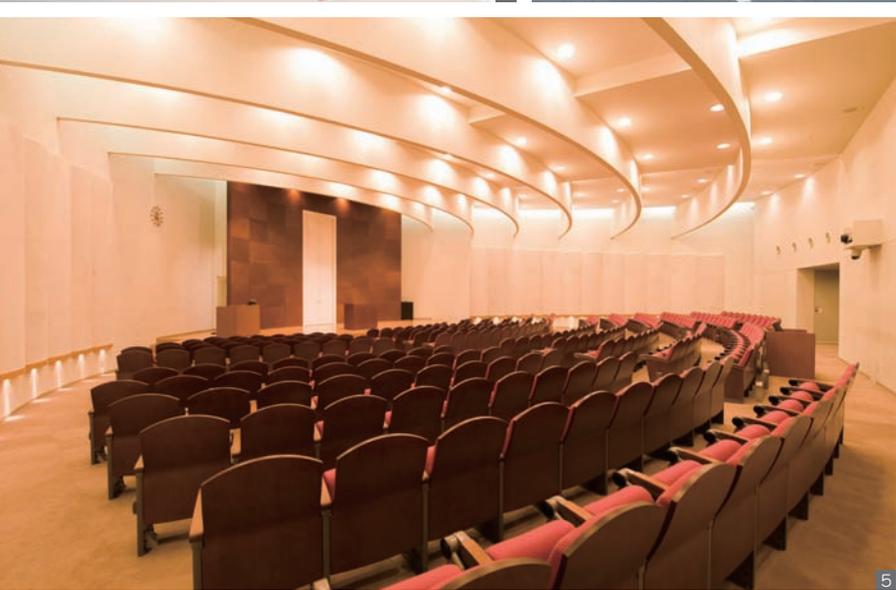
看護婦学校校舎



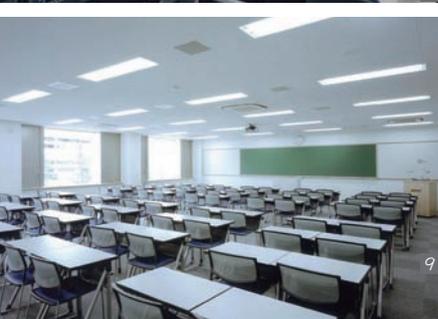
看護専門学校校舎







- | | |
|------------|------------|
| 1 エントランス | 2 学生ロビー |
| 3 看護専門学校正面 | 4 看護専門学校全景 |
| 5 講堂 | 6 学生ホール |
| 7 情報処理室 | 8 多目的室 |
| 9 視聴覚室 | 10 課外室 |





11



12



13



14



15



16



17



18

- 11 教室
- 12 研究室
- 13 実習室1・2
- 14 オープンゼミ
- 15 在宅実習室
- 16 各論実習室
- 17 図書館
- 18 ナイチンゲール像



入学式

桜咲き春爛漫のこの日、期待と不安に胸を膨らませ入学式を迎えました。緊張の面持ちで入学宣誓書に署名しました。

来賓の方々や学校長から祝辞を頂き、新2年生の代表からは「共に頑張っていきましょう」と歓迎の言葉をもらって、看護師となる決意を新たにすることができました。

教育キャンプ

入学後直ぐに行われた教育キャンプ…。山桜やチューリップが咲き、うぐいすの鳴く声が聞こえる自然の中でのオリエンテーリング、夜はキャンドルサービスで各グループが趣向を凝らしての自己紹介、野外炊飯でのカレーライス作り…仲間と共にいる体験を通して、クラスメートや教員との交流を深めることができました。

ナイチンゲール生誕祭

ナイチンゲール像への献花、誓詞斉唱、聖灯拝受の後ナイチンゲールの業績紹介、学年ごとの代表者が看護に対する思いを発表…厳かな式典は、一人ひとりが初心を新たにす機会となりました。

その後は、附属病院に入院中の患者様を訪問します。1年生はベッドサイドを訪れる初めての経験となり、患者様から温かい心のこもった言葉に感銘を受けました。



白友祭

地域の人々との交流を図るために開催されました。子どもたちと一緒におもちゃを作ったり、看護学校ならではの健康チェックコーナーも人気でした。

講堂では、クラリネット演奏、手話落語、和太鼓、ハーモニカ演奏、ヴァイオリンとピアノとチェロの三重奏等が開催され、どれもその年のテーマを反映して人々の心に響くものばかりでした…。



交流会

さわらぎキャンパス体育館にてソフトバレーボールとダンス等のパフォーマンスで学年やクラスを超えた交流により学生相互の親睦を深めることができました。

決勝トーナメント戦は、白熱した試合展開となり競技者も応援者も体育館が割れんばかりの歓声で…若い熱気が心身をリフレッシュさせていました。

戴帽式

入学して半年…待ちに待った戴帽式が来賓ならびに保護者参列のもと厳粛に行われました。看護の大先輩である附属病院看護部長と副学校長から戴帽され、緊張の中でも嬉しさはひとしお、真新しいキャップをつけた夫々の瞳は輝いていました。

ナイチンゲール像からの聖灯を拝受し、看護のともし火の中で誓いの言葉を斉唱し、今後への自覚と覚悟を新たにしました。

クリスマスコンサート

地域との積極的な関わりとボランティア精神を高める目的で開催されました。吹奏楽部や学生有志による合唱、ダンスなどに講堂は熱気でいっぱい！来場者に手作りの心ばかりの小さなプレゼントを手渡し、最後にはお子さんたちにステージに上がってもらって“ジングルベル”の大合唱！帰り際にはサンタとトナカイに扮した学生との握手と記念撮影となりました。



卒業式

長くて、短かった3年間…。卒業式、答辞では今までの苦しく楽しい日々を支えてくださった人々への感謝の気持ちを述べて、厳粛な中、感激の式となりました。謝恩会では、今までお世話になった教員や講師および臨床指導者の方々と思い出を語りあいました。巣立つ道は変わっても、大阪医科大学附属看護専門学校で学んだ看護のこころはひとつ！です。





看護の「看」という字は「手」と「目」できています。私たちの「手」と「目」は今もどこかで誰かの役にたっています。



大阪医科大学附属看護専門学校は平成二十四年三月三十一日をもって閉校いたします。

生き方として 看護 を選ぶ。



大阪医科大学附属看護専門学校 閉校記念誌 目次

閉校記念誌発刊によせて

学校法人大阪医科大学理事長 植木 實	2
大阪医科大学附属看護専門学校校長 神谷 美佐子	3
良き看護師育成のステージ	4

第1部 沿革

「83年の足跡」

Sec.1 大阪高等医学専門学校附属看護婦学校開校	18
Sec.2 太平洋戦争の戦時下と戦後の混乱の中で	19
Sec.3 新制看護婦学校・准看護婦学校の開校	21
Sec.4 看護婦学校二年課程	22
Sec.5 看護専門学校と三年課程	24
Sec.6 新しい時代に即した看護教育へ	27
Sec.7 看護基礎教育の発展を目指して大阪医科大学看護学部へ	30
column1 校舎の移り変わり	33
column2 寄宿舍の移り変わり	34

高槻市長 濱田 剛史	36
社団法人大阪府看護協会会長 豊田 百合子	37
前高槻市長 奥本 務	38
関西医科大学附属看護専門学校校長 關 壽人	39
高槻市医師会看護専門学校校長 甲斐 敏晴	40
大阪医科大学学長 竹中 洋	41
大阪医科大学看護学部学部長 林 優子	42
大阪医科大学附属病院病院長 木下 光雄	43
大阪医科大学附属病院看護部長 小野 恵美子	44
学校法人大阪医科大学常務理事 佐野 浩一	45
大阪医科大学附属病院看護部長代理 西山 裕子	46
高槻市保健所所長 高野 正子	47
社団法人高槻市医師会会長 飯田 稔	47
社団法人大阪医科大学仁泉会理事長 楢原 敬郎	48
大阪医科大学名誉教授 武内 敦郎	48
大阪医科大学名誉教授 小野村 敏信	49
学校法人大阪医科大学事務局長 磯田 洋三	49
非常勤講師・旧教職員・卒業生・現教職員	50

第2部 寄稿

「83年の光芒」

大阪医科大学附属看護専門学校基本理念	72
歴代理事長	73
歴代学校長	74
大阪医科大学附属看護専門学校学則	76
人事・カリキュラムの変遷	78
卒業生数の推移	98
学校の変遷	100

第3部 資料

「83年の集積」

第1部 沿革

「83年の足跡」



大阪高等医学専門学校 附属看護婦学校開校

旧制看護婦学校開校

財団法人大阪高等医学専門学校は昭和2年2月に設立が認可され、同年4月大阪市東淀川区下新庄に大阪高等医学専門学校の仮学舎を置き開校した。本校は、昭和4年3月26日に大阪高等医学専門学校附属看護婦学校（旧制看護婦学校）として認可され、同年4月1日大阪市北区萬歳町49にあった梅田病院構内に開校した。

昭和5年1月大阪高等医学専門学校の本館・別館・解剖館・臨床講堂が現在の高槻市大学町に竣工され、移転したのに伴い、旧制看護婦学校も同年8月に移転した。

その竣工に相前後して、大阪高等医学専門学校附属病院が竣工され、5月15日に地名に因んで三島病院（120床）として開院式が挙行された。

病院看護婦は当初17名であったが、昭和5年4月には30名に増え、その後旧制看護婦学校1・2回生が加わった。当時の病院では、看護の体制を整えるための指導者として、日赤・慶応・京大病院の出身者から広く人材を求めた。

昭和7年には、高槻町ほか5ヶ町村組合立伝染病院を竣工、一般病棟と伝染病棟を併せ全病

床数205床の病院に発展していった。

旧制看護婦学校の学則には「本校は大阪高等医学専門学校の附属にして看護学を教授すると共に其人格を陶冶し実際の看護婦を養成するを以て目的とす」とされていた。入学資格は「満十四年以上満二十年以下の独身者にして家事に係累なき者、身体健全品行方正なる者」、修業年限は「二箇年」、学期は「二学期」としていた。

この旧制看護婦学校では、昭和6年6月卒業の第1回生から第21回生まで計360名が卒業した。

産婆講習会

日本の近代的な助産婦養成は、明治32年の産婆規則制定によって免許制度が確立した。その後、昭和2年と8年に産婆規則が改正された。本校においては、昭和10年4月より旧制看護婦学校の卒業生を対象に、産婆講習会を開講し産婆の育成が始まった。

産婆講習会では、昭和21年まで193名が受講し産婆の資格を取得した。資格取得者は主として旧制看護婦学校の卒業生であったが、中には院外からの聴講生も含まれていた。



三島病院



大阪高等医学専門学校の全景（昭和7年頃）



看護婦学校看板

太平洋戦争の戦時下と 戦後の混乱の中で

戦後の流れと学校

第二次世界大戦中の昭和16年、看護婦規則の改正によって、看護婦の最低資格年齢が18歳から17歳に引き下げられ、さらに昭和19年には16歳に引き下げられた。

これら戦時中の状況を受けて、旧制看護婦学校では昭和19年12月に繰上げ卒業があったが、昭和24年度に入学した生徒が巣立つまで、看護婦養成を続けた。

昭和20年、終戦後GHQの公衆衛生福祉局に看護課が設置され、初代課長にオルト大尉が着任し、我が国の衛生制度、施設看護体制、看護教育などの改革が進められた。大阪市内は空襲の大きな被害を受けていたが、幸い高槻は爆撃をまぬがれた。

そのような時代背景の折、昭和21年3月に設置主体である財団法人大阪高等医学専門学校において、旧大学令に基づく大阪医科大学（旧制大学）の設置が認可された。

昭和22年の保健婦助産婦看護婦令により、「産婆」という名称が、「助産婦」と改正された。

本校では、昭和21年3月に産婆講習会を終講させ、同年4月に旧制看護婦学校と並列して助

産婦学校を開校している。

昭和21年9月16日付で、大阪府知事宛の「看護婦学校名及規則一部変更の件」とし、「大阪高等医学専門学校附属看護婦学校を大阪高等医学専門学校附属看護婦・産婆学校と改称」「産婆科入学は本年に限り10月1日より実施致度」という資料が存在する。

書類上、「大阪高等医学専門学校附属看護婦・産婆学校」の名称が認められるが、産婆科の入学者名簿と卒業者名簿は存在しない。

同年12月2日には、助産婦科の認可を受け助産婦の養成を開始した。

助産婦学校

旧制看護婦学校の卒業生の多くは助産婦学校に籍を置き学んだ。助産婦学校には旧制看護婦学校卒業生以外の生徒も資格取得のために入学していた。

当時の大阪医科大学附属看護婦・助産婦学校規則には、「本校は大阪医科大学附属にして看護婦科助産婦科を設置し之に必要な学科並に技能を教授し人格を陶冶すると共に優秀なる者を養成するを目的とす」とあった。また、「本校助産婦科は第一部及第二部に分ち第一部は看護婦科を卒業せしものより第二部は一般より募



看護婦学校二階大広間で（昭和15年～昭和17年頃）



食堂にて（昭和15年～18年頃）

集す」「本校の修業年限を看護婦科式箇年助産婦科式箇年とす」と規定されていた。「看護婦科生徒は卒業後一ヶ年間大阪医科大学附属病院に勤務し実地修練するものとす但助産婦科第一部生は在学中附属病院勤務を以て之れに充つ」「卒業後助産婦並に看護婦たるの体面を汚し又は大阪医科大学及附属病院に対し不都合の所為ありと認むる者は卒業證書を返戻せしむることあるべし」と記されていた。ここには当時の看護師の卒後教育や現在の保健師助産師看護師法第十四条にある保健師助産師看護師の「品位」に相当するものなど戦後の源流を垣間見ることができる。

助産婦学校は、昭和28年3月、旧制看護婦学校の最後の卒業生が助産婦学校を卒業するのを待ち全6回生計85名の卒業をもって、閉校となった。

戦後の立て直しと寄宿舎生活

昭和22年3月、旧制看護婦学校の卒業生である三好トラキ（6回生）が看護婦長として附属病院に再就職した。

同氏は着任後、可及的速やかに看護体制を整

えるために、看護婦学校の教育主任を兼務し、病院看護婦と看護学生の寄宿舎の舎監の任につき日常生活のリズムを取り戻すことからはじめた。そこで、居住性を重要視した全寮制の良さを活かして人格形成をめざし、戦後の荒廃から看護婦の生活と教育水準の向上に努めた。

この寄宿舎では、病院看護婦と生徒は共同生活を営み、昭和24年当時には寄宿舎規則と自治会細則が規定されていた。

寄宿舎規則には「此の規則は寄宿舎生活自治の精神に則って大阪医科大学附属病院看護婦及び附属助産婦看護婦学校生徒の寄宿舎に関する事項を規定する」「舎生は此の規則を守り寄宿舎生活風紀秩序を維持してその文化的向上を図らなければならない」と定められていた。これらからは看護婦としての品格を保ち自律性や主体性を導き出そうとしていたことが読みとれる。

寄宿舎の運営は自治会細則に基づいて行われた。自治会の推薦または選挙により寮長が決められ、書記委員や炊事委員などの各委員が病院看護婦および看護婦学校・助産婦学校の各学年より選定され、寮の自治運営にあっていた。



集合写真（昭和15年～18年頃）



助産婦看護婦学校の卒業アルバム表紙（昭和27年）



沐浴（昭和15年～18年頃）



卒業記念（昭和17年）

新制看護婦学校・准看護婦学校の開校

新制看護婦学校

昭和22年、保健婦・助産婦・看護婦3職種の業務、教育、資格などを規定した保健婦助産婦看護婦令が公布された。その後、国民医療法が廃止され、昭和23年7月保健婦助産婦看護婦法が制定、看護婦は甲種・乙種の2種類となった。

資料によれば、大阪医科大学に生物学部保健学科を新設して大学教育として甲種看護婦と保健婦を養成する構想もあったが、諸般の事情により昭和25年4月、乙種看護婦の養成を行う新制看護婦学校を開校することとなった。

新制看護婦学校の修業年限は二年間、全3回生までの67名が卒業した。新制度の看護教育では主体性並びに将来臨床看護のリーダーに求められる一般教養を培った。

新制看護婦学校は、開校から閉校まで4年間であったが、看護職として初めて本校の学校長に就任した勢川瑠美子を始め、附属病院や本校の要職に就くこととなる卒業生が多く在籍した。

准看護婦学校

昭和26年に、保健婦助産婦看護婦法の改正により、甲種看護婦、乙種看護婦が「看護婦」として一本化され、看護婦の入学要件が高学歴となり、看護婦不足を補うため准看護婦制度が新

設された。

この頃、大阪医科大学附属病院では社会から求められる医療を提供するために増築と増床を行っていたため、看護婦不足は深刻であった。

そこで、昭和28年に大阪医科大学附属准看護婦学校の認可を受け、開設することとなった。准看護婦学校開設時の全生徒数は40名程度であったが、より広くより優秀な生徒を確保するため、九州地方でも入学試験を実施し、応募者は増加した。准看護婦学校の入学資格は中学校卒業以上であった。そこで、准看護婦学校卒業後の基礎学力を高め、高等学校へ進学するための支援として、高槻市内にあった湯浅学園高等学校（定時制）と提携し、准看護婦学校卒業後、湯浅学園高等学校に編入学できるように配慮し、多くの准看護婦が働きながら勉学に励める環境をつくった。その後、戦後の安定期に入り、高等学校への進学者が増加した。それに伴い看護婦学校三年課程養成所への志願者が増加した。加えて、高等学校教育と准看護婦教育を行う衛生看護科が高等学校に設置されてからは、准看護婦学校入学志願者は漸次減少し昭和51年3月をもって准看護婦学校は閉校となった。

准看護婦学校では、昭和28年の開校から昭和51年の閉校まで、全21回生597名が卒業した。



病院正面玄関



戴帽式

section 4

看護婦学校二年課程

看護婦学校二年課程（全日制）

昭和26年に准看護婦学校制度が発足してから、准看護婦数は増加し、昭和32年、准看護婦としての実務経験三年以上または高等学校卒業を入学要件とした二年課程の看護婦学校養成所制度が発足した。これは、准看護婦から看護婦になるための教育課程で、通称“進学コース”ともいわれた。

昭和33年、本校では全国に先駆けて大阪医科大学附属看護婦学校二年課程（全日制）を開設した。この課程は、昭和33年度入学の第1回生から第7回生まで、計91名が卒業したのち昭和40年度から10年間、一時生徒の募集を停止した。



看護婦学校増築完成（昭和33年）

看護婦学校二年課程（定時制）

昭和32年、二年課程の看護婦学校養成所制度が発足したが、この二年課程に入学する准看護婦は働きながら進学することが多いため、全日制に加えて、夜間開校する定時制の教育機関も設けられた。

当時は、昭和25年に「完全看護制度」が発足し、病院における看護は、家族や付き添いの手によって行うのではなく、「看護は看護婦の手で」が実現するはずであった。しかし、「完全看護」という言葉の誤解も生まれ、昭和33年、患者に提供する看護の水準を患者に対する看護職要員数として算定する「基準看護制度」に改められた。



看護婦学校増築完成（昭和33年）



愛泉寮1号館（昭和37年2月竣工）

附属病院では昭和35年1月に中央手術室・回復室等を含む病床数150床の1号館が竣工した。続いて昭和39年5月には、結核病床20床を減少し一般病床138床を増床した病院2号館が増築竣工した。これらの増床によって、看護職の配置の増加を余儀なくされた。

そこで、病院看護婦の確保と、進学希望者の経済的自立と学業の両立を支援するため、昭和39年看護婦学校二年課程（定時制）の設置を申請・認可され、昭和40年の開設に至った。

この看護婦学校二年課程（定時制）は、修業年限を3年とし、入学後、1年次・2年次は准看護婦として大阪医科大学附属病院で勤務した。学校での授業は毎日午後4時45分から3時限実施されたので、授業には必ず出席できるよう勤務体系が配慮された。3年次は一年間の臨床実習を経験し看護に対する考えを深めていった。

昭和40年度入学の第1回生から昭和48年度入学の第9回生までの入学者は、大阪医科大学附属准看護婦学校の卒業生が6割以上を占めていた。しかし、昭和50年度以降、准看護婦学校の閉校により、進学者数は激減した。

看護婦学校二年課程（全日制）再開校

昭和50年、これまで10年間生徒の募集を停止していた看護婦学校二年課程（全日制）が、再開校することとなった。

これは、昭和51年に准看護婦学校が閉校予定であったことと、高等学校衛生看護科の卒業生が増加し看護婦学校への進学希望者が増加したことによる。

従って昭和50年以降は、二年課程（全日制）と二年課程（定時制）の両課程で教育を実施し看護婦を養成することとなった。



病院1号館完成（昭和35年1月24日付毎日新聞から）



病院1号館完成（昭和35年1月竣工）



病院1号館2階（中央手術室詰所）



中央手術室

section 5

看護専門学校と三年課程

看護婦学校から看護専門学校へ

昭和50年に学校教育法の一部改正により専修学校制度が発足した。

本校では昭和53年に専修学校の認可を受け、大阪医科大学附属看護婦学校から大阪医科大学附属看護専門学校と改め、専修学校として看護婦の養成を行うこととなった。このことにより、看護婦学校二年課程全日制（1部）・二年課程定時制（2部）の課程名は、看護専門学校看護学科（1部）・看護学科（2部）となった。

三年課程

昭和50年代後半になると、医学ならびに看護教育の著しい進歩により看護職への社会の期待は多大となり、看護婦を希望する者が増加した。また、勉学に専念することを希望する者が増え、働きながら看護婦資格を得る看護学科（2部）の進学希望者がとみに減少した。

本校においても、今後の看護婦確保のために、昭和58年に看護専門学校三年課程の認可を受け、開校することとなった。

これに伴い、既設の二年課程と区別するために、三年課程を第一看護学科、二年課程を第二看護学科（1部）、第二看護学科（2部）とした。

志願者が減少していた第二看護学科（2部）は、昭和58年に生徒募集を停止し、生徒が全員卒業した昭和60年3月をもって閉校した。

昭和60年度からは第一看護学科と第二看護学科で看護婦の養成を行うこととなった。

三年課程に繋がってゆく 本校の看護教育制度の実際

本校の看護教育制度は病院と共に時代に即しながら整備されていった。

旧制看護婦学校時代から看護婦学校の学校長は附属病院長が兼ね、附属病院と看護婦学校は一体となり、教育・運営が行われてきた。

旧制看護婦学校から新制看護婦学校では、教育に関わる責任者として、「教育主任」がその任にあたった。その中でも、昭和22年に病院の看護婦長となった三好トラキは、教育主任と看護婦舎監を兼務し、昭和25年には総婦長となり、病院と学校で看護体制を整えていった。また、同氏は、三島病院の指導者や看護婦学校卒業生の名簿作成にも着手した。その後名簿の整理を重ね、昭和60年には「白友会会員名簿」として一冊の名簿を完成させた。「白友会」とは「白衣の友の会」という意味があり、名簿が作



看護婦学校2階実習室（昭和50年頃）



授業風景（昭和50年頃）

成され始めた昭和23年から用いられていた。そしてこの「白友会」は、その後本校の同窓会の名称とされ、平成8年6月1日に大阪医科大学附属看護専門学校同窓会「白友会」として新たに発足することとなった。さらに、同氏は准看護婦学校の「教務主任」としても尽力した。

准看護婦学校と看護婦学校二年課程の変遷期であった昭和32年から昭和52年までの間、後に病院看護部長となる勢川瑠美子は、准看護婦学校と看護婦学校二年課程の専任教員、並びに教務主任を20年にわたって務めた。当時の教員数は最少人数で、また事務員は附属病院や大学事務員が兼務していた。

その中、昭和41年には、産婦人科学教室濱田春次郎助教授が看護婦学校の主事を兼務し、昭和50年3月まで同主事を中心に教務主任らと協力して、学校を運営し、看護婦学校として一步独立した体制に近づいた。

そして、看護専門学校三年課程開設の時代へと移っていく。これまで看護婦学校長は附属病院長が兼務していたが、昭和51年からは、当時副院長であった武内敦郎教授が学校長を兼務し、その後平成6年3月までの間、18年間にわたって学校長を務めた。この間、昭和53年の専修学校の認可取得、昭和58年の看護専門学校三年課程の開設等に携わると同時に、三年課程と二年課程に配置された教務主任とともに、看護婦学校運営会議規程の制定など内部の組織化を図った。

また、看護教員はこれまで本校の卒業生が大半を占めていたが、看護専門学校三年課程の開設に当っては、院内外より広く人材を集め、他校の卒業生からも教員をもとめた。そこで宮地登美子が教務主任として採用され、新たな看護教育体制の確立を目指した。

さらに、附属病院では看護の質的向上および生徒への教育効果を高めるため、病院看護婦に看護教員養成講習会への受講を薦め、生徒の指導環境の整備に力を注いだ。看護専門学校の養成課程の変遷およびカリキュラム改正に伴い、生徒への教育支援のためにも専任教員の増員が必須であり、この講習会を受講し臨床看護実践能力にも卓越した気鋭の看護師・助産師が看護専門学校の教員として配属され人事交流を図った。

長年にわたり看護基礎教育に携った勢川瑠美子看護副部長（教育担当）が、昭和62年看護部長に就任し、看護基礎教育と臨床看護との深い連携に尽力した。附属病院では看護基礎教育と臨床の連携を効果的に発揮するため、昭和54年より、臨床指導者を任命し、臨床実習指導体制を整えた。臨床指導者は看護基礎教育や看護学生への関心を高めながら、卒後教育にも関わり自己の成長へと繋げた。更に、臨床指導者を育成する過程で病院看護婦に学生係を付与する教育・指導体制も充実させ、臨床実習指導環境整備の基盤を築いた。



白友会会員名簿（昭和60年10月）と白友会誌（平成8年6月）



体育館授業風景（昭和50年頃）

紀要創刊

平成6年、永らくの懸案であり希望であった看護専門学校紀要が小野村敏信学校長のもと、創刊された。

この紀要の創刊にあたり、特別寄稿として附属病院の勢川瑠美子看護部長は、「紀要の扉を開く」と題し以下のように述べている。「看護の対象は、さまざまな背景をもつ人間であり、この人間を全人的に理解するためには、根底に幅広い一般教養と豊かな感性を持ち、その上に専門職業人としての知識・技術・精神を身につけることを重視してきた。」「学生一人一人を大切に思い育てなければ、学生も対象である患者さんに人間としてのやさしさを接する気持は薄れる。この原点を継承したい」「本学の看護教育はこの（実習病院との）連携を大切に考えそのための努力をしてきた。大学附属病院の看護

の評価は、働く看護婦の評価でもある。特定機能病院として高度医療に対応する中で、看護業務に就く誇りをもち、患者さんを思いやるきめの細かい看護を実践することに加えて、一層質の高い看護を目指す時、基礎教育と臨床実習指導の連携が相互理解の上でスムーズに行われることが、結果的に良い評価を得る看護につながっていくと確信し、この風土を培って行くことの重要さを感じている。」「今後に期待される看護職者として目指すところは、より理論的で科学的根拠に添った看護を展開できる教育は不可欠で、大学教育及び大学院教育を希望してやまない。」と記している。

平成24年の閉校に至るまで毎年、専任教員や非常勤講師および附属病院の看護師の投稿により、全18号が看護専門学校の歴史と共に発刊された。



section
6

新しい時代に即した看護教育へ

平成元年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令が公布され、カリキュラムが20年ぶりに改正された。この改正では、ゆとりの確保と弾力的な運用を可能にするために、学習の総時間数が三年課程で3,375時間から3,000時間に減少し、特に実習時間が1,770時間から1,035時間に激減した。また、選択必修科目がつくられ、その運用は各教育機関の裁量に任された。この改正によって、看護専門学校における技術教育が大学教育的な色彩を強めていった。

平成4年に看護基礎教育の4年制大学教育への移行を促すと思われる「看護師等の人材確保の促進に関する法律（人確法）」が制定された。

平成6年には「専修学校の専門課程の修了者に対する専門士の称号の付与に関する規程」に基づき、社会的評価の向上と生涯学習の振興を目的として専門士の称号が付与された。少子・高齢社会看護問題検討会での検討内容を受けた平成8年の第3次カリキュラム改正は、高校進学率の増加と学生の資質の変化をふまえて、各養成所の自由裁量による独自のカリキュラムが必要であるとされた。本校は、医科大学を設置する学校法人の下にあることから、グローバルな視野をもって、人間性豊かにしかも実践的看護能力を備えた人材の育成が望まれるため、自己の役割を十分に認識した上で、自己の看護観に基づき対象に合った看護を主体的に実践できる看



本館・図書館棟 背後に総合研究棟を望む



図書



図書館 看板



本館地下食堂

護師を育成することを目指し、看護に必要な研究的態度を養うために看護研究を専門科目の中に設定した。このような、専門学校における教育の高度化を受けて、平成11年学校教育法が一部改正され、専修学校である看護専門学校での履修単位が大学編入学における単位として認められ、専門士に大学編入学の道が開かれた。その後も本校では平成13年度からは、看護実践に必要な不可欠な対人能力向上のためにコミュニケーション能力開発プログラム、医療者として看護者として倫理性や道徳的感性を養うために倫理観育成プログラム、知識や技術に加え倫理観を含めた看護者としての態度育成の強化を目指して臨床能力向上プログラム、附属病院の安全対策委員会や感染防止対策委員会と連携しながら安全対策育成プログラムなどを設定し、それぞれのプロジェクトを立ち上げて実施した。これらのプログラムは、平成20年の第4次カリキュラム改正に際して、正規の授業科目に導入された。この教育内容を実現するには教員配置や施設設備の充実が不可欠であったが、近隣の専門学校との関係から学納金値上げに踏み切れず、それが看護専門学校の財政状況に大きな負

担を掛けていった。

他方、大阪医科大学（以下「法人」）では、医科大学を設置している立場で、看護基礎教育を一層充実するために、医学部看護学科の設置を検討していた。記録によれば、平成6年12月13日の理事会で検討された附属看護専門学校将来計画における大学化構想がある。具体的には、平成6年の本館・図書館棟建築において、医学部看護学科の設置を視野に入れ、大学附属図書館と看護専門学校図書室を統合するなどの作業が進んでいた。平成7年2月7日に第1回の看護学科設置準備委員会が開催され、議論がはじまり、平成8年5月1日には本格的な設置準備委員会を置き、教育内容について第1回学務小委員会が開催された。この時点での計画は、平成8年8月には中央資料館の撤去作業を開始し、平成9年2月には新校舎建築に着手、設置認可申請は平成9年4月30日を予定し、同12月に認可を受け、平成10年2月には校舎竣工、平成10年4月1日開設という綿密なものであった。しかし、当時の設置基準は厳しく、また設置準備体制が十分ではなかったため、寄附行為の変更申請と学科の設置申請のタイミングがうまく合わず、実



別館（旧看護専門学校校舎）

現には至らなかった。他方、全国的に医学部を設置する大学では看護基礎教育の大学化が進み、また、その他の大学でも看護系学部学科が新設され、平成23年度には約200校と増加を続けている。

平成11年、当時看護職者が看護専門学校の学校長を務める例はほとんどなかったが、看護基礎教育の大学化の実現に向けて田中忠彌理事長が勢川瑠美子看護部長を学校長に抜擢し、1年間看護部長が学校長を兼務した。この間に、学校長選考規程が制定され、学校長の任期等が定められた。平成12年には看護職者である勢川瑠美子が学校長の専任となり、看護専門学校の改革準備体制が整った。

平成12年、日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部から國澤隆雄監事を介して田中忠彌理事長へ、国鉄官舎跡地譲渡の意向が伝えられた。当時、本部キャンパスでは容積率をほぼ満たす建築物が占めており、医学部看護学科棟を建築するには中央資料館を取り壊すしかない状況であったが、医学部の6年一貫化に伴ない、さらぎキャンパスの機能を本部キャンパスへ移転するための校舎をも必要としていた。そこで、

法人は、4年制大学の看護基礎教育に転用可能な看護専門学校校舎を建築するための用地として同跡地を取得することを理事会と評議員会に諮り決定し、平成13年3月にそれを取得した。この動きを受けて、勢川瑠美子学校長は平成14年6月、看護専門学校改革準備委員会を招集し、看護専門学校における看護基礎教育の内容と教育体制の見直しに加えて将来構想の議論を再開し、また、学校説明会を開催する等優秀な生徒の確保にも努力した。委員会での検討の結果を受けて、田中忠彌理事長は評議員会の意見を聞いて理事会に諮り、看護基礎教育を専門学校3年課程（入学定員80名）に一本化し、看護専門学校の財政状況を回復して、4年制大学化に臨むことを念頭に、校舎の建築を決定した。

他方で、平成16年に看護師養成所2年課程に、10年以上の実務経験をもつ准看護師が看護師になるための通信教育制度ができたが、法人では、准看護婦養成を終了して以来十分な期間を費やして、准看護婦から看護婦への移行教育の責任を果たしたとして、平成17年度からの2年課程生徒募集停止を決定した。



別館1階（階段講堂）



医学教育を象徴するレリーフ（浮彫）

看護基礎教育の発展を目指して 大阪医科大学看護学部へ

平成16年10月に高槻市八丁畷町から、八丁西町への校舎移転および入学定員を40名から80名とする変更の承認を受け、新校舎建築は急ピッチで進められ、平成17年2月、高槻市八丁西町7番6号に看護専門学校新校舎が竣工した。総床面積2,700平米余りの、環境に配慮した校舎と講堂棟からなる学び舎で、平成24年3月の本校の閉校により全棟が大学看護学部棟となる。

平成17年4月、看護専門学校の改革と看護基礎教育の大学化に関する計画の実施は佐野浩一学校長に委ねられたが、学校長が医学部教員との兼務であり、かつ看護職ではなかったことから西山裕子副学校長、城戸滝枝、三輪田隆子両

担当課長を配置した。同時に、第二看護学科の生徒募集を停止し、長年、別館（国登録有形文化財）を教育の場としてきた第二看護学科最後の在校生たちは、第一看護学科の生徒たちとともに、新校舎への引っ越し作業を手伝った。平成17年4月1日には、私立学校法の改正があり、これによって学校法人大阪医科大学の寄附行為が改正された。寄附行為第4条「設置する学校」に「大阪医科大学」と並記されている「大阪医科大学附属看護専門学校看護専門課程」が、新校舎への移転を得て名実ともに独立した学校となった。

第二看護学科は平成18年3月に43名全員が無



看護専門学校校舎（平成17年2月竣工）



講堂棟



学生ホール

事卒業し、その歴史に幕を閉じた。同4月には看護基礎教育を三年課程に一本化し、大阪医科大学附属看護専門学校看護専門課程看護学科と改称した。第二看護学科と第一看護学科の教員はシームレスに結びついて、看護学科の新たな教員組織へと移行した。新生した看護専門学校では、ホームページを立ち上げて教育内容や施設の充実とその周知を図るとともに、財政再建と看護基礎教育の大学化への取り組みが強力に推進された。平成19年12月には自己点検・自己評価を行うなど、この間に在籍した教職員の看護専門学校の改善にかけた努力には特筆すべきものがある。

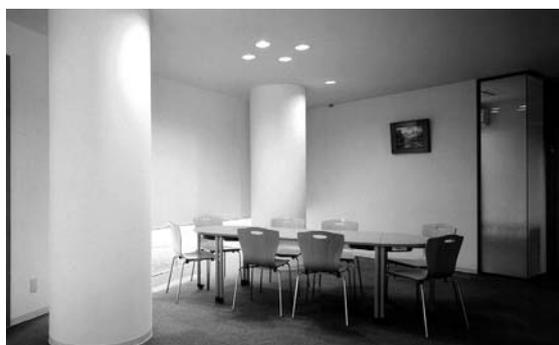
本校の財政再建のための学納金値上げや支出削減が進む中で、平成20年に第4次カリキュラム改正が行われた。その特徴は、統合分野・統合科目の創設と単位数の増加である。成人看護学の臨地実習が2単位減となる一方「看護の統合と実践」4単位とその実習2単位の新設により、全体で4単位増となった。修業年限に変更はなく、総単位数は93単位から97単位へと増加

した。本校では、この改正を視野に入れ、かねてより実施してきた各種プログラム内容の精選と充実を図り「看護の統合と実践」の中に組み入れた。そして、倫理・医療安全・接遇アサーション能力を含む看護実践能力の評価をOSCE（客観的臨床能力試験）で計ることとした。

他方、看護基礎教育の大学化の検討が進み、社会情勢と文部科学省の指導から、医学部看護学科よりも看護系学部看護学科の設置が望ましいと判断され、評議員会と理事会での決定を受けて、國澤隆雄理事長が、植木實学長との連携の下で佐野浩一学校長が統括する新学部設置準備委員会と新学部設置準備室を組織した。学部設置の動きを受けて、本校では閉校へ向けて、学籍簿や登録備品の整理を開始するなど、通常の教育に加えて、さまざまな変化が現れた。看護専門学校長は看護職者たるものが務めるべきであるとする法人の基本的な姿勢にもどすため、平成21年度にはこれまで看護部長を務めていた神谷美佐子を学校長に選任し、小野恵美子看護部長との協力を強化し、最後の卒業生まで



講堂棟北側の桜



学生ホール



課外室 庭

十分な教育を提供するよう配慮した。

平成21年、「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律」の一部改正により、看護師国家試験受験資格について“大学において看護師になるのに必要な学科を修めて卒業した者”がその第1項に明記された。つまり、4年制大学での教育を看護師教育の基本とすることが明確に打ち出されたとも解釈できる。佐野浩一設置準備委員長は林優子看護学部設置準備室長（現看護学部長）と田中克子副室長（現看護実践研究センター長）とともに看護学部の設置準備に専念することとなった。同年10月、大阪医科大学看護学部看護学科の平成22年度開設が認可された。設置審議会での審査の結果、本学のみが唯一「留意事項、特になし」とされる認可であった。これは、法人経営の健全性と看護学部構想における看護学教育の内容が高い評価を受けたことを意味する。

法人における看護基礎教育の大学化構想は、昭和23年の大阪医科大学生物学部看護学講座構想にはじまり、短期大学構想の立案を含め、六十数年の紆余曲折を経て看護学部の開設として結実した。看護学部の教育理念は、「高い知性

と豊かな感性を兼ね備え、変化する社会に積極的に対応し得る能力と、生涯を通じて最新の医学医療知識を摂取し最高の医療技術を保持しようとする意欲を有し、最善の医療を目指す、創造性に富む人材を育成すること」である。変化する時代感覚を見失わず、国民のニーズに対応できる看護実践能力を培うための教育として、「看護のアイデンティティ教育」と「医看融合教育」を実現しようとしている。その根底には旧制看護婦学校から看護専門学校へと脈々と流れてきた看護基礎教育の歴史がある。平成22年4月、看護学部の設置にともない、看護専門学校は生徒募集を停止した。募集停止によって在校生が1学年ずつ減少する中でも、本校の生徒たちが日々の勉学に勤しむ姿は頼もしく、教職員の励みになった。そして、平成24年3月31日をもって、大阪医科大学附属看護専門学校はその段落をおく。その歴史の中で本校の運営と教育に携わった方々、ご協力くださった方々、そして卒業生の皆様に、深淵の感謝の意を表し、そして看護学部の今後益々の発展を祈念して本稿を終える。

※役職名は当時のものとする



エントランス



看護学部研究棟



看護学部研究棟

校舎の移り変わり

本校は、昭和4年に大阪市北区萬歳町49にあった大阪細菌研究所附属梅田病院にて開校し、校舎は翌年に大阪府三島郡磐手村字古曾部350（現在の高槻市大学町）へ移転した。移転後は、生理学研究棟、恩賜館等、教室を転々とし、何かと不自由な状態が続いた。

昭和39年12月、大学本部キャンパス（高槻市大学町）の北東（八丁畷町）に鉄筋コンクリート3階建ての看護婦学校校舎が竣工した。1階は教務室と調理・細菌・化学の実習室、2階は講義室2室と図書室、3階は講義室とベッド実習室があった。当時は、看護婦学校二年課程と准看護婦学校の生徒が校舎を共用しながら授業を受けていた。

昭和50年看護婦学校二年課程（全日制）が再開校となり、看護基礎教育を更に充実させるため、八丁畷町にあった看護婦学校校舎を二年課程（定時制）の専用とした。また、大阪高等医学専門学校創立時に建立した記念すべき別館（国登録有形文化財）を大英断によって、二年課程（全日制）の専用校舎として根本的に大改造した。八丁畷町の定時制の校舎と別館全日制の校舎ともに防音二重硝子窓、冷暖房を完備した良好な環境であった。別館3階の大講義室を4室に分割し、2階をベッド実習室に改装、更に1階北側の大学講義室を全日制と定時制共用の図書室とし、図書、専門雑誌の充実を図った。昭

和52年には看護婦学校専任の司書が配属され書籍の分類・整理が行われるなど教育環境の整備・拡充をして、昭和53年の看護専門学校（専修学校）の認可へ向けて準備を進めた。

昭和60年、定時制の廃止により、八丁畷町の校舎が第一看護学科、別館が第二看護学科専用となった。

その後、平成2年8月に、引き続き第二看護学科の校舎として使用していた別館の北側に位置していた解剖2号館（現：第二研究館）の2階・3階部分が看護専門学校の教室、実習室、討議室、会議室として拡充され、2階部分が渡り廊下でつながれた。

平成5年には、大学本部キャンパス構内に看護専門学校用の附属施設として生徒専用更衣室と討議室を移転増設した。

また、平成6年9月に大阪医科大学本館・図書館棟が開館し、看護専門学校図書室は、医学部図書館と併設された。それに伴って医学・医療・看護の情報の統合と機能が一元化されることとなった。その後、平成7年夏には別館内の旧図書室を大研修室に改修した。

平成17年2月、八丁西町に新校舎が竣工し、八丁畷町にあった第一看護学科の校舎と大学本部キャンパス内にあった第二看護学科の別館校舎は、その機能を集約移転することとなり、校舎としての役割を終えた。



恩賜館



恩賜館看護婦学校に改装の為移動（昭和33年）



看護婦学校増築完成（昭和33年）



看護婦学校増築完成（昭和33年）

寄宿舎の移り変わり

看護婦寄宿舎は、梅田病院から移転してきた昭和5年より附属病院の北側にあった。看護婦学校では原則、全寮制のもとに教育が行われ、寄宿舎は病院看護婦と生徒で共用されていた。

昭和29年、高槻市八丁畷町（大学本部キャンパスの北東）に新しく寄宿舎「愛泉寮」が竣工され移転することとなった。看護婦学校の生徒は先輩看護婦と生活を共にし、規律ある日常生活指導を受けた。

昭和44年春には高槻市別所の地に看護婦学校の生徒専用の寄宿舎として35室・約140名が生活できる「清泉寮」が建設された。寮生活は自治会規則に則って生徒により運営され、毎月一回ホールに集い生徒間のコミュニケーションを図った。また、クリスマス会を催し、各クラスで練習を重ねた演劇等の披露も行われ集団生活の意義を深めていった。

昭和48年には清泉寮2号館、昭和53年には清泉寮3号館が増設され、常時200名余りの生徒が寮生活を送っていた。看護婦学校開校以来昭和57年までは全寮制が続いた。しかし、社会経験のある生徒や近畿圏内の志望者の増加に伴い、昭和58年からは教育的配慮のもと一年次のみ全寮制とした。平成5年からは、二年次以降の入寮は通学範囲等を考慮した許可制とした。

入寮を希望する生徒の減少により平成13年には清泉寮は閉鎖され、清泉寮の入寮生は看護婦寄宿舎である愛泉寮へ転居した。

その後も入寮希望者の激減によって、平成20年に最後の寮生を送り出した後、愛泉寮も閉鎖された。



愛泉寮木造本館（昭和29年9月竣工）



愛泉寮2号館（昭和39年3月竣工）



愛泉寮電話



愛泉寮居室



清泉寮居室



清泉寮1号館 談話・娯楽室



清泉寮1号館（昭和44年3月竣工）

第2部 寄稿

「83年の光芒」





祝 辞

高槻市長
濱田 剛史

大阪医科大学附属看護専門学校が、創立83年を以って発展的にその歴史を閉じられ、新たに同大学看護学部がその伝統を受け継がれますことを、心よりお慶び申し上げます。

その誇らしくも比類なき教学の歴史を後世に引き継ぐべく、記念誌を公になされることは、誠に意義ある企画であると共感いたしており、ここに一筆寄稿させていただきます。

貴看護専門学校におかれましては、現大阪医科大学の前身である大阪高等医学専門学校の設立から、僅か2年後となる昭和4年に大阪市北区に開校され、翌5年には田園風景の広がる現校地に移転されております。

その後、80年余りにわたって、この高槻の地で教学の歴史を重ねられ、その間、太平洋戦争や戦後の混乱、学制改革など幾多の困難を克服されるとともに、高い教育水準のもと、今日までに4千百余名の優秀な看護師を輩出されてこられました。こうした栄光ある歴史は、記念誌を彩る輝かしいページの数々として綴られる事と確信いたしております。

これも偏に、貴看護専門学校歴代学校長や関係者の皆様が弛むことなくご努力を積み重ねてこられた成果であると、そのご功績に対し深く敬意を表する次第です。

さて、日本は世界でも有数の少子高齢社会となっており、本市の高齢化率は23%を超え、合計特殊出生率も1.30と急速に少子高齢化が進展する中、生活習慣病などが増加しております。そうした状況のもと、小児科医、産婦人科医や

看護師の不足、偏在が顕著となるなど、医療関係者の養成と確保が喫緊の課題となる一方、医療や看護に対する患者のニーズは高度化しており、医療従事者に対して、より専門的な知識、技術の習得が求められるようになっております。

アメリカでは、「高血圧症などの慢性疾患や軽症の患者の診察や薬の処方もする」ナースプラクティショナーの制度がございますが、近年の報道によりますと、厚生労働省はリスクの低い医療行為に従事できる「特定看護師」制度の導入を検討されているところです。

貴校が発展的に移行されます大阪医科大学の建学の精神には、「国際的視野に立った教育・研究、及び良質な医療の実践を通して、人類の福祉と文化の発展に貢献する人材を育成する」とありますように、大阪医科大学の看護学部として「医看融合教育」の実現に向け、一段と強化、充実が図られた教育体制のもと、人間の生命を守り、広く社会に貢献できる看護師を養成いただけるものと大いに期待しております。

結びといたしまして、貴看護専門学校が一つの節目として閉校されましても、その素晴らしい歴史と伝統が永遠に受け継がれ、更なるご発展を遂げられますようお祈り申し上げます。

また、植木理事長や竹中大阪医科大学学長、看護専門学校神谷学校長をはじめ、関係各位の医療にかかる日頃からのご尽力に対し、厚く御礼申し上げますとともに、今後益々のご活躍を祈念申し上げ、祝辞とさせていただきます。



初心忘れず、看護の原点は 母校にあり

社団法人大阪府看護協会会長
豊田 百合子

大阪医科大学附属看護専門学校の閉校記念誌の発刊に際し、心からお祝い申し上げます。

貴学の83年にわたる看護基礎教育の歴史は、まさに近代日本の看護教育の歴史そのものといえます。常に社会の動向を展望し時代を的確にとらえた看護教育を实践され、高度医療の最先端で活躍する4,000余名もの優秀な看護師を育成してこられました。

ヒューマンケアに関わる人材を育成するには、保健・医療・福祉に関する知識・技術の修得に加え、専門職業人として高い倫理観をもって行動できる人間的成長が不可欠です。多くの優秀な人材を育成され、地域医療に貢献してこられた貴学の業績は、先生方はじめ関係各位の情熱と力強いご指導の賜と心から敬意を表します。

卒業生の皆さまも、看護実践や看護教育のリーダーとして、大阪府内のみならず全国各地で活躍しておられます。看護界にとって大変心強く、また頼もしいかぎりです。

さて、少子高齢化の進展、保健医療福祉の状況変化のなかで、良質の医療サービスが提供でき、地域社会に貢献できる看護師の育成は、看護基礎教育機関にとって重要な社会的使命になっています。皆さまもご承知のとおり、厚生労働省の「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」で、「看護技術や知識の習得はもちろんのこと、思考力と適切に行動する能力をもった人材を養成することが不可欠」とし、目指すべき看護基礎教育は大学教育に移行する方向でと明

示されました。社会も人々も、看護職にこれまで以上の資質や能力を求めています。知的・倫理的側面を基礎として、判断力や想像力、洞察力といった思考能力や看護実践力など、看護基礎教育の大学化には社会全体が大きな期待を寄せています。

私は、看護が専門職として自立し、社会のニーズに対応していくためにも、また、国際的見地から見ても大学教育制への変革を進めるべきだと考えております。このたびの大阪医科大学における看護の大学化実現は、貴学の素晴らしい実績が礎にあればこそ為しえたものといえます。

83年前に北摂の地に蒔かれた種は、看護の原点という見事な花を咲かせ、たくさんの実を結びました。そして、大阪医科大学附属から大阪医科大学看護学部への移行という英断の種が、83年の歴史と実績という豊穡な土壌のなかに蒔かれました。名を変え、形を変えても、大阪医科大学の看護スピリットが変わることはありません。数年後、どんな花が咲くのか楽しみで。貴学に在籍・在職された多くの方々の思いが込められた、世界に一つだけの花がきっと咲くことでしょう。

末尾になりましたが、貴学の歴史の最終章に拙文を掲載していただく機会を与えてくださったことに感謝いたします。関係各位の今後ますますのご多幸とご発展を心から祈念申し上げます。



大阪医科大学と附属看護専門学校

前高槻市長
奥本 務

大阪高等医学専門学校附属看護婦学校を前身に附属看護専門学校が誕生し80余年、今日までその時代時代での看護学教育に徹し、医療にかかわる優秀な人材を多く輩出させることで大変大きな役割を果たしてこられましたことに、まず、心から敬意を表すものでございます。まさに、「人は自分の人生を心身ともに充実させて活動し、その生きがいに満足できる最大の要素は自らの心身が共に健康だと自覚できることだ」という歴史であったと思います。

また、高槻市のこの地にあって、「医療・保健・福祉の在り方」に崇高な理念を抱き、その任に従事して活躍していただける人材を養成され続けてこられた貴校が、今日の社会的要請に応えるべく、より高度医療等を担いうる看護師の養成を目指されて、大阪医科大学看護学部として充実発展へと再出発されましたこと、心よりご祝福を申し上げます。

ところで、私事で大変恐縮ではありますが、今日まで大阪医科大学附属病院に心臓疾患での緊急入院をさせていただいたことを含め、三度お世話になりました。その都度、専門科医師の先生方を始め、看護師さんの方々に、大変お世話になった経験があります。中でもその任の責任を持っておられた当時の勢川看護部長様、神谷現学校長様を始め、多くの方々の心優しい細やかな看護等に対しまして深く感謝申し上げます。医療は医師の診断、治療に関わる方向付け等で大変お世話になるところですが、加えて薬

等の効力にも依存しますし、何よりも看護師さんたちの心からの温かい接遇等で対応していただけただけことが、私に大きな励ましと勇気付けを頂いたものと、今もって皆さん方のチームワークに深い感謝の念に耐えないところであります。

このたびは、大阪医科大学附属看護専門学校から大阪医科大学看護学部へと移行され、学士課程教育をもって更なる充実が図られ、今日の複雑な世情や難しい環境の中での対応等もある中で、「人間の生命の尊厳」と「人権の尊重」、そして「現代人」を深く理解することで、質の高い看護職の育成を目指し、広く社会に貢献されていくものと強く確信いたします。

このことは、大阪医科大学の建学の精神「学を離れて医はない」の通り、より深く学を積み重ね、加えて、世の人々の信頼を得、そして社会貢献を果たされることになるのだと思います。人々の健康問題の創造的解決には際限はなく、柔軟な思考力や幅広い知識や視野をもって、保健・医療・福祉等を統合する看護実践能力を有する看護師を育成されることにより、更により前進した学科に躍進されることだご期待いたします。

大阪医科大学が、世の人々の医療に対する絶対的な信頼を得られた組織として社会貢献をもって、更なる隆盛を極められますことを心から念じましてお祝いの言葉とさせていただきます。



大阪医科大学附属看護専門学校 の閉校に寄せて

関西医科大学附属看護専門学校学校長
關 壽人

今回、大阪医科大学附属看護専門学校閉校記念誌に寄稿させていただくにあたり、貴学の沿革をあらためて拝見いたしました。昭和4年4月より大阪高等医学専門学校附属看護婦学校として開校し、昭和初期、戦前、戦中、戦後、平成と激動の時期を経て、看護専門学校の使命を終えるに至ったことについては、歴代の教職員の皆様、卒業生の皆様には特別の感慨をお持ちのことと拝察いたします。

関西医科大学附属看護専門学校も、貴学に遅れること3年、昭和7年に大阪女子高等医学専門学校附属看護婦養成所として開設され、昭和59年に関西医科大学附属看護専門学校と改称し今日に至っています。

学校名に看護婦の呼称を用いた時代から現在の“看護師”への移行については、時代の変遷を感じずにはいられませんが、それは両校の輝かしい歴史を物語っていると思います。

大阪医科大学と関西医科大学の両校は、関西地域の歴史ある私立医科大学として現在でも比べられる立場にあります。このような状況の中で、両校ともに優秀な看護師（看護婦）を輩出し、昭和から平成の日本の医療を支えてきたことは紛れもない事実です。今後も両校ともに切磋琢磨し、さらなる発展を期待したいと思うところですが、貴学の閉鎖を聞くにあたり、幾ばくかの寂寥感は否めません。しかしその建学の精神・伝統はすでに開設されている看護学部看護学科に引き継がれていると聞き及んでおりますので、看護専門学校は閉校とはなっても、

大阪医科大学の看護教育がより一層の飛躍となることは明白と思います。

看護師の業務は、医師の補助的な職種と考えられていた時代からは大きく変革し、医療の高度化・専門化が進む中で、看護の内容も複雑かつ多様化し、今は医療スタッフの一員として高い倫理観に基づく卓越した看護の専門能力が求められています。従って、看護の教育内容もそれに伴い、柔軟に時代のニーズを捉えた教育が求められ、その期待に応える為には、より充実した看護の専門知識・技術を習得しやすい環境を整えることは必須です。貴学が看護専門学校を発展的に閉校とし、看護学部開設に至った理由の一つにこのような背景が存在しているのではと愚考いたします。

関西医科大学附属看護専門学校は現在の高殿の地から枚方市牧野地区への移転が予定されており、広いキャンパスでの新たな未来が開けようとしています。この移転は本学にもいずれは開設されるであろう看護学部の布石になるのではないかと学校長として期待しています。その時にはご指導いただくことも多々あるかと思えます。

最後に、両校は看護学部、看護専門学校と若干立ち位置は変わりましたが、優しい中にも、誇りと責任感を有した看護師の育成については、共通の認識であろうと思っています。今後も両校の良き関係を継続しながら、さらなる看護の道・看護教育を発展させて頂けることを心より期待しております。



大阪医科大学附属看護専門学校の 閉校に寄せて

高槻市医師会看護専門学校校長
甲斐 敏晴

昭和2年に開校した大阪医科大学（高等医学専門学校）とともに昭和4年に旧制看護婦学校として開校した大阪高等医学専門学校附属看護婦学校が共に歩んでこられた歴史に思いを馳せると、時代のニーズに対応した大きな変化とは云え、貴校の歴史が幕を閉じることは大変残念で淋しい思いがいたします。看護師養成83年間で4,000余名の看護師を輩出された業績は、高槻市・島本町を中心とした北摂地域さらに大阪府全域の保健・医療・福祉を担うだけにとどまらず、日本の看護界において大きな力となっていることは明らかです。

最新の医療設備が整った大学附属病院が全面的にバックアップする教育環境、教育機関としての医療知識や意識の高いスタッフが揃ったなかでの看護師養成は、国が指定する基本的な教育課程を優に超え、卒業生はその伝統を受け継いで、高槻市医師会に所属する種々の施設で勤務される貴校の卒業生の看護の質の高さと愛校心の深さに驚かされることも度々です。教育に携わられた歴代の校長をはじめ、教員の皆さまの熱心な指導が大きく実を結んでいる証拠であります。

学校運営とは、社会の動向に大きく影響を受けて新たな問題や課題を沢山抱えているものです。貴校の長い看護師養成の歴史においては日本社会そのものが激動の時代であり、特に第二次世界大戦後の混乱期から医療体制が著しく変化した時代であったことから、多くの問題に直

面される連続だったとお察ししますが、一貫して質の高い看護師養成をおられることなく掲げられ、途切れることなく継続してこられた足跡は多くの看護師養成関係のリーダーとして現在に至っており、その輝かしい功績に畏敬の念を禁じえません。

国策として取り組む看護師不足はなかなか解消されず永遠の課題のように思えますが、看護基礎教育4年化が掲げられる流れにおいて、貴校が閉校されるのは本当に残念な思いですが、歴史と記憶にはきっと永遠に残ることでしょう。大阪医科大学附属看護専門学校の卒業生の皆さまにおかれましては、社会が求める看護を追求なさり、益々ご活躍されることを祈念いたします。

高槻市の中核医療拠点としての大阪医科大学、および附属施設との連携は、当医師会にとっても大変恩恵深い存在であり、特に高槻市医師会看護専門学校は看護師養成の大先輩として貴校が歩んでこられた歴史そのものから多くのことをご教授いただき、今年、創立40周年を迎えることができました。この頁をお借りして、貴校歴代の関係者各位に厚くお礼申しあげます。地域住民および医療機関のニーズに応え地域医療を支えるためにも、本校は看護専門学校としての意義を全うすべく邁進してまいります。今後とも看護の諸先輩方のご指導を宜しくお願いいたします。



大阪医科大学附属看護専門学校の閉校に際して

大阪医科大学学長
竹中 洋

平成24年3月31日をもって大阪医科大学附属看護専門学校が閉校されます。私自身の気持ちを述べれば残念至極の一言につきます。平成16年度から19年度の間は附属病院長として、入学式、戴帽式や卒業式でお話をするがありました。また、4年間ほど耳鼻咽喉科の講義を受け持っていましたので、本学附属看護専門学校の教員の皆様や学生諸君と触れ合う機会が多かったからかもしれません。卒業生の皆様は看護職として社会で日々目覚しく活躍されています。とりわけ附属病院長時代には実に多くの看護師の皆様から多大なご協力を頂きました。苦楽を共にした「戦友」の多くが本学附属看護専門学校の卒業生であります。これら「戦友」達との日々は私の中で楽しい思い出としていつまでも残ることと思います。

さて、閉校に至るプロセスは「大阪医科大学看護学部の創設」と切り離して考えることは出来ません。18歳人口の減少、近隣地域の看護系大学の林立などが、時としてフォローやアゲインストの風となりながら、平成22年4月に開学した本学看護学部は、新生大阪医科大学の象徴となっています。自立した看護学の教育・研究は本学附属看護専門学校卒業生の皆様の希望であり夢であったことを思えば、その念願の成就により母校が閉校されるというのは、時代の移り変わりとは言え皮肉な巡り合わせとも考えられます。

さて、学校の対外的評価には幾つかの重要な要素があります。例えば、学生の質、学校の教育環境、そして、卒業生の活動や能力などが挙げられます。特に医療系においては高度な技術を持った職業人を養成することが使命であります。近年では、職業に直結した高度な技術を求めて4年制大学を卒業した人達が、看護をはじめとする医療系専門学校に入学してきています。言わば、看護職を志す時期もキャリア形成の過程も非常に多様化したこととなります。労働集約された職場で技術とともに人間性が求められる医療というものの本質を考えれば、看護専門学校という学校の在り方にもなお一定のニーズがあるとも言えます。

閉校が現実のものとなった今、大阪医科大学にできることは、卒業生の皆様にご不便を感じさせることのないよう閉校後の卒業証明書や成績証明書の発行を滞りなく実施するといった事務処理上の事項は当然のこと、何より、本学附属看護専門学校が多くの優秀な卒業生を輩出したという事実を永く後世に伝え、残すことでもあります。なにごとにおいても幕引は悲しく、また難しいものです。大阪医科大学附属看護専門学校がその歴史と共に育てて来たものを胸に抱きつつ、私ども大阪医科大学の教職員はここに心一つにして有為な医療人の育成に一層尽力する覚悟です。



誇りと絆を永遠に

大阪医科大学看護学部学部長
林 優子

大阪医科大学附属看護専門学校は平成24年3月で長い歴史に幕を下ろすことになりました。閉校にあたり、看護専門学校関係者の皆様と教職員の皆様、そして卒業生の皆様のご功績とご活躍に対し敬意をこめ、ご挨拶申し上げます。

大阪医科大学附属看護専門学校は昭和4年に大阪高等医学専門学校附属看護婦学校として開設されて以来、今日に至るまで4,000余名の看護師を世に送り出してきました。輩出された多くの人材は、医療・保健・福祉や教育の場で、管理職や看護専門職、教員として活躍され、今なお多くの卒業生がその責務を果たされています。これらの業績は、歴代の学校長をはじめ、教職員の皆様の熱意と不断の努力によって成し遂げられた看護教育の賜物と言えましょう。

戦前、戦中、戦後の変遷の中で、医学は進歩し、医療は高度化・複雑化してきました。社会からはその変化に対応できる知識と技術を持った看護師の養成が求められてきました。社会の要請に応え、さらなる看護の質的向上を目指した教育を行うために、看護専門学校は常に新しく生まれ変わってきました。この83年の歴史は、看護の役割や看護教育が時代とともに移り変わった看護の歴史そのものを表しています。

しかし、いつの時代にあっても看護師としてのあり方は変わりません。看護師は、病む人とその家族の苦しみや痛みに共感し、生死に真面向から向き合わなければなりません。また、人間の命や心の尊厳を保つという誇り高い職業倫

理が求められます。教育方針として掲げられた「生き方としての看護」は、看護師の態度や倫理の具現化を示すものであったと思います。この方針を礎に看護師としての生き方を学び、附属病院で多くの先達に支えられ、厳しくとも温かさの中で育てられたこと、これこそが皆様に受け継がれてきた伝統だと思います。

大阪医科大学は、看護基礎教育の大学化の必要性から看護学部設置を決断されました。多くの困難を乗り越えて、平成21年10月30日に看護学部設置が認可され、翌年4月に開学となりました。本学の建学の精神は「学を離れて医はない」であり、「国内外問わず如何なる地域においても活躍できる医療従事者を養成する」を目標としています。これらの指針の下、看護学部は看護学を探究する教育研究の場として学士課程教育、さらには修士・博士課程教育へと発展させていきます。そして、時代の変化を見失わず社会のニーズに応えられる実践能力と自立した精神を兼ね備えた看護師、保健師、助産師、さらには高度な看護専門職の育成を目指していきます。

これまでの長い歴史の中で培われた誇りと絆は、皆様の大切な宝に違いありません。一方で、看護学部設置は卒業生の皆様の大願であったと伺っています。看護学部が開学した今、看護専門学校が果たしてきた役割をさらに発展させるために努力することをお伝えして、挨拶とさせていただきます。



感謝の辞

—大阪医科大学附属看護専門学校閉校に際して—

大阪医科大学附属病院病院長
木下 光雄

大阪医科大学附属看護専門学校の閉校に際し、附属病院病院長として御礼のご挨拶を申し上げます。

本校は昭和4年3月26日に大阪高等医学専門学校附属看護婦学校として設立され、制度の変遷はあったものの、爾来80有余年の長きにわたり連綿として良看護師の育成に努めてこられました。看護専門学校の基本理念として、看護師として必要な専門知識と実践力を修得させ、よき社会人としての人格の形成に努めるとともに、保健・医療・福祉の分野はいうまでもなく、広く社会に貢献できる看護師を育成するということが掲げられています。この理念の下、人間性豊かな看護師の育成に傾注されてきたことは、誠に称賛に値することです。

附属病院は、看護学生にとって看護教育における大切な臨床実習の場でもあり、ここでは優秀な専任教員に加えて経験豊かな先輩看護師によるきめ細かな指導がなされてきました。最先端の医療と看護の実際を体験することにより、人間性豊かにかつ高度で実践的な看護能力を培うという基が築かれてきたように思います。このような臨床体験もあってか、卒業生の大多数が附属病院で勤務していただけることとなり、本院が地域の特定機能病院として広く認知され、着実に発展できたことについて多大な貢献をしていただきました。優れた看護技術力のみならず、個々人の持つ人間愛に満ちた対応が、

安全・安心の医療を支える大きな力にもなっています。また、医療制度の面からみますと、他に先駆けて7対1の看護を実施することができ、優れた看護体制を構築することができました。さらに、比較的直近のことになりますが、がんを始めとする種々の専門看護師が誕生し、本院における医療の質の向上にも寄与していただいています。がんの医療相談、緩和医療、感染対策、医療安全の推進等等、これらを支える優れた看護師と確固たる指導体制も、本校における教育の素晴らしさを実証しているものであります。

看護専門学校は閉校されることになりましたが、これに代わって、新たに看護学部が創設されました。このことは社会的な要請でもあるかと思いますが、急速に進歩・高度化する医療技術と疾病構造の複雑化に対し、看護を科学し、さらに高度な看護学を極めていくといった観点からも自然な流れであると思います。しかし、本校の崇高な教育理念、その精神が、新生看護学部を引き継がれ、ヒトのからだところの健康を支える優れた人材が育成されることを願ってやみません。

閉校にあたり、優れた看護師の養成という崇高な教育に関わり、本学の発展を支えてくださいました教職員や関係各位に、改めて厚く御礼申し上げます。



大阪医科大学附属看護専門学校 の礎は永遠に

大阪医科大学附属病院看護部長
小野 恵美子

大阪医科大学附属看護専門学校が、平成24年3月をもって閉校するにあたり、一抹の寂しさを禁じ得ません。しかしながら、長い伝統と文化を持つ大阪医科大学附属看護専門学校が成長、発展した証として看護学部が誕生したのだと認識しております。

大阪医科大学附属看護専門学校は、「優秀な看護師を育成する」事を目的として、昭和4年大阪高等医学専門学校附属看護婦学校の開校以来、看護基礎教育の充実に努められ、毎年多くの卒業生を附属病院へ輩出して頂きました。このことにより、附属病院は高度医療を提供するための人材確保が安定して継続でき、看護部の発展に繋がっています。また当院は教育機関として、多くの臨地実習生を受け入れています。昭和54年当時、臨床指導者としては組織の中で位置づけられた施設が極めて少ない時期に当時の三好トラキ看護部長により、臨床指導者を職位として位置付けられたことにより、臨床と学校の密接な連携の基、看護基礎教育の充実に努めることができました。振り返ってみますと、二年課程の看護学生達は授業を終えた後、病院でアルバイトをしていた時期がありました。各病棟で日常生活の援助や、侵襲の低い看護技術の実施、ナースコールへの対応、薬剤部での薬剤の受領や緊急入院があった時などは、看護チームの即戦力として看護師（当時は看護婦）達が、看護学生へ大きな期待をよせていたと思います。現在の医療現場や看護基礎教育の

現状からはほど遠い存在ですが、このように附属病院でのアルバイトを通して、看護学生達は、モデルとなる先輩を見出し、看護への思いを熱くしていたと思います。前述した学校と臨床の連携では人事交流をはじめとして、臨地実習での検討会や学内行事、病院内行事など、様々な機会に看護基礎教育と臨床との一体化した連携を図り、看護教育の充実に努めることができました。その中で、学内行事の一つであるナイチンゲール生誕祭では、記念式典に看護部長や臨床指導者が参加し、看護学生と共に、看護に対する思いを新たにする機会となりました。記念式典終了後には、看護教員と看護学生が、各病棟へ訪問して、患者様おひとりおひとりにメッセージとお花をプレゼントすることで、患者様は勇気づけられ、その感謝の気持ちを看護学生へ届け、相互の励みとなりました。看護専門学校と臨床の連絡会では、臨地実習における問題の共有を図り、解決策を模索し、共に学生の成長を支援してまいりました。このように長きにわたり看護教育の向上に努め、看護師を輩出して頂きました大阪医科大学附属看護専門学校関係各位の皆さまに深く感謝を申し上げます。

今後も、臨床と看護基礎教育の連動を図り、大阪医科大学の看護教育が更なる発展を遂げるよう、臨床現場の教育環境を整えて参りたいと思います。



大阪医科大学附属看護専門学校の 閉校に寄せて —閉校までの10余年—

学校法人大阪医科大学常務理事
大阪医科大学附属看護専門学校前学校長
佐野 浩一

平成11年4月、当時全国でも珍しい看護職者たる看護専門学校長が本校に就任しました。平成14年には、理事会に看護専門学校改革準備委員会が設置され、看護専門学校の経営改革がはじまりました。委員会では、当時の本校が抱えていた様々な課題を解決するため、学校長の看護基礎教育に関する深い見識に導かれて、4年制教育に耐える新校舎の建築、2年課程の閉鎖、看護基礎教育の3年課程一本化などが次々に検討されました。

任期満了による学校長の交代では、候補者が看護職者でないことを理由に固辞するなど紆余曲折はありましたが、平成17年4月一時的に看護職者でない学校長が委嘱されました。学校長の使命は、2年課程を閉鎖してスムーズに3年課程に一本化すること、看護基礎教育を大学化すること、専門学校部門別収支の赤字を解消することの三つでした。学校長が見守る中で、看護職者である副学校長と二名の教務担当課長をはじめ教員方と事務方が力を合わせ、様々な課題を解決しながら改革が進みました。

2年課程の閉鎖と3年課程一本化による教員組織や事務組織の改組は、副学校長のもと教員方と事務方が力を発揮しました。赤字解消については様々な議論はありましたが、教育内容を向上しつつ4年間で赤字を約三分の一に圧縮できたのは、教員方と事務方に加えて在校生たちの力によるものでした。本校の閉鎖を前提とする看護基礎教育の大学化は、一時期は共同学部としての大学看護学科の設置も検討されるなどの経緯があり、本校関係者のみならず各地の学校

法人の理事方、事務方や教員方そして立法方や行政方より多大なご指導とご協力を頂き、平成22年4月に看護学部が単独設置されました。これら看護専門学校に課せられた三つの使命を果たすに際して関係各位より頂いたご理解・ご指導・ご尽力への感謝の念は言葉に尽すことができないほど大きなものです。本校の学校長は看護職者たるべしという考えに立ち戻り、看護職者を最後の学校長として今まさに無事閉校に至ろうとしています。

看護学は人々のあらゆるライフステージに係わりそれぞれのステージにおける健康維持と療養の支援を目指す実学であると考えられ、新たな展開を見せながら体系化されつつあります。よき看護職者を養成するために本法人が設置する教育機関という観点に立てば、本校閉鎖に至る80余年の歴史は節目を置いて、看護学の体系化に寄与する看護学部へと確実に続いていくものであると信じます。

本校において深いご理解とご尽力をくださった教員方と事務方、その尽力に応じて立派に育った卒業生、そして本校の経営にご協力頂いた皆様に、私が見た看護専門学校最後の10年余の大きな流れをここに報告いたします。その流れの中で関係者各人の様々な思いに触れましたが、学校長としての立場上、個々の思いすべてに応じきれなかったことをお詫びするとともに、重ねて深甚の感謝を捧げ、寄稿いたします。

書不尽言 言不尽意



大阪医科大学附属看護専門学校の閉校に 寄せて ー副学校長として、歴史の中で過ごしてー

大阪医科大学附属病院看護部長代理
大阪医科大学附属看護専門学校同窓会副会長
大阪医科大学附属看護専門学校前副学校長
西山 裕子

80余年の大阪医科大学の看護教育の中で、生徒として、専任教員として、教務課長・副学校長として、合わせて22年過ごしました。中でも副学校長（教務課長）の任を受け活動させていただいた10年間は、私にとって大変貴重な経験となりました。

平成17年、諸先輩方の念願（執念）であった新校舎が完成いたしました。大阪医科大学の看護基礎教育の発展、附属病院の看護の質の向上を目的とし、そこであらたな看護基礎教育を開始するに当たって基本姿勢を『生き方として看護を選ぶ。』といたしました。この言葉はマザー・テレサ女史の「私は仕事としてこの道を選んだのではなく、生き方として選んだのです。」に基づいたものでした。長い歴史を持つ大阪医科大学附属病院の看護を見つめ直した時、看護師としての自覚と使命感、そして誇りが基盤にあったことが確認できました。大阪医科大学の看護教育は看護師としての「品格」、つまり自分の利益だけを追求しない、やさしく思いやりがあるという美徳を始めとして、正義感、責任感、倫理感、勇気、誠実、忍耐力、持続力、節制力をもった看護師の育成がおこなわれていたことをあらためて深く認識できました。そしてそのことを継続していくことが、歴史の一端を担う者に課せられたことであると、襟を正す思いがいたしました。

与えられた絶好の教育環境で、先進医療を提供する大学附属病院の看護師に相応しい「智慧・技・こころ」を育むために、教員の叡智を結集して教育を行いました。例えば、入学時か

らの段階的構築による様々な能力開発・育成を目指した「コミュニケーション能力開発プログラム」「倫理観育成プログラム」「医療安全育成プログラム」を全教員体制で展開しました。また、看護専門学校や看護系大学でもまだ導入が少なかったOSCE（客観的臨床能力試験）やPBL（問題にもとづく学習）なども行うことができ、地域の看護教育関係者の方にも見学していただき、共に看護基礎教育の充実を考える機会をもつこともできました。同時に地域の中での看護教育という視点も重視して、学校祭（白友祭）やクリスマスコンサートなど様々なイベントを開催し、多くの地域住民の方々に参加していただき、交流をもつこともできました。

教育の真の成果は10年先、20年先に現れると言われる。看護基礎教育の中で学習したことがその後の経験の中で成熟し、看護職としての品格となり、一人ひとりの看護歴史を綴っていくことが、「生き方としての看護」となっていくと信じています。

新校舎建設に当たって勢川瑠美子元学校長の祈念であった「看護学部」への移行も、関係各位の熱いご理解とご支援をいただき現実のものとなりました。専門職業教育としての大阪医科大学看護基礎教育課程は閉校となります。しかし、80余年培われた大阪医科大学の看護精神は、今後更に看護学部教育の中で発展し、未来へと引き継がれていくものと確信しています。

ー大阪医科大学の看護基礎教育に携わることができた幸運に感謝しつつ。ー



大阪医科大学附属看護専門学校へのお礼と期待

高槻市保健所所長
高野 正子

日本で最初の5年制医学専門学校として、昭和2年に大阪医科大学の前身である大阪高等医学専門学校が開校され、追って昭和4年大阪高等医学専門学校附属看護婦学校が設立され80余年たちました。今日までのこの輝かしい看護師養成の歴史と実践にまづもって敬意を表する次第でございます。

80年と一言で申しますが、この間のわが国は、戦前戦後の混乱期その後の急激な経済成長期等社会的変化は大きく、また医療・科学も著しい進歩を遂げましたが、貴校はそれぞれの時期に適切に対応した看護師養成を図ってこられました。そして近年、看護師の高度教育が要請される中、大阪医科大学はその要請に応えて更なる発展を目指し、平成22年4月に看護学部看護学科を開設されました。それは80余年のしっかりと地道に築き上げた看護教育があったからこそと思われれます。また、大阪医科大学附属病院から優秀な講師陣や指導者の協力を得ることにより高度な看護師教育が可能であったことが、4千数百名の優秀な看護師を養成し、その方々が各地域、医療、教育等多分野で活躍されている結果に結びついていると考えます。今日までの間、教育に携わられ、貴校を支えてこられました歴代校長様を始めとする教員の方々に深い敬意の念を持ちます。また、この輝かしい歴史の幕を引き次に繋げるためにご奮闘なさいました佐野前校長様、神谷校長様のお慶びは格別のものと推察いたします。「大阪医科大学附属看護専門学校」という名称は消えますが、今まで培われた看護教育はこれまで貴校に携わってこられた方々の熱い思いと共に大阪医科大学看護学部看護学科に引き継がれ、更なる飛躍を遂げられることをご期待申し上げます。最後になりましたが、植木理事長様、竹中学長様の強いリーダーシップの元、大阪医科大学が医学部、看護学部を両輪として更に発展をなさいますことをご祈念申し上げます。



看護専門学校の思い出

社団法人高槻市医師会会長・東和会理事長
飯田 稔

今年は3月11日の東日本を震撼させた大地震による津波、また原発事故とも重なり大惨事となりました。その被災地で看護師さん達が自分や家族を顧みる暇もなく黙々と天職を全うしておられる姿は優しくもあり、雄々しく、感動いたしました。

私は昭和44年に大学を卒業し10年以上大学病院に勤務しておりましたが、記念誌に書かせていただける程の関係はありませんでした。個人的な接触は深かったような記憶があります（冗談です…）。学校と仕事を両立し、更に夜間の高校に通っておられる方もいて本当に尊敬いたしました。当時、三好トラキ総婦長の風貌は威厳があり、統率力はそのものにあつたように思い出されます。混合病棟には厳しい婦長がおられ、ベッドが空いたら各科がしのぎを削って取り合いました。なにしろ怖い婦長さんで、そっとドアを開けただけで恐怖を感じ、始めの頃はそっとドアを閉めたものです。何度も訪問するととても優しい婦長さんで、色々教えていただき大変勉強になりました。長きにわたって勤められた勢川看護部長は人格清廉、長身で美人で聡明、洞察力や判断力、包容力などバランス良く天性の看護部長であったと思います。晩年大学院に通われた事をお聞きし、天分とは秘めたる努力の積み重ねかと再度尊敬しました。看護専門学校を大学にする事をライフワークとしておられ、“あの執念あればこそ”と思います。

私は看護学校OB会の集結力と団結力は仁泉会の比ではないと感じております。皆様それぞれ遠方で活躍しておられますが、閉校となっても末長く団結力を継続され益々お元気で御活躍ください。

最後になりましたが、投稿の機会を与えてくださいました神谷学校長に感謝いたしますと共に、拙い文章となりました事を心からお詫び申し上げます。



閉校記念誌刊行にあたって

社団法人大阪医科大学仁泉会理事長
榎原 敬郎

大阪医科大学の前身、大阪高等医学専門学校
の設立者は吉津度先生である。大正15年(1926)
10月1日、財団法人大阪高等医学専門学校設立
の願書を文部省に提出し、昭和2年2月28日、そ
の設置を認可(官報)されたのである。昭和4
年3月26日文部大臣より大阪高等医学専門学校
附属看護婦学校設立を認可され、昭和4年7月、
附属看護婦学校が開校された。

生徒は給費生と私費生の二種類あり、入学資
格は(1)年齢満14歳以上、満20歳以下の未婚
者で在学中家事係累なきもの(2)身体健全に
して品行方正なるもの(3)高等小学校を卒業
したる者又はこれと同等の学力を有する者で、
給費生は在学中、校内寄宿舎に寄宿し、所定の
学資、食費を給与し、又、所定の制服を支給す
る。在学中病気に罹った時は本人帰省療養の場
合を除き総て校費を以て診療する。私費生は授
業料月額2円を納入し、通学を原則とする。修
業年限は2ヶ年となっていた。給費生は卒業後
1年6ヶ月間、大阪高等医学専門学校附属三島
病院に勤務することを義務づけられていた。な
お卒業生は第1回生23名(昭和6年)、第2回生は
23名、そして現在までに4,141名に達すること
のこと。

このような設立から83年の歴史を振り返ると
感慨一入のものがあります。卒業生の皆様にと
っては数々の思い出と共に、名状しがたい寂
しさを感じられていることと思います。

仁泉会は医学部同窓会として今後、看護専門
学校、看護学部は卒業生の名簿管理をどうされ
るのか、お力になれば幸いですと考えています。
(平成23年9月5日に寄稿いただきました)



懐古と感謝

大阪医科大学名誉教授・元学校長
武内 敦郎

近く大阪医科大学附属看護専門学校の閉校が
迫り、誠に感慨無量の思いです。しかしこれも
昨年新設された大阪医科大学看護学部への発展
的経過のひと駒であり、本校は立派に使命を果
たしたと祝いたく思います。

振り返りますと私が学校長を拝命した時まで
は、歴代の附属病院長が学校長を兼任されるの
が慣例になっていました。しかし私は病院長に
なる以前に学校長を拝命し、定年で退職するま
での18年間を務めることになりました。その理
由は、看護学校を従来の各種学校から法的に認
められた専修学校(専門学校)に昇格させるこ
と、准看護課程を廃し高校からの課程を作るこ
と等の課題が与えられていて、それに歳月を要
したからであります。その間数回にわたり文部
省(当時)の視察・指導を受けつつ、図書室の
拡充、教員人事の更新・充実に努めましたが、
特に病院での卒後教育とのつながりを重視し
て、看護部との連携を密にするよう心がけてき
ました。その後、歴代の校長や看護部長のご努
力でその成果が実っていることを喜んでおりま
す。

現在私自身が高齢患者としてしばしば本学附
属病院でお世話になっていますが、多くの教え
子たちが立派に成長して病院の幹部となられて
おり、他の病院の模範となるような「患者の立
場に立ったケア」が行われていることを実感
し、感謝している次第です。

いよいよ本校の歴史は幕を閉じますが、これ
までの本校の教育理念がさらに新しい看護学部
に受け継がれるであろうと願っております。



大阪医科大学附属看護専門学校の閉校に寄せる

大阪医科大学名誉教授・元学校長
小野村 敏信

いよいよ大阪医科大学附属看護専門学校がその門を閉じることになり、まことに感慨一入です。私の経験しました20年余りの大阪医科大学における医療の中で、看護部門は筋の通った立派な役割を果たしておられました。また大学を退職しましたのちも本校卒業の看護師の何人かの方々と接する機会があり、いろいろな分野で活躍しておられるのを見てきました。

私は長い期間にわたって本学の看護教育の発展に尽力された武内敦郎先生のあとを受けて、平成6年から7年にかけて学校長を務めました。中に入って見て、本学における看護教育が決して容易ではない環境にありながら、長い年月をかけていかに積み重ねられてきたかを始めて知り、それが附属病院の質の高い看護に生かされていることを納得しました。2年間という短い期間であり、また最早古い時代の話ということになりますが、教員、職員、生徒の皆さんと一緒に次のステップアップに向けて模索し、努力したことが心に残っています。

社会の変容と医学の進歩、医療環境の急激な変化に伴い、医療に関する各職種の教育の上でも大きな変革が求められ、われわれの大学でも2年前に看護学部の発足に至ったのはまことに同慶の至りであります。今ここに閉校となる附属看護専門学校の経緯が大学の歴史の中にしっかりと刻まれ、83年間の看護への思いが形を変えて新しい看護学部に生かされることを心から願っています。



「感動」「感激」そして「感謝」

学校法人大阪医科大学事務局長
礒田 洋三

私に看護専門学校の最後を飾る大切な記念誌への投稿の機会を与えて下さり、心より感謝申し上げます。振り返れば、私の看護専門学校での思い出は、学校が新校舎に移り、そこで執り行われた数々の行事との係わり合いの中で生まれました。本学の創立80周年記念の最初の公式行事として「白友祭」がありました。全員参加の手作りの催し物が満載で、地域の人々との触れ合いを大切にしながら、生徒さん自身も大いに楽しみ、本当に素晴らしい行事でした。あの時以来、私もずっと参加致しましたが、その精神が途絶えることなく継承され続けたことに感心しております。また「戴帽式」ですが、私も初めてその式典に参加させて頂いた時は、感動に胸が震えましたことを、今も強く覚えております。厳かで、清らかで、静謐な雰囲気は、その昔ナイチンゲールが実践した、人を看護する心が「戴帽式」を通じて、今もそのまま受け継がれていることに深く感激しました。そして「入学式」と「卒業式」ですが、何と言っても、「卒業式」の生徒さん達の涙は忘れられません。あれほどまでに、純粋に涙を流せることに、私の心の琴線に触れ深く感銘を受けました。学友と別れることや今までの苦労を思い出しての涙だけでなく、これから人のため、世のために働きたいという純真な心、嬉しい心が、あの無垢な涙を流させるのだと、式典を通じて感じました。私にとって看護専門学校の思い出は、一言で言えば「感動」「感激」と言うより他にありません。その意味では、私は最後に、看護専門学校の方々に「感謝」と言う言葉を、是非ともお送りしたいと思います。



医学部の講義よりも 看護学校の授業が 難しい

大阪医科大学名誉教授
森 浩志

私は平成11年から第1看護学科で、基礎病理学の非常勤講師を勤めさせていただきました。当初は看護教育と医学教育の違いが十分に分からず、医学教育の妹分くらいの心つもりでの授業でした。教科書の丸暗記の強要ではなく、重要な概念について時間をかけて解説することに努めました。そのため他の部分が駆け足になるなど、下手くそな授業だったと申し訳なく思っています。そのうち、国試出題基準が変わったこともあり、二つの教育理念・内容の違いに気づきました。自分で国試問題が解けない、国試並みの進級試験問題を作れないと感じるようになりました。忸怩たる思いからやっと解放されます。

私が感じたジレンマは、よく勉強して欲しい、そのために学習到達度を適正に評価して進級判定したい。しかし、そうは言っても、多感な若い女性ばかりの中で一人二人を原級留め置きすることが正しいのか、という疑問でした。二、三年に一人程度、退学者が出るようです。どんな理由からか、せっかくの入学定員を無駄にするのはもったいないことです。

医療知識・技術の進歩に対応すべく、修学年限が長くなるのは已むを得ません。本校が4年制学部へと席を譲るのは淋しいことですが、看護師の地位向上につながるので、喜ぶべきでしょう。しかし、ともすれば、4年制学部で重視されるのは学問（知識）であって、行儀作法は二の次という空気があります。私は行儀作法も社会常識も、専門知識と同等に大事と考えます。本校の先生方がこれまで指導してこられたことです。それが4年制学部を受け継がれることを念じます。



大阪医科大学附属看護専門学校の閉校を迎えるにあたって

大阪医科大学解剖学教室教授
大槻 勝紀

看護専門学校が開校以来83年間という長い歴史とその間にご卒業された学生が4,000余名とお聞きし、「ご苦労様でした。」という言葉以外に何もみつかりません。学生さんの多くは本学の附属病院に就職され、地域医療に貢献してこられました。私が非常勤講師として看護専門学校にお世話になったのは大学院生の頃からで、約30年前のことです。当時は第一と第二看護学科があり、第二看護学科の学生さんに解剖学の講義をしていました。当時の頃を振り返りますと、第二看護学科の学生さんは勤労学生として授業を受けていたせいか、よく講義中に居眠りをされていました。若気の至りか、そのような事情もよくわからず、叱って授業を止め、自分の教室に戻ったことがありました。しかし多くの学生が教室に来られて謝られ、授業を再開したことが昨日のこのように思い出されます。その後、第二看護学科は廃止され、第一看護学科だけになりました。本来はその時に私の解剖学の講義もなくなるはずでしたが、丁度その頃、大学でも教室の統廃合がなされ、第一、第二解剖学教室が一つの解剖学教室に生まれ変わりました。ご縁でその後も時々、講義をさせていただきました。また夏季講習や国試対策講義は毎年させていただいています。この原稿を書きながら、そう言えば来週、夏季講習を担当することを思い出しました。そして来春が看護専門学校の学生さんに対しての最後の国試対策講義だと思えば、一抹の寂しさを覚えます。学生諸君は胸を張って卒業し、素晴らしい国試結果とともに閉校を迎えていただければと祈念いたします。



看護専門学校閉校に伴う挨拶

大阪樟蔭女子大学学長
徳永 正直

80年を超える歴史を持つ大阪医科大学附属看護専門学校が、時代の要請にこたえて看護学部に移行すると同時に閉校するとの知らせを受けました。教育学担当の非常勤講師として、看護専門職を志す多くの学生さんたちに関わることができたことに改めて感謝したいと思います。教育学が看護職の仕事に直接役立つことは少ないかもしれませんが、「教育」と「看護」に共通する点は、人間として「生きる」ことの質(QOL)の向上を支援することであると確信しています。とはいっても、教育学の授業ではかなり多くの学生さんが睡魔との闘いを強いられたことは否めないかもしれません。私の声質のせいなのか、それとも授業内容に興味を持てなかったのか？ 反省すべき点も少なくありません。

しかし、かなり長期間にわたるかわりの中で、時々食事を共にして、お互いに親しく語り合うことができる卒業生の方たちにも恵まれています。また、私の授業をきっかけにして大学院で教育学を学ばれた卒業生もいると聞いています。このことは私にとっては最も嬉しいことの一つです。

人生には予測不可能なことが起こりますが、機会あるごとに私の話に耳を傾けていただいた教務の先生方にも、改めてお礼申し上げたいと思います。

変えることのできるものについては、それを変えるだけの勇気を持ち、変えることのできないものについては、それを受け入れる冷静さを持つこと。そして、変えることのできるものと変えることのできないものとを識別する知恵を持つことが肝要だと思う今日この頃です。



看護専門学校で教える中で学んだこと

大阪医科大学衛生学・公衆衛生学教室講師
渡辺 美鈴

看護専門学校が閉校される淋しさを感じながら、非常勤の日々を振り返ってみました。私は昭和46年から大阪医大に勤務し、約40年間に在籍しています。初めての講義は夜学の部でした。その後、断続的な非常勤でしたが、最後の数年間、また教壇に立ちました。最近では定年前の私と閉校する看護学校を重ね、人生の節目を感じています。担当は公衆衛生以外に看護研究や関係法規と多岐に渡りましたが、これらの教育を通じて自問自答していた「公衆衛生」の概念がやっと分かったような気がします。公衆衛生は地域社会の組織を通じて健康支援や生活支援の技術を提供し、個人や集団の幸福(生存権・憲法第25条)に寄与する哲学的思考であるという概念に到着しました。地域社会の組織がどのように変化しようとも、その時代の最高の生活支援の技術を提供することが公衆衛生活動であると考えようになりました。保助看法を含めた医療関係者の法律の第1条には「医療及び公衆衛生の普及向上を図ること」を目的とすると謳われています。医師や看護師を含めた全ての医療関係者は公衆衛生の担い手です。担い手には心身共に健康であることが要求されます。自分が健康であってこそ生活支援者になれるのでしょうか。私は、この点を講義の中で伝えられなかったという後悔があります。しかし、今後、老年期の自分自身に対して、探検心を持ち、喜びを語る「おばあちゃん」を目指し、健康寿命の延伸ができるよう公衆衛生活動したいと切望しています。このような境地に達したのも看護専門学校の非常勤講師の経験があったからです。感謝しています。



母校に想いを寄せて

元教務課長
橋本 豊子

皆さまにはご清祥にお過ごしのこととお慶び申し上げます。

長年の懸案でありました大阪医科大学看護学部がすでに開設され、それに伴い現看護専門学校が平成24年3月に閉校を迎えると聴き、一抹の寂しさを感じております。昭和4年の開設以来社会の変遷のなかで、母校83年の長き歴史に感慨深いものがあります。

顧みまして、私個人にとりましても人生の大半を大阪医科大学で過ごし、上司、先輩、後輩の皆様へ恵まれ、教職時代は校長先生はじめ多くの方々のご指導とご支援いただきましたことを心から感謝申し上げます。思い出されますのは、平成8年に白友会（同窓会）の設立開催の準備に携わり、その準備過程で当時の三好元看護部長、勢川看護部長はじめ諸先輩の皆さまに母校の経緯や看護の変遷を聴かせていただき、さらに貴重な資料や写真に触れ、先人の方々のご尽力と歴史の重みを感じたことを鮮明に覚えております。設立総会では、同じ学び舎で寝食を共にした同窓生の皆様の笑顔と友情の輪が広がり、時を超え青春時代に戻った瞬間でした。今もその感動が蘇ります。その後も白友会は役員の皆様のご努力により継続されていますが、閉校に伴って検討事項が残されています。

ぜひ次世代の看護職を担う皆様へ、母校の伝統と歴史を、未来に発展的に継承していただきたいと願うものであります。

最後になりましたが皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



男子ナース誕生のいきさつ

元教務課長
宮武 明

学生時代に相撲部の主将だった私が、青年期に無理をして肺結核を発症、高槻保健所で治療を受けながら、有志と結核療養者会の活動を真面目に行っていたこともあり、当時の保健所長田中忠彌先生（後の本学理事長）のお世話で昭和30年、本学に看護人として採用された。そこから素晴らしい先生、上司、仲間との出会いが始まり、灰色からバラ色の人生に好転した。

男子准看の誕生：当時、精神科男子病棟には男子6名の看護助手が勤務していたが、三好看護部長（当時）と満田教授のはからいで、精神科教室内で無資格者に対し、教育が行われた。看護は三好部長が、また、医学は精神科医師が担当され、殆ど毎日1～2時間、1年余に亘って講義を受けた。そして5名を准看護婦学校（教務主任は有馬先生）へ入学させて下さり、こうして男子准看が誕生した。

進学コースの開設：昭和33年、本学に全国に先がけて二年課程（進学コース）が作られ、（教務主任は市原先生、なお勢川先生は准看護婦学校兼任の専任教員）、私はさらにこゝに進学した。これによって、幸運なことに当時は全国でも珍しい男子のナースとなることができた。

看護専門学校で：精神科病棟の看護長だった私を、昭和52年に大学の方針として、武内元学長が教務主任に迎えて下さったので、平成3年迄の14年間、看護学生と関わりを持つことができ、万年青年の元気を貰うことができた。

感謝!!



私を支えた 恩師のことば

元担当課長
城戸 滝枝

昭和51年に看護専門学校専任教員の辞令をうけ平成21年に退職するまでの33年をふり返れば、その道程は長いようで、視点をかえてみれば「あっ」という間でした。

就任当時は、1クラス40名を受持ち、講義・実習・生活指導など一人で担当していました。試験問題作成にしても最初は鉄筆で書き、ガリ版で印刷していたのが、手書き・ワープロ・パソコンと変化していったのがなつかしく思い出します。生徒との関わりについても、その都度起こる事柄に自分なりに一生懸命取り組んでいましたが、なかなか思うようにいかず悩んでいた時、恩師である勢川瑠美子元学校長から「今やっている教育は10年後に結果がでるのよ」という言葉をいただきました。それからは、その言葉を心の支えとして、誠心誠意、生徒に向き合っていた時、臨床指導者となり後輩を育てる立場になった卒業生より、「あの頃、先生に言われたことと同じことを生徒に話しています」という言葉を聞き、今までやってきたことは間違いなかったと実感できたから、続けて来られたのだと思います。

私にとって看護専門学校は、多くの生徒に自分の思っていることを正確に伝えるコツを学んだ場所であり、専門学校のスタッフや事務の方、卒業していった多くの生徒に心から感謝しています。

大阪医科大学に就職してからの思い出が時代の流れとはいえ終わるのかと思うと、さびしい限りですが、歴史資料館に私達が在籍した証しとしての机を残せたことをうれしく思います。

皆さまのご多幸とご活躍を祈念し、閉校に寄せる言葉と致します。



思い出の灯火よ 常しえに

元担当課長
三輪田 隆子

「光陰矢の如し」と言われますが、退職して早3年半が過ぎようとしています。

私の第2の母校ともいえる看護専門学校が、平成24年3月末で閉校になると聞き、走馬灯のように在職時の頃が思い起こされます。

臨床の現場しか知らなかった私が、教育の場に転属した当初は、まるで新しい社会に来たかのように、無我夢中の日々でした。

最初にクラス担任に任命された時は、入学してきた学生以上に不安な思いが交錯していました。そのような私の温かい支援の手となったのは、先輩や同僚の励ましであり、何よりも学生の成長でした。

当時、新入生は全寮制で、生活環境の変化に順応できるよう手助けすることも教員としての役割でした。学校生活も含め、1つの問題が解決すれば、また次の難問が待ち受ける状況の中で、学生は努力してお互いの絆を深め、人としても成長していきました。教員としてその姿を間近に見ることは、この上ない喜びであり、やりがいとなり、さらにその関わりが自身の糧となりました。

専門学校の思い出の中に、今では数少なくなった戴帽式でのキャンドルの灯火があります。厳粛な中での炎の輝きとゆらめきは、看護の道を受け継ぐ新たな決意であり、同時に看護の厳しさと温かさを表現しているようでもありました。

今迄に母校から4千名余りの卒業生が巣立ち、様々な分野で活躍しておられます。その1人ひとりの心の中には、きっとあの時の灯火が、これから先も夢と希望、何よりも看護の心をつないで、常しえに燃え続けることと思います。



喜びと感謝と思い出と

元教務主任
井原 美保子

私が、大阪医科大学附属看護専門学校に在籍したのは、1987年4月から2000年3月までの13年間でした。

学生たちにとっての3年間は、瞬く間に過ぎて行きます。その中で多くの学科修得は勿論のこと、主体性を育む学校行事や臨床実習による変化には目を見張ります。特にナイチンゲール生誕祭や教育キャンプでは、これ迄の甘えや依存・指示待ちの生活から自律へと変容していく様は如実です。さらに、実習では対人職業人の基本的姿勢や相手の立場に立つ努力等、その成長ぶりは素晴らしく、教員の醍醐味を知りました。この間には、カリキュラム改正・評価基準作りや、同窓会設立等貴重な経験が出来良い思い出となっています。

日常の煩雑さに忙殺されることも屡でしたが、教員研修では、著名な講師をお招きし、数々のご教示を頂く贅沢も味わいました。なかでも現大阪大学総長の鷺田教授の「臓器移植」の講義は、私にとってそれに止まらず、今も、種々の判断基準となっております。

このほか、厚生省主催大阪府看護教員研修会での演習担当、介護福祉士国家試験官を、また、大阪府看護協会新会館設立時は図書委員の委嘱を受け、蔵書の整備に微力を注ぐ機会を得たこと等、看護専門学校に在籍した賜と感謝しております。

この度の閉校は寂しい事ではありますが、看護学部移行という発展的理由で悦ばしい事でもあります。今後共、社会のニーズに応え得る臨床ナースの輩出を期待致しております。



3年課程開設の思い出

元教務主任
宮地 登美子

昭和57年1月、大阪医科大学では看護学校の3年課程開設のため、私がおの任を受け就職しました。役所への書類提出後10月に実施調査が行われた際、看護担当調査員から教員7名の卒業校が片寄らず幅広い採用になっており、夫々の長所を出しあって教育してくださいと言って頂きました。その後に取り組むべき仕事は、学生の確保と教育的環境を整えることが急務であり早速、近畿・九州地域の高校訪問をしました。第1回の入学試験では、40名定員に対し343名の志願があり、慌てて大きな試験会場に変更した事が思い出されます。学生が入学してくる迄の期間は、「看護理論」の学習会を行い対象理解の視点の確認や、各教員の技術確認などをし、教員間の意見が活発に行われコンセンサスを得ながら、夫々の看護観を理解しあうというプロセスは、苦しいながら楽しい時間でした。

4月、入学してきた学生の瞳はキラキラしており、私達は学生に触発されるかのように看護論や技術を教え、学生達はそれらを熱心に吸収してくれました。私は1回生卒業と同時に退職しましたが、大学看護学科の開設により27回生の卒業をもって3年課程が閉鎖されることになり、一抹の寂しさを感じながらも看護教育の質の向上に向けての出発を喜ばしく思っています。大阪医科大学での4年3ヶ月はハラハラ、ドキドキではあったけれども、充実した時間であったことに感謝しています。



多くの出会いと学びを与えてくれた大阪医科大学附属看護専門学校に感謝を込めて

大阪医科大学附属病院看護副部長(教育担当)
・元専任教員

中山 サツキ

私は、大阪医科大学附属看護専門学校に看護学生として、二年課程に通い昭和58年に卒業しました。そして次は平成元年から10年間を看護教員として学校で過ごさせて頂きました。

臨床経験が5年しかなかった私が、自分の学んだ看護学校で教える立場になるとは予想していませんでしたし、非常に大きなプレッシャーでもありました。附属病院から赴任する前の数日間、眠れない日々が続いたことを思い出します。しかし、実際に教員生活がスタートすると、先輩の先生方が親身になって指導して下さい、当時の校長であった武内先生からも“全く知らないアフリカの民族の中に入って最初から一緒に踊れる人はいない”と励ましのお言葉を頂きました。

手さぐりの中で重ねていった教員としての日々でしたが、その中で人として大切なこと、教育の本質とは何かということについて、出会った多くの学生達から逆に学ばせてもらいました。看護について教えることは看護について学ぶことであり、また、学生たちとの関わりを通して、共に学ぼうとする姿勢がいかに大切かも教えてもらいました。その意味では、この看護専門学校でとても深い学びの時を過ごさせて頂き、本当に幸運だったと思います。その後の臨床現場での看護実践や現在の看護部での管理・教育の仕事においても、礎となるものは全て看護専門学校で学んだことのように思います。

私の看護師人生において多くの看護学生達との貴重な出会いの場となり、大切なことをたくさん教えてくれた大阪医科大学附属看護専門学校に心から感謝いたします。



閉校に寄せて

大阪医科大学附属病院看護師長
・元教務課長代理

小牟田 美幸

今から16年前に看護の基礎教育の場である看護学校に異動となり、「出来るか出来ないか分からないがやってみる」精神で、新たなスタートを切ったことを鮮明に覚えています。

「常に学生と共に」を基本姿勢としてがむしゃらに取り組んできた日々の中で、笑ったり叱ったり大泣きしたりと変化に富んだ日々ではありましたが、学生たちの成長を間近で見届けられることの嬉しさや素晴らしさを実感し、このような機会を与えて頂いたこと、教育の醍醐味を味わうことができるまでに導いて頂いたことに、感謝をする日々でもありました。

この春から再び臨床現場に戻り、卒業生達が素晴らしい看護を実践している場に遭遇し、感激することがしばしばあります。これら数々の感激は私の一生の宝物であり、今後も増え続けることでしょう。80余年の看護学校の歴史は閉じても、この人たちと共に本校の精神を受け継ぎ役割を担って、そして次世代に引き継いでいくことで、諸先輩方が大切にしてくられた本校の看護教育の精神はこの先も途絶えることなく続くものと信じています。

最後になりましたが、80余年間の看護専門学校の栄光を称えますと共に、素晴らしい学生たちに恵まれ、また有形無形の教をいただいた方々に心から深く感謝を致します。また閉校に係わられました関係者の皆様方にも、心から感謝を申し上げます。



看護学校との関わり

元事務局長付
鈴木 豊明

私は当時附属病院の事務に籍を置き、第二看護学科2部、准看護婦として勤務する為に、採用と云う事を兼ねて、九州地区の志願者に、現地で、入学試験・健康診断・面接の業務を実施する必要の為に、総婦長・教務主任・内科医師（校医）そして私が事務的業務の為、福岡・宮崎そして鹿児島などに、入学試験も兼ねて出向きました。

昭和39年10月の、二年課程・二部の設置認可までの経過には、三好総婦長・勢川教務主任等の、並大抵の物ではなかった中での奔走により、たぐり寄せた言葉が、尤も妥当ではなかったか、の印象がありました。

そして、三年後のこの入学者の、看護婦国家試験に全員が、合格した事により、各地で進学課程が、拡がって行った記憶が甦ってくるのです。

昭和51年1月、私は交通事故に遭遇（重傷の為）当時の職務を離れ局長付となりました。

昭和58年8月、突然看護学科に出向く事になりました。第一看護学科開設直後で、第二看護学科との連携が重要な時期でもありました。

早速、事務的処理として、成績・入試資料等のコンピューター（小型）への移行を考え、教員間へ提案し理解を図りながら作業に取り掛かりました。その結果、進級会議の時に、教員の成績整理について、クラスの一覧表を短時間で集約出来る事に關心を注がれ、翌年度からは全学年の記録、入学試験等も一覧表示となり、現在も続いているようです。

看護専門学校が形を変えて、大阪医科大学看護学部への移行、長い間の願望に継がっていく事に、心からお祝いを申し上げる者です。



時代と共に歩く

旧制看護婦学校19回生 助産婦学校4回生
小野 悦子 (旧姓 辻)

私は昭和22年春19期生12名と共に入学した。終戦直後の食料物資不足の時代であった。愛泉寮に入寮し厳しい校則と、規則正しい管理を受け学生生活が始まった。

昭和24年3月卒業、同年4月助産婦学校に入学した。看護婦学校助産婦学校共に、午前中勤務早朝外来掃除に始まり先輩の助手として働いた。午後授業の日々を過ごした。

当時暖房は火鉢夏は扇風機、食事は重湯に近い粥だった。そんな時代でも先輩はパリッと糊のきいた美しい白衣でサラサラと歩く姿に私達も時々粥を糊にして美しい白衣を着た。靴は洗った後白チョークを塗り真白な靴を履いたなど思い出す。卒業後産婦人科外来の勤務となった。午前外来診察午後手術準備から手術介助片付けそしてお産と忙しい毎日だったが充実していた。エレベーターもない時代患者、妊婦を抱いて階段を昇った。外来手術で使ったガーゼ、敷布は丁寧に洗い乾燥し、ガーゼ罐に詰め滅菌するのに薪を使った。時代と共に医療界の物品等発展を見るにつけ、当時の事は本当によくしたと思い、また色々な工夫も生まれた。看護婦免許では甲種国家試験を先輩後輩と受ける事となり各教授講師の特別講義を受け合格した喜び、三好看護部長の病院管理、看護管理、寮の監督など厳しくてもしっかり教育して下さったこと、勤務と学業の両立は大変だったが、仲間と共に乗り越え助産師として長く充実して働いたこと思い出はつきない。ご指導下さった諸先生、先輩そして仲間があり今の私があることの幸せと、感謝の毎日です。母校の益々のご発展を心よりお祈り致します。



大阪医大附属看護専門学校閉校にあたり想うこと

元奈良県立大学看護学部教授
二年課程全日制4回生
今井 充子 (旧姓 倉田)

我が母校、大阪医大附属看護専門学校が看護学部の設置により発展的に閉校するにあたり、思い出を述べるように神谷美佐子学校長より連絡を受け、さてこの限定紙面内に何を語れるか、約半世紀前の歴史を辿りながら述べてみたいと思います。

私達が学んでいた頃、校舎は看護婦宿舍愛泉寮の敷地内に建つ木造建築で教室が2つといった今から考えると大変お粗末な校舎でした。其処に学ぶ学生は、屈託なく、むしろ医学部からの講師陣に恵まれた教育環境と、看護婦国家試験合格率100%を維持してきた伝統ある学校に学ぶ喜びと誇りを持っていました。朝の掃除点検、自習時間、夜9時の点呼と門限等、規則正しい寮生活の中で青春の真っ直中を、ひたすら看護の知識や技術の学習に明け暮れていたような気がします。大学祭には医学生と共に大阪フェスティバルホールで合唱した事も、国試前、朝御飯は食堂から持ち帰りみんなで一緒に食べたり、消灯後、電気スタンドを押入れに持ち込んで勉強したこともありました。

三好トラキ総婦長さんや教務主任の野戸(旧姓 市原)伊勢子先生、故勢川瑠美子先生、多くの先輩の皆さん方が愛情込めて厳しく御指導戴き、大阪医大の歴史を担う一員になれた事を嬉しく懐かしく思えるのは70代になった感慨なのでしょう。

卒業直後の臨床看護がその後の看護観に繋がると言われます。私は卒業後、教務および臨床経験を積んだ後、他の病院勤務や30年余の看護基礎教育に従事してきました。私の看護観、教育観、人間観には母校での学びが基盤となり、看護という職業を生涯の伴侶として来られたことに感謝と誇りを持っています。

最後に母校の発展を祝し同窓生の皆様の御健勝と御多幸をお祈り致します。



温故知新-学部の更なる発展を願って

メディエ株式会社代表取締役社長
二年課程全日制6回生
藤田 和子

光陰矢の如し、寄稿文のご依頼を頂き、改めて過ぎし日の時間の流れの速さを思い返しております。私は昭和39年の卒業ですので、既に45年以上の時間が経過しています。卒業と同時に学校を後にし、米国留学のために附属病院で仕事をするチャンスはありませんでした。

一時期大学の評議員を仰せつかり、ほとんど役立たずの委員ではありましたが、外から大阪医大附属病院を眺め、また専門学校を我が母校として外部から時には批判し、時には後輩の活躍に一喜一憂し、見守り続けて参りました。

鬼籍に入られた勢川瑠美子先生とは何時も専門学校を早く大学に再編すべしと、事あるごとに話し合っていたことを鮮明に思い出します。専門学校から看護学部に移行されたことを誰よりも喜ばれ、来年80年余りの歴史を閉じる訳ですが、寂しい思いで居られるのは他ならぬ、故勢川瑠美子先生でいらっしゃる確信いたします。時代は移り、看護婦を看護師と改められましたが、私にはナース(nurse)の方がより身近に職業人としてなじめる呼称です。

何時の場合もいかに患者さんに寄り添い、心の支えになり、生きる希望を与えながら、心からの博愛の精神でケアさせていただくことを忘れることがあってはならないと思います。

学部になり理屈だけの頭でっかちのナースが誕生するようでは、本末転倒というものでしょう。学問に裏付けされた、患者さんのためにかげがえの無い存在のナースが一人でも多く誕生することを心より願い、多くの方々のご努力に敬意を表し、新体制の学部の益々のご発展を祈念致します。



看護を学び、看護教員として、そして今

元川崎医療短期大学教授
二年課程定時制1回生
宇野 恵子 (旧姓 菅原)

「何年振りかしら」「ちっとも変わらないわね」先日45年前の専門学校時代の友が我が家を訪れた。共に、老年期(65歳)を過ぎた者同士、会話は弾み直ぐに学生時代の寮生活・病院実習にワープ(warp)するのです。懐かしい顔、笑い声、その中で私の看護師としての人生が始まったのです。クラスは12名で、臨地実習は一人で臨む。各病棟の看護婦長から直々の指導を受けたのです。病態生理は教科書(赤本)、専門の医師から指導を得る、看護については、看護婦長から教わり一緒に考えて患者の看護にあたる。現在のように看護文献、著書がふんだんにあるわけではなく、知識と経験豊富な看護婦長から学びました。十二指腸狭窄の新生児が回復した感動と、この学習プロセスは、私の看護人生を豊で、楽しいものとしたのです。

卒業後、日本は高度経済成長に乗って、医学・科学は急速に進歩していく中で、看護は看護師不足を補うために、衛生看護高校、進学課程が急増した。看護の進歩・発展が危ぶまれる中で、1977年ICN第16回東京大会が華々しく開催されました。世界87カ国4,000人の看護師を迎え、日本会員8,000人が参加しました。この時、V.ヘンダーソンの講演を聴き、その後著書「看護の基本となるもの」が入り、看護のあり方を評価し、看護実践の方向性を示した。日本の看護師に自信と希望を与えた。看護理論が看護を明確化し実践に科学性をもたらした。「目から鱗が落ちる」とはこのことでした。この感動を学生に体験させたいと考えました。

そしていま、わたくしは支えていただいた人達と恩師に感謝しています。



救急看護から 見えてきたもの

マックスシール異病院副院長
二年課程定時制4回生
中谷 茂子 (旧姓 小笠原)

〇〇救急です。救急搬送をお願いします。交通事故、意識レベル300、下肢開放性骨折です。〇〇救急です。心肺停止状態、CPR開始搬送します。〇〇救急です。胸痛、冷汗、ショック状態です、10分でつきます。

大阪府三島救急救命センター就任当時は、ピーポ・ピーポの救急車の音で飛び起きてしまうそんな毎日でした。

心肺停止で運ばれてくる患者様を蘇生し、懸命な治療・看護を行いながら、一命をとりとめても植物状態に近い状態で病棟に入院されている患者様を見つめながら“助けるってこんなことだったのですね”“倒れたとき私が何かできればもう少しいい状態で回復できたのでしょうか”と話される家族の言葉は私の胸に突き刺さりました。家族が少しでも後悔をしないように救急看護師として何ができるのかと考え始めたのが、私のライフワークとなった看護師によるBLS普及活動です。

—「あなたの愛する人を救えますか」を合い言葉に—

現在では、ICLS、BLS、AED、の普及とともに市民や学生にもその必要性が広く認識されていますが、始めたころはレサシアン人形を持って看護師の仲間たちと自治会、学校、保健所などを回ったことが楽しく思い出されます。

“鶏口となるも牛後となるなかれ”と救急看護の道へと肩を押してくださった勢川瑠美子先生、“神様はできない試練は与えない”と支えてくださった田邊治之先生は、私も誰かを支えられる人になりたいと思わせていただいた恩師です。



北海道研修旅行の 思い出

彩都リハビリテーション病院看護部長
二年課程定時制5回生

服部 誠子 (旧姓 宮本)

大阪医科大学附属看護専門学校は看護師としての学びの礎であり、閉校されることは残念ですが、念願であった大学に移行されたのは嬉しいことです。私は進学コース卒業で准看から7年間で看護師の資格を取得しました。当時は研究科と呼ばれて、八丁畷に校舎があり夜間部は修業年限3年間、その内2年間は勤務と両立しながら夕方からの授業、疲れて眠かった日々も幾度となく、3年目は集中的に臨床実習でした。印象に残る思い出として学生生活最後の夏休みを利用しての研修旅行があります。今はなき勢川先生が引率で、添乗員の役割も担っておられました。病院から事務部の丹羽課長、上坂師長、森口師長の総勢23名、残念ながら1名は入院中。青森まで夜行列車で青函連絡船に乗って、北海道函館に朝の5時頃についたと思います。クタクタで近くの旅館で仮眠後、大型バスで、座席自由に、何処でもお掛けくださいでした。素晴らしい天気恵まれ、ほぼ北海道の各名所を回りながら、場所にちなんだ歌を歌い、バスを降りたら、売店直行、アイスクリームとうもろこし等、賑やかな事。男性二人は圧倒されて、師長さんお二人も同世代、もちろん乙女のようなようでした。夜は美味しい料理を戴き、夜更かし、おしゃべり、誰かさん達はパチンコ、楽しい旅行でした。看護における全ての要素と持続する看護のパワーは大阪医科大学附属看護専門学校で培われたと感謝しています。ありがとうございます。



心に残る思い出

東和会病院副院長・看護部長
二年課程定時制9回生

常盤 由美

大阪医大附属病院から清泉寮（学生寮）の途中にある大きな歩道橋を通る度に、5年間、朝晩毎日通った頃を思い出します。母校を卒業してから早いもので35年の月日が過ぎました。1970年に准看護婦学校入学のため、初めて附属病院を訪れた時、石造りの美しい曲線と時計台のあるクラシックな建物に感激。院内はその時代には珍しく外来の中央に、エスカレーターをもった近代的な病院で将来の勤務場所に期待に夢がふくらむ思い出でした。5年間の学生生活では時間に追われながらも学友と充実した青春時代を過ごすことができました。又、5年一貫、全寮制の集団生活の中で培われた事も多く、社会人としての基本的な力がついたと思います。憧れる先輩をロールモデルとして常に意識し、その影響を強く受けていました。特に思い出されるのは、2年先輩の故内倉清子さんです。白衣のアイロンの当て方、ナースキャップの作り方、仕事の段取り、特に準備と後片付けの重要性等、仕事に関する基本的な事を徹底的に教えていただきました。内倉清子さんは常に「仕事の成果はセンスの良し悪し…」と話していたことを思い出します。故勢川瑠美子先生が看護師は職業人の前に、より質の高い感性と豊かな人間性が大切であると話された事も人生において心にのこる大切な言葉となっています。このたび母校が発展的な閉校となりました。青春の思い出を持つ者としては一抹の寂しさがありますが、これから先も母校の看護の精神は永遠に受け継がれて行く事を信じております。最後に閉校記念誌委員会の皆様に御礼申し上げます。



閉校に寄せて “感謝”

徳島文理大学保健福祉学部看護学科准教授
二年課程全日制8回生

灘 久代 (旧姓 齋藤)

同窓生の皆様、お変わりありませんか。私達8回生17名は、全日制2年課程が再スタートした節目の年に入学しました。こぢんまりした学年で、先生方からは真面目で優秀なクラスという評価を頂いていました。おりしも東京の山下さんの5つ子が誕生した時で、公衆衛生看護学では5つ子を育てるに当たり、1ヵ月の費用を試算した思い出があります。

今、私は大学で母性・助産学を教える立場にありますが、色々な教育のやり方があったとしても、最初に受けた教育がベースになると確信しております。特に教育の根幹をなす臨地実習では、施設の学生の受入、教育体制、教員と臨床との人間関係等が学習効果に大きな影響を与えることは間違いありません。医大では産科病棟で8年、基礎教育の場で13年間、勤務しましたが、早くから臨床指導者・学生係を配置し、実習施設として環境が整っていたことが自身の糧となり、その後の指導に活かされたことに感謝しております。

現在、出身地である徳島に単身赴任をしておりますが、“阿波踊り大好き”が高じ、妊娠期間中のヘルスマネジメントと出産に備えた体力維持管理に、「阿波おどり体操・マタニティ編(足腰・背筋強化)」のDVDを制作致しました。体操のインターバルでは本物の阿波踊りにも触れ、見ても楽しいDVDです。興味・関心のある方は無料でお送りしますのでご連絡下さい。

最後になりましたが、大阪医科大学ならびに附属病院の益々のご発展を願っております。



看護力を育み人の心を 紡ぎ繋ぐ志を学んだ 源泉の在り処に感謝

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科教授
二年課程定時制11回生

松村 恵子 (旧姓 三谷)

この度は、閉校記念誌稿の機会を戴き深く感謝申し上げます。今から40年前、深紅色表紙の教科書で学び、勢川先生の「看護学原論」では、とても難しいけれど内容が深め広げられキラキラと輝いていました。ある時、授業の開口一番「学校の玄関に入る時に何かみてきましたか」と問われました。私たち1年生20数名は、何も応えられませんでした。誰一人、校舎に入る時に何かをみてという思いなどなかったように思います。この時「看護は観察からはじまる」ということ、看護実践の力を育てる要など、常日頃の姿勢について厳しく諭されました。

人間関係形成の力を育てることをめざしてでしょうか、全員が寮生活でした。「清泉寮」の屋上では洗濯物や布団を干し、仲間と喜怒哀楽を分かち合い、自由と規律について実体験する日々でした。なかでも毎日、午後7時が門限、午後9時はホールに全員集合、先輩が点呼の後、情報交換などが行われました。毅然とした姿勢で「名前を呼びますね」と、当時、誰よりも当番が多いように思えた大先輩は、今日の神谷先生でした。

時は流れ、深緑色表紙の教科書で学び、宮武先生の「看護学総論」など、様々な出会いから看護教員になりたいと思うようになり、私は26歳で母校の教員になりました。今、閉校の時を迎えましたが、また一つの新しい門出に繋がりますように、そして「生命」に寄り添い観て看護するという精神は、ひとり一人の本校卒業生に継承され連綿と伝わり豊かに進化していきますように、さらなる志を刻みまして拙稿と致します。



基礎教育での学びは永遠に

済生会吹田病院看護部長
二年課程全日制10回生
池田 恵津子 (旧姓 中内)

時代の流れとともに、看護基礎教育の現場では4年制大学での教育が主流となっていく中、私に看護を教えて下さった「大阪医科大学附属看護専門学校」が閉校となり、83年間の歴史に幕を閉じることは、大変残念に思うと同時に、寂寥感に尽きます。また、この看護専門学校の卒業生であることを誇りに思っています。

思い起こせば、看護学校の2年間はあっという間でした。一年次は楽しかった授業と仲間づくり、二年次は苦しかった臨床の実習といった印象が残っています。その頃のクラスメイトとは今も交流があり、卒業後30数年経つにも拘らずあの時の愛称で呼び合い、若かった看護学生時代の顔にもどってひと時を過せば、またエネルギー全開で頑張ることができています。

掛け替えのない仲間は、財産です。そして、看護学を教えて下さった、勢川先生をはじめ、橋本先生、神谷先生、城戸先生、あらためて大変お世話になりました。有難うございました。生意気盛りでいろいろと講釈する私たちについても丁寧に寄り添っていただきました。

殊に、忘れることができない場面は戴帽式です。厳かな空気の中、緊張で胸が張り裂けそうな学生たち一人ひとりに優しくキャップを載せピンで留めて下さったこと、ろうそくの光の中ナイチンゲール誓詞を斉唱し、感動で胸がいっぱいになったことです。

あっという間に時は過ぎ行き、私は今、臨床の現場で多くの看護師を育成する立場にあります。その中で、何かの折にふと自覚することは母校で教わった看護の基本・考え方です。

今後、いつまでもその教えを大切に看護人生を歩んでいきたいと思えます。



看護専門学校の閉校に際して

大阪医科大学附属病院看護副部長(業務担当)
二年課程定時制12回生
豊田 瑞恵

私が大阪医科大学附属看護専門学校に入学したのは昭和51年の4月でした。脳外科病棟での勤務を16時に終え、急いで学生服に着替え教室に向かい授業を受けるというハードな毎日でした。しかし、授業の合間には仕事の話や雑談で盛り上がり、21時過ぎに帰る陸橋では当時の流行歌(ピンクレディ・アリス・中島みゆき)を歌いながら清泉寮に帰宅したことは楽しい青春の思い出です。同期生の出身地は九州の人が多く、「〇〇だら」「〇〇しとると」の九州弁が飛び交い、私にとっては新鮮な感覚と笑いの中に“ほんわかムード”を味わったものです。私は同期生より6歳年上であったため、「お姉さん」と呼ばれていて、少しだけ頼りになる存在だったように思います。また、授業の講師は殆どが臨床医師であり、普段から親しく協働しているためお互いに緊張感を覚えるものでした。臨床での経験が机上の学習に結びつき理解しやすいという有利さは国家試験にも大きく貢献してくれたように思います。三年生の時の修学旅行は、夜行寝台車から青函連絡船に乗り、函館からはバスで道内を巡る旅でした。広大な風景の中に写る友の顔と同時に楽しかった一場面が懐かしく思い出されます。

卒業と同時に大阪医科大学に就職し早35年を迎えましたが、看護専門学校と臨床現場での学びは大きな基礎となりその後の仕事やキャリア形成に役立っています。平成22年には念願の看護学部が開校し、新たな看護教育が始まりました。看護学部が大阪医科大学附属看護専門学校の歴史を引継ぎ大きく発展して行くことを祈っています。



私を守り、育ててくれた 清泉寮生活

大阪医科大学附属病院看護師長
二年課程定時制12回生
横山 幸子 (旧姓 右田)

昭和46年4月両親とともに大分県から大阪府高槻市にある大阪医科大学附属看護婦学校に入学が決まり、私の心は期待でいっぱいに入寮でした。この病院に進路を決めたのはパンフレットにあったすばらしい寮の写真でした。全寮制でエレベーターもあるなど16歳の少女は夢のように感じることばかりでした。九州の親元を離れ、4名1室の生活がスタートしました。周囲の殆どの人たちは先輩という存在でまず挨拶から始まり挨拶で1日が終わる、時間厳守、寮の規則など自分が想像していた生活とはかなりかけ離れたもので1ヶ月もするとホームシックや不安で同僚たちと部屋でしくしく泣いてしまい担任の先生(前・服部師長)を困らせてばかりでした。半年もしたころに寮の先輩方のお誘いがあり、先輩の部屋に招いていただきお菓子や紅茶など心温まるもてなしに淋しい思いでいた私たちは落ち着きを取り戻し悲しい思いや、生活の違いなど不安な話をゆっくり聴いてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。看護婦学校の2年間、看護専門学校の3年間と計5年間をこの清泉寮で過ごしました。寮生活は慣れてくるとクラスメートとの交流ももてそれぞれの郷里から定期的に送ってくれる食料(お菓子・ラーメン)などを各部屋に配り、後輩を誘いミニパーティーなどして、静かにするよう注意を受けることも度々ありました。また試験前にはみんなでがんばろう!と支えあう力が今の原動力に繋がっています。清泉寮は私に生活力をつけ、人と人とを温かく見守って下さった貴重な時間でした。本当に永い間ありがとうございました。



ターニングポイント

高槻市医師会看護専門学校教務部長
三年課程1回生
中西 亜紀

私のターニングポイントとなった看護の世界への入り口、大阪医科大学附属看護専門学校。高校を卒業したばかりの私には、初めての寮生活や医療の世界等、とまどいばかりでした。

私たち41人は『第1看護学科1期生』という大きな看板を(勝手に?)背負い、教務主任や担任から「1期生なんだから」と話されるたびに、当時は胸がキューツとなりました。この言葉は、41名一人ひとりが3年間ずっと噛み締めていた言葉で、終講試験の成績がクラス全体で悪いとクラスで落ち込み、実習が始まれば心意気だけはあっても失敗続きで落ち込み、国家試験は全員合格の道しか無いというプレッシャー等々、今でもその感覚が鮮明に甦ってきます。

実習でお世話になった附属病院の皆さま、教務の先生方、直系の先輩がいない私たちを可愛がってくれた第2看護学科2部の先輩方、一緒にいろんなことを考えてくれた第2看護学科1部の同志など、多くの方が優しく支えてくださった思い出ばかりです。

何かあればここに戻ってくれば大丈夫!私にとってそんな存在だった母校。その閉校が決まり大学になることがわかった時、喜ばしいことではあるけれど淋しいというのが正直な気持ちでした。しかし、大阪医科大学附属看護専門学校の教育理念は卒業生全員の心に深く浸透し受け継がれていきます。多くの先輩方と同志と一緒に歩んでいます。

人としての誇りを胸に掲げ、専門職としての自覚と責任を全うする看護職であることを礎に、変化を恐れない!私はこのお別れを第2のターニングポイントと捉えて歩み続けたいと思います。本当にありがとうございました。



つながり広がる看護の心

ちひろ助産院院長
三年課程3回生
大平 昌子 (旧姓 玉置)

我が母校、大阪医科大学附属看護専門学校が閉校！

清泉寮がなくなったと聞き、そして学校も閉校……感慨深いものがありますが、4年制大学へと移行するとのこと、最近のこの時代当然といえば当然の流れかと思っています。

私が本校で学んだのはもう20数年前、清泉寮での初めての団体生活、慣れない大阪弁（というか、地方出身者が多く、方言のルツボ!）、そして実習！と、とても濃い時間を仲間とともに過ごしました。それらの貴重な体験は私の宝となって、今の私を支えてくれています。これからの時代は、やはり、4年制大学、知識も学士としてはずかしくないものが求められ、教える方も学ぶ方も大変だと思います。ましてや、看護には心も技術も必要です。私は開業助産師をしており、看護学生も受け入れています。最近の傾向として、知識は豊富、でもコミュニケーションが苦手、そして不器用な学生が多いように感じています。子育てにも言えることですが、学生を育てる場合でも、やはり、「育てたように、子（学生）は育つ」のだと思います。「あなたの看護観は！！」とひたすら問い続けられた3年間だったように、大学に移行してもカリキュラムがかわっても看護の心は変わりなくはぐくんでいただきたいと思っています。

そして、ここで学んだ学生たちがまた臨床にでてきて、しっかりと現場で働けるよう我々現場の者は努力して、待っていたと思います。

名前や組織は変わっても、脈々と受け継がれ培われてきたものは、つながり、広がっていくと信じています。今後も、先生方、卒業生の皆さまのご活躍を祈念いたしております。



懐かしき看護学生時代に感謝

大阪医科大学附属病院看護師長
二年課程全日制19回生
藤原 寛子

本校を卒業して早24年、月日は瞬く間に過ぎ去ったように感じます。ましてや母校が閉校になるとは24年前は思いもしませんでした。

入学した多くの同級生は大阪以外の都道府県から集まり、全員が寮生活を経験して充実した2年間を送りました。しかし、このクラスはかなり個性的で、担任の小谷先生をはじめ、舎監さん・寮母さんには随分ご迷惑をおかけしたと思います。例を挙げればきりがありませんが、当時はディスコが流行しており、ハイヒールで寮の廊下を練習がてら歩く者や寮の学習室で布団を持ち込んで眠ってしまう者、学習室で焼き肉をして使用禁止になった学年はこのクラスだけでしょう。

一方、学習面での団結力も強く、仲良しグループでのテスト対策には多くの人が救われたのではないのでしょうか。忘れられないのが実習に明けくれた2年生です。全員が1年生の時期に附属病院でのアルバイト経験があり、かなり鍛えられたおかげで実習もタフに乗り越えられたと思います。実習で出会った患者様から「将来は立派な看護婦様になってね」と言葉をいただいて涙したこともありました。その言葉を裏切っていないかこの原稿をしたためながら、今の自分を律しております。

思えば卒業してから一度も退職することなく、現在も本学で看護師を続けているのは私だけとなりました。しかし、一度は本学を去りましたが進学して戻ってきた仲間、少し休養して戻ってきた仲間が3名おります。この大事な仲間と共に記念誌が、故郷で頑張っている卒業生のもとに届けられることを嬉しく思います。そして、誇り高き本校の卒業生であることに深く感謝いたします。



大阪医科大学附属 看護専門学校思い出

大阪医科大学附属病院看護師長代理
三年課程5回生
東尾 智美 (旧姓 日原)

学生生活の思い出の大半は、実習。本当に患者様に恵まれた実習だったと思います。1年の基礎実習で初めて受け持った患者様は何と刺青が入っていました。カルテの既往歴にあった左第5指第2関節切断とはそういうことだったのだと初めて血圧測定をした時にわかりました。その患者様は急に4日後の退院が決まり、臨床指導者の先生に助けられながら何とか退院指導を終了しました。その患者様から卒業後、予期せず「新聞の看護婦国家資格合格者の欄に名前があったからおめでとうが言いたくて。」とお電話をいただきました。実習当時の私は患者様に何にも出来ず申し訳なく涙が出てきました。数年後、その患者様は緊急入院され亡くなりましたが、その際も私の働いていたICUに会いに来て下さいました。

産科実習での受け持ち患者様とは今でも手紙のやり取りをしています。退院後も学校に成長新聞を毎月送ってきて下さり交流が始まりました。生まれた男の子が小学生になった時、私を誕生会に招待してくださり、その際に生まれた当時の話をさせてもらいました。成長の節目節目に関わらせて頂き、その子は立派に成人式を迎え、今年就職し頑張っているそうです。

こんなみんなの温かい見守りがあったからこそ、今でも大阪医大に残り、看護師として頑張らせていただけるのだと思います。人と人との関わり合いを大事にすることを学校で学ばせて頂きました。看護専門学校は閉校となりますが、ここで学んだ教を大切に看護師一人ひとりの心の中で守り続けて欲しいと切に願います。本当にありがとうございました



大阪医科大学附属看護 専門学校に寄せる思い

大阪医科大学附属病院看護師主任 (認定看護師)
三年課程10回生
池 智代

このたび、看護専門学校が83年間の長い歴史に幕を閉じることとなり、母校が閉校することの寂しさを実感しております。そして、卒業してからも様々な形で支えていただいた学校長をはじめ、看護専門学校関係者の方々に深く感謝致します。

私は、第1看護学科10回生です。平成7年3月に卒業し、大阪医科大学附属病院に就職しました。現在は、皮膚・排泄ケア認定看護師として日々活動しています。こうして専門分野への道に進み、看護を続けることができているのは、何より看護のスタートであった看護基礎教育を学ぶ良い環境で、時に厳しく、時に温かく、ご指導ご支援下さった看護専門学校があったからだと思います。

卒業してからもずっと心に残っているメッセージがあります。

「生き方として看護を選ぶ」ということです。この言葉は今でも深く心に刻まれており、時々自分自身に問いかけることがあります。認定看護師になることを決意するきっかけにもなった言葉でした。卒業してどれだけ時間が経っても、大切なことは心に深く刻まれるものだと思います。そして、看護専門学校では、苦楽を共にして、お互いを理解し合え、心から信頼できる一生の友と呼べる親友とも出会うことができました。

看護専門学校は閉校することになりましたが、看護の道へのはじまりの場所であった看護専門学校は、卒業生や学校関係者それぞれの思い出とともに、いつまでも私たちの心に刻まれ、勇気づけてくれる存在であると思います。本当にありがとうございました。



三年間の学び

三年課程27回生
藤岡 美穂

私はこの三年間で多くのことを学びました。入学した当時は、勉強と向き合う毎日でもいつも必死でした。そんな毎日を過ごす中で私を大きく成長させてくれたのは実習でした。実習では、患者様一人を受け持たせて頂き、病態生理の把握や今後起こりうることを予測することや援助方法を患者様の個性や状態を考えて安全、安楽に実施するということの大切さと難しさを学びました。また実習をとおして、自分の行動は全て自分だけに返るのではなく、患者様や周りのスタッフに影響を与えるということに気づきました。その事をしっかりと考え、自分自身の行動に責任を持ち振り返る大切さを学びました。実習では患者様は学生の私に優しく声をかけてくださり、患者様の笑顔や優しさに毎日支えてもらい、頑張る力を頂いたことに感謝しています。また辛い時、悩んだ時に支えてくれたのは27回生の仲間でした。ただ優しく声を掛け合うのではなく、時には意見をぶつけあったり、話を聞いてくれて一緒に悩んでくれたり、仲間の頑張る姿をみて刺激をもらったり、お互いに高めあうことのできる仲間の存在があったからこそ頑張ることができたと思います。また学校の先生や臨床看護師の皆様には厳しくも暖かい指導をして頂き、多くの気づきと看護するやりがいや難しさを学びました。また看護師としてだけでなく人としてマナーや規則を守ることや思いやりの大切さも学ぶことが出来ました。私はこの三年間で看護を志すものとして大切なものを学んだと思います。この学びを大切に、これから多くの患者様により良い看護を提供できる看護師になりたいと思います。



受け継ぐ

教務課長代理
森山 幸子

沿革が示す本校の歴史は「ようこそ先輩」での講演などで実感しています。先輩たちが看護を「受け継ぎ」実践された証しだと感じておりました。

学校での専任教員の顔ぶれも多くは卒業生です。本校出身が普通で、先輩と後輩が自然に一緒でした。臨床でも卒業後は先輩たちに囲まれて看護に関する多くのものを「受け継ぐ」姿がそこかしこにありました。「受け継ぐ」ものは、誰か特別な人が特別な人へと受け渡すものではなく、先輩から後輩へと自然に繋がっていくのだと改めて思います。そうやって受け継ぎながら続くものだと。

教員として思い出されるのは、卒業式で巣立っていく学生達にほっとすると同時に、後姿へ思わず「がんばって」と力まずにはいられなかった事です。卒業生は、臨床での経験で2年目、3年目と実に頼もしく成長します。それは、本当に特別な誰かではなく、卒業生一人ひとりが変化します。特別ではないと言いましたが、正確ではないかもしれません。一人ひとりが個々の変化を遂げるのですから、特別な誰かではなく、みんなが特別なのかも知れません。臨床で看護を受け継ぎ、実践するから変化していくのだと実感しています。

専門学校としての歴史にはピリオドが打たれますが、本校で看護の力を養った卒業生がきっと、病を患った方々に「受け継いだ」技と心で、癒しながら力を与えているであろうと思っています。私も定時制を併設していた頃の卒業生です。これまでの卒業生が実践されたように、「受け継ぐ」ものを一人の卒業生としてこれからも担っていると心新たにしたいと思います。



共に歩む… 看護教育の喜び

教務主幹
守本 俊子

看護教育に携わることで、多くの学生との出会いがありました。学生達は3年間の教育で目覚しく変化・成長します。その成長をすぐ側で見守ることができることに魅力を感じ、臨床経験よりもはるかに長くこの仕事を続けてきました。

私の担当領域は、基礎看護学です。入学して間もない、看護の扉を開いたばかりの学生達に看護技術の原理原則とその技を教えます。看護師は「魔法の手を持つ」と恩師から教えられた事をそのまま教えてきました。新校舎に移るまでは、旧第一看護学科校舎の狭い実習室で演習をしていた記憶も残ります。私は、演習時に皆の前で日常生活援助技術を実施して見せるのがとても苦手でした。「模範」を示すために実施するので緊張も相当のものでしたが、学生に“すごい”と思われるような技を披露するために何度も練習した事を今では懐かしく思います…。

看護教員経験の中で一番充実していたのは、学年担当としての役割を遂行していた時です。40人または80人の学生達との対話場面一つひとつが脳裏に残っています。褒めることと叱ることのバランスが難しく、指導方法について後悔することも多かったです。学生の成功と一緒に喜び、また困難が生じた時には学生以上に悩み改善策を考えた…学生と過ごした貴重な時間は私の宝物です。

「看護の技とところ」を探求しながら学生と共に歩んだ数々の経験が、今の私の活力の源となっています。卒業後、臨床経験を経た後に母校に戻って教鞭をとることができたことに感謝すると共に、80余年受け継がれてきた本校の基本理念が看護学部継承されることを願っています。



看護専門学校で 学んだこと

事務長代理
中尾 基克

いま閉校という歴史的瞬間に立ち合わせていただき、改めまして多くの先達の方々のご努力とご苦勞の大きさ、看護教育に対する並々ならぬ情熱を肌で感じて身の引き締まる思いであります。

私が看護専門学校に異動してきて驚いたことの一つに、学校行事の多さとパフォーマンスの凄さがあります。

入学式や卒業式、戴帽式は承知しておりましたが、教育キャンプに交流会、地域の方を招いての学校祭にクリスマス・コンサート。加えて自治会主催の歓迎会や送別会。その時々には繰り上げられるパフォーマンスは、歌あり、ダンスあり、楽器演奏ありとどれもこれも趣向を凝らした活気あふれるものでした。そのパワーに圧倒されると共に驚嘆の連続でした。正直、自分が遣るのは嫌だなとも思いましたが、交流会で「がんばらんば」を一緒に踊ったことはいい思い出です。

自分の照れ、恥ずかしさ、嫌だなと思う気持ちや躊躇する心を一先ず脇に置いて、みんなと愛和して一つのもを作り上げていくことの大切さを教えて頂きました。そんな日々の積み重ねが、いつしか臨床の場でも我執を捨てて患者様のことを第一に考えて、やさしく思いやれるように繋がっていくのだと思えました。「生き方として看護を選ぶ。」その姿勢は手間暇かけた手作りの教育の中でこそ培われていくことを学びました。

私は看護専門学校での経験を活かして、人の話に耳を傾け、人を愛し、大阪医科大学を愛し、自分は人のために何が出来るのかを考えて今後の業務に励んでいきたいと思えます。今日の日を向かえるまで支えて下さった多くの方々に感謝いたします。



私にとっての 大阪医科大学附属看護 専門学校

専任教員
森安 朋子



とうとう看護専門学校が閉校になる時が来ました。私にとっての大阪医科大学附属看護専門学校は二つの意味があります。ひとつは母校として、もうひとつは専任教員としての自己実現の場であったということです。

学生生活はわずか2年でしたが、全寮制の学校で、看護師になるための多くの学びを得、また生涯の友と出会い、まさにきらきら光る青春の一ページでした。卒業後は附属病院で勤務した

後、専任教員として誇らしく身の引きしめる思いで母校に帰り、希望と夢を胸に入学した学生が、学ぶ意欲を持ち続けながら、努力できるよう日々奮闘してきました。気がつけば16年の歳月が過ぎていました。学生と関わる際に忘れないうようにしていたことは、学生を一人の人として尊重し、持っている力を信じるということです。

閉校になることに一抹の寂しさを感じていますが、多くの諸先生、学生達、病院の方々、患者さまとの関わりが、私をここまで導いてくださったと感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



母校の閉校を教員として 向かえて

専任教員
山川 由加



本校に入学してから早や四半世紀。慣れない寮生活や厳しい実習。正直、いい思い出ばかりというわけではありません。今までの人生を振り返ってみても一番試練の多い2年間だったように思います。ですがその分、実り多い私の人生の基盤となった2年間でもありました。思いがけず母校に教員として配属され、嘗ての恩師や先輩方と看護基礎教育に従事することとなり、

あまり出来のいい学生ではなかった私は面映い気持ちでした。しかし、教えることで自分が教わり、指導することで自分を知り、教員としての13年間は学生として過ごした2年間に勝るとも劣らない、試練の中にも実り多い日々でした。そして今、教員として母校の閉校に立ち会おうとしています。寂しい気持ちもありますが、大役を終えホッとしています。今も校舎には私たち第二看護学科19回生の卒業記念品である姿見が設置されています。教育の形は変わっても、志しはあの日の私たちと同じ看護学生の姿を鏡はこれからも映し続けてくれるでしょう。



大阪医科大学附属看護専 門学校閉校にあたって

専任教員
佐藤 真由美



3年課程の1回生として本校に入学し、そして最期の27回生を送り出す教員の立場で閉校に立ち会うとは何と不思議な縁なのだろう。

1回生は周囲から、個性豊かで芸達者な人が多いと言われる。なぜ个性的と言われるのか？それはきっと41人が個々のありのままを受け入れることが出来ていたからではないかと思う。改めて当時の先生方はこんな私達を育てるのは

大変であったと思うと同時に感謝の気持ちで一杯である。母校で教員となり、学生と向き合うことは、自分の看護に対する思い・考えを整理し、自分自身と向き合うことでもあった。学生から教えられることも多く、今の自分があるのは、多くの人から教えられ、見守られ、支えられてきたからである。

閉校は寂しく思うが、ここ看護専門学校で学んだこと、仲間と共に過ごした時間は私にとって宝物である。

今まで出会ったすべての人々に感謝!!

そしてここからまた新たなスタートを!!



閉校にあたり 今、思うこと

専任教員
濱本 由美子



臨床から教育の場に異動し、早12年が過ぎ、閉校を迎えようとしています。臨床では多くの患者様やご家族との出会い、学校においては多くの学生との出会いがあり、どちらも人との関わりが自己の成長に繋がっています。初めて、教員として学生と向き合うなかで、教育の難しさを幾度となく感じました。学生理解にはまず自己と向き合うことが求められ、相手は自分の鏡であることを再

認識し、試行錯誤しながらの学生指導の日々でした。また、在宅看護論の担当となり、臨床では集中治療室で勤務していたため、私自身が一からの学びでした。在院日数の短縮化、地域へと戻る患者は増えている現状があり、保健・医療・福祉制度について学習を重ね、社会の動向にも目をむけ看護のあり方を改めて考えさせられました。しかし、看護の基本は同じで、患者中心の看護であることに変わりないことを改めて認識し、学びの機会を戴いたことに感謝しています。本校で教員としての学びを糧にしてこれからも人との出会いを大切にしていきたいと思っています。



本校での歩み、 そしてこれから

専任教員
重年 清香



私は、本校の専任教員と同時に3年課程の卒業生でもあります。思い起こせば看護学生時代、清泉寮で同級生と苦楽を共に過ごし、先生方や臨床で出会った方々から叱咤激励を頂く中で、謙虚に自己省察する大切さに気付き、成長に必要となる様々な試練を乗り越える力を得ました。卒業後、何度も試練や挫折を経験しましたが、学生時代に得た力を発揮し、本校で学んだ「患

者中心の看護」実践を目標にそれらを乗り越え歩んできました。更に、多くの出会いと別れの中で様々な人に支えられ、反省や成長の機会に恵まれて今の自分があることに感謝しています。

よく「人は自分が教えられたように人に教える」と言います。人を教える立場の者は、感情が動く経験や様々な人間関係の中で自己省察しながら自分の専門性に関して研鑽し続けることが必要不可欠だと考えます。母校は閉校しますが、本校での経験は宝と思い、これからも一期一会の縁を大切に、自己研鑽しながら看護教育に携わっていきます。



燦

専任教員
吉田 さとみ



今、閉校の時を待つ大阪医科大学附属看護専門学校に寄り添っている。ここで、学生として過ごした2年間。親元はなれ友人たちと過ごした寮生活は、結婚式の名文句にもあるように、楽しさを倍増させ、苦しみを半分にさせた。あの頃を想うと懐かしいシーンと共に20代の胸中がよみがえる。そして、看護師としての16年間。いつしか『看護はおもしろい！看護が私を

成長させてくれている・・・』と確信した。そして、看護教員としての6年間。母校での教育活動を通して看護を再考し、教育を模索した。いつの日も、まわりの個性豊かな友人や同僚、そして上司に支えられ前向きに歩んできた。これら全てが私の生きる糧となっている。

母校が看護基礎教育のさらなる充実に向け形を変えて歩み始めている。この変革が看護の質の向上と発展へ繋がることに期待を寄せると共に、これまでに受けた御指導の数々に感謝いたします。「ありがとうございました」



大人の階段のぼっています

事務員
吉田 麻衣



私は新卒として大阪医科大学に採用され、初めて配属された部署がこの看護専門学校でした。はじめは右も左も分からず、業務に乗っかっていけば日々が過ぎていく…そんな毎日でした。今思えば、恥をたくさんかいたなど赤面するエピソードが脳裏に過ぎります。

“組織で働く”ということが分からず、つまずき・怒られ・周りに支えられ・立ち上がりを繰り返

返し、私の基礎を作っていただいた場所です。先生方の励まし、上司の真摯な言葉、周囲の応援…どれも忘れられない場面ばかりです。初めて配属されたところが看護専門学校で、とても恵まれていたと感じています。しかし、私の社会人人生はまだまだ登り坂です。

看護専門学校は83年の歴史を閉じようとしています。しかし「変わらないもの」は明日へ繋がっていきます。変わらないものはいくつかありますが、一つは「なかま」だと思います。そんな「なかま」もここで出会いました。この場をお借りし、お世話になった多くの皆様に感謝申し上げます。



がんばらんば♪

事務員
星加 圭子



「歌って踊れる看護師を目指してるんです。」

この言葉どおり8月になると先生方は歌や踊りの練習を始めます。9月の交流会で学生さんたちに披露するためです。

ある年、振付用DVDを見せて頂きました。そこには派手な衣裳に身を包んだ集団が、ラップのリズムに乗って陽気に踊っている姿が映し出されています。「がんばらんば」です。自然に体が動

き出すこの曲は、いつしか大掃除の時のBGMとなり学期末の校内に響き渡るのです。

最終学年を残す今、交流会は形を変え、先生方が踊りの練習をすることも、この曲が校内に流れることももうありません。こうした看護専門学校ならではの光景が、一つひとつその姿を消し、やがて閉校の日を迎える事に一抹の寂しさを禁じませんが、本校に出会えたこと、この7年間支えて下さった多くの方々に感謝の思いで一杯です。ありがとうございました。そして、看護学部の更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。



看護専門学校とともに

図書館課主事
松本 玲子



1978年に専修学校として認可され名称も「看護専門学校」と改まった年に事務員として採用された私は、試行錯誤を繰り返しながらもアットホームな雰囲気の中で楽しい毎日を送っていました。

その後、大学図書館への異動を経て再び看護専門学校に図書室担当として戻りました。当時はカリキュラムの大幅な改定があり、看護基礎

教育において自己問題解決能力・情報処理能力が求められ図書室の役割がより重要となった頃で、このような時期に立ち会えたことはとても貴重な経験でした。

図書室は1994年の本館・図書館棟の新築に伴い、大学図書館内に移り今日に至っています。このたびの閉校はさびしい限りですがこれも学校の発展の一つの形と理解し、この長年培われた看護教育の精神が今後も継承されることを願っております。

大阪医科大学附属看護専門学校 校歌

作詞：校歌募集作品
作曲：小笠原 旭
編曲：佐藤 節子

一、看護の朝に夕なく 看護の技に限りなし
学んで遠き道なれど 白衣の姿に心を秘め
清く気高し清き泉 ここ北摂に湧きて尽きせぬ



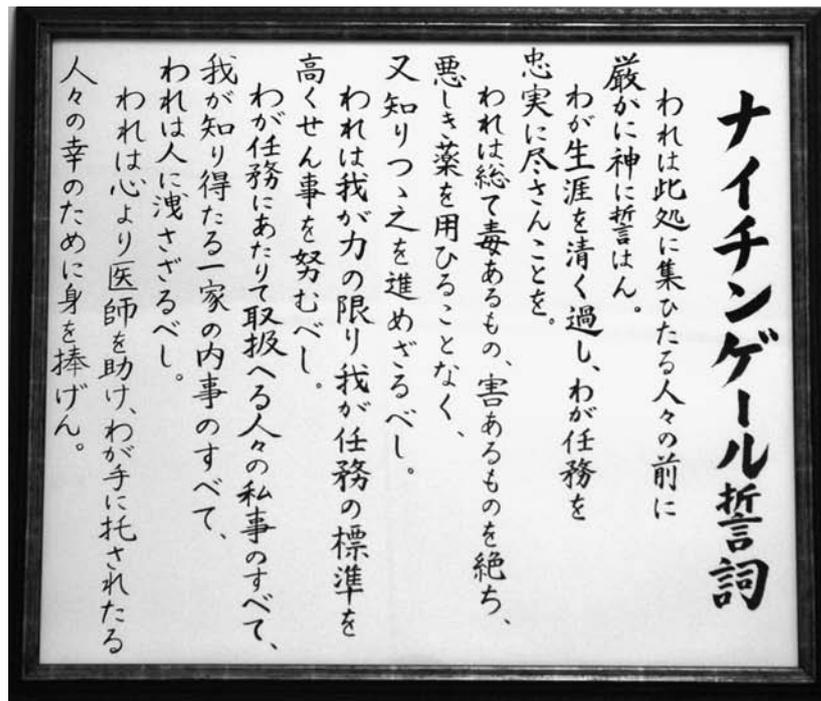
二、痛みて倒れし友共に 手をさしのべて導かん
ナイチンゲール精神は 学びの道を絶えなく輝し
真心こもる清き泉 ここ北摂に水すきとおる



三、夕べの空に星をみて 遠き故郷なつかしむ
乙女心も人の子の 我ら若人良き学び舎に
共に学ばん清き泉 ここ北摂に光り輝く



四、永遠に変わらん生駒山 淀の流れを眺る里に
我等導き灯の 清ゆる日どなき学び舎を
共に作らん清き泉 ここ北摂にあふれこぼれる



平成14年度 卒業記念品 (卒業生直筆)

第3部 資料

「83年の集積」



大阪医科大学附属看護専門学校基本理念

大阪医科大学附属看護専門学校は、大阪医科大学と共に長い伝統と文化をもち、高度医療の先端を担う大学病院で活躍するに相応しい良看護師の育成を目標に、附属病院との連携を図り、地域との連携を重視した社会のニーズに対応できる良看護師の育成を目指す。

教育理念

本校は、看護師として必要な専門知識と実践力を修得させ、よき社会人としての人格の形成に努めるとともに、保健・医療・福祉の分野はいうまでもなく、広く社会に貢献できる看護師を育成する。

学校教育法に基づき、看護専門課程を設け、保健師助産師看護師法に従い、優秀な看護師を育成することを目的とする。

教育目的

教育目標

1. 生命の尊厳を畏敬する深い人間愛を基礎とした豊かな人間性を養う。
2. 保健医療従事者としての社会的使命を自覚し、生涯にわたり探求する姿勢を養う。
3. 科学的思考力と創造性を養い、看護師に必要な専門的知識と対象者を中心とした看護実践力を習得する。
4. 社会環境の変化や疾病構造の変化を捉え、医療の高度化・多様化に対応できる基礎的能力を養う。
5. 地域の特性を理解し、多様な保健・医療・福祉の要請と地域住民のニーズを総合的にとらえ、看護を有効に機能させる基礎的能力を養う。

1. 人間愛と豊かな感性を兼ね備え、個人を尊重した態度で対象に関わることができる。
2. 人間や人間を取り巻く社会に対して興味・関心をもち、主体的・自主的に行動できる。
3. 対象に対して最大限の可能性を目指した看護実践への取り組みができる。
4. 知識を統合して、論理的・科学的に思考し活用することができる。
5. 看護専門職業人としての自覚と、継続学習による能力の維持・開発が生涯にわたって必要であることを理解し努力できる。

卒業時の期待像

アドミッションポリシー

前記の基本理念に基づいて、次のような学生を求める。

1. 人間についての理解と暖かい人間性を持ち、思い遣りの精神で行動できる学生
2. 人間との関わりに興味・関心を持ち、主体的に行動しようとする学生
3. 勤勉で、知識や技能を探求する姿勢をもつ学生
4. 自己のあり様を謙虚にみつめ、生涯にわたって向上しようと誠実に努力できる学生

「昭和2年～平成24年」



吉津 度

昭和2年2月28日～昭和7年3月15日



廣瀬 藤介

昭和46年5月31日～昭和60年6月30日



宮崎 重

平成3年6月1日～平成7年11月30日



國澤 隆雄

平成15年12月1日～平成22年3月31日

藤堂 献三

昭和8年5月28日～昭和46年5月31日
(昭和7年3月15日～昭和8年5月28日
理事長代理)



堀井 五十雄

昭和60年7月1日～平成3年5月31日



田中 忠彌

平成7年12月1日～平成15年11月30日



植木 實

平成22年4月1日～現在



「昭和4年～昭和37年」



吉津 度

昭和4年3月26日～昭和4年6月15日



大川 三治郎

昭和7年4月1日～昭和11年7月7日



盛 彌壽男

昭和15年4月1日～昭和21年3月25日



牧内 正一

昭和23年4月1日～昭和26年4月10日



満田 久敏

昭和34年5月25日～昭和35年8月31日

池口 輝雄

昭和4年6月15日～昭和7年3月31日



山崎 春三

昭和11年7月7日～昭和15年3月31日



小島 秋

昭和21年3月25日～昭和23年3月31日



原 亨

昭和26年4月10日～昭和34年5月25日



巽 稔

昭和35年9月1日～昭和37年8月31日



「昭和37年～平成24年」



岩田 繁雄

昭和37年9月1日～昭和44年2月19日



武田 一雄

昭和48年4月1日～昭和51年3月31日



小野村 敏信

平成6年4月1日～平成8年3月31日



東 郁郎

平成9年4月1日～平成11年3月31日



佐野 浩一

平成17年4月1日～平成21年3月31日

有原 康次

昭和44年2月19日～昭和48年3月31日



武内 敦郎

昭和51年4月1日～平成6年3月31日



堺 俊明

平成8年4月1日～平成9年3月31日



勢川 瑠美子

平成11年4月1日～平成17年3月31日



神谷 美佐子

平成21年4月1日～平成24年3月31日



大阪医科大学附属看護専門学校学則

第1章 組織

(目的)

第1条 本校は、学校教育法に基づき、看護専門課程を設け、保健師助産師看護師法に従い、優秀な看護師を育成することを目的とする。

(設置主体)

第2条 本校は、学校法人大阪医科大学がこれを設置する。

(名称)

第3条 本校は、大阪医科大学附属看護専門学校という。

(位置)

第4条 本校は、大阪府高槻市八丁西町7番6号に置く。

(自己点検、自己評価)

第5条 本校はその教育研究水準の向上を図り、本校の目的及び社会的使命を達成するため、本校における教育研究活動等の状況について、自ら点検及び評価を行うものとする。

2 前項の点検及び評価の実施等については、別に定める。

第2章 課程及び学科、修業年限並びに休業日

(課程、学科、修業年限、定員)

第6条 本校の課程、学科、修業年限並びに定員は次のとおりとする。

課程	学科	修業年限	入学定員	学級編成	総定員	備考
看護専門課程	看護学科	3年	80名	2学級 1学級40名	240名	昼間

(学年度、学期)

第7条 本校の学年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年度を次の2期に分ける。
前期 4月1日より9月30日まで
後期 10月1日より翌年3月31日まで

(休業日)

第8条 本校の休業日は次のとおりとする。

- 土曜日及び日曜日
 - 国民の祝日に関する法律(昭和23年7月20日法律第178号)に規定する休日
 - 大阪医科大学創立記念日 6月1日
 - 夏期休業日 7月21日より8月31日まで
 - 冬期休業日 12月21日より1月7日まで
 - 春期休業日 3月21日より4月7日まで
- 2 前項の規定にかかわらず学校長が特に必要と認めるときは、臨時に休業を行い、又は休業日に授業を行うことができる。

第3章 教育課程及び教員組織

(授業科目並びに単位数及び授業時間数)

第9条 本校の授業科目並びに単位数及び授業時間数は、別表1のとおりとする。

- 授業科目の単位数は1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の基準により計算するものとする。
 - 講義及び演習については、15時間から30時間をもって1単位とする。
 - 実験・実習及び実技については、30時間から45時間をもって1単位とする。
 - 臨地実習については、45時間をもって1単位とする。

(始業及び終業)

第10条 本校の始業および終業の時間は、次のとおりとする。

9時から16時10分まで

(教職員組織)

第11条 本校に次の教職員をおく。

- 学校長 1名
- 専任教員 8名以上
- 兼任教員 若干名
- 事務職員 1名以上
- 校医 1名
- その他 若干名(学校長が必要と認めた者)

- 学校長は、校務を総括し、所属教職員を監督する。
- 専任教員の教務に従事する事項は別に定める。
- 事務長は、学校長を補佐し事務全般を掌る。
- その他の職員は、校務を処理する。

(運営会議)

第12条 本校の運営に関する事項を審議するために運営会議を設ける。

2 運営会議に関し必要な事項は学校長が別に定める。

第4章 入学、休学、退学

(入学資格)

第13条 本校に入学することができる者は、次の各号の何れか1つに該当する者とする。

- 高等学校を卒業した者
- 通常の課程による12年の学校教育を修了した者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む。)
- 外国において学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- 文部科学大臣の指定した者
- 文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者
- 相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると本校が認めた者

(入学の時期)

第14条 本校の入学時期は4月とする。

(入学の手続)

第15条 本校の入学手続は次のとおりとする。

- 本校に入学を希望する者は、第27条に定める入学検定料を添えて、指定期日までに次の書類を提出しなければならない。
 - 入学願書
 - 高等学校卒業証明書又は卒業見込証明書
 - 高等学校の成績証明書
 - 写真(正面、脱帽、上半身、最近3ヶ月以内に撮影したもの)
- 本校は前項の手続を終了した者に対して、入学試験(学科試験、面接、健康診断)を行い、合格した者で所定の入学手続を完了した者について入学を許可する。
- 本校の入学試験に合格した者は、指定期日までに別表2の入学金を添えて入学手続をとらなければならない。
- 入学を許可された者は、保証人2名を定め、所定の誓約書を提出しなければならない。なお、保証人のうち1名は保護者をもってあて、その他の1名はなるべく大阪府下に居住し、独立の生計を営んでいるものとする。
- 保証人に変動が生じた場合は、速やかにその旨、文書をもって届け出なければならない。

(出席)

- 第16条 生徒は各授業科目につき所定の履修時間数の3分の2以上出席しなければならない。
- 病気又は、やむを得ない事情により授業を欠席する場合は、その事由を届け出なければならない。
 - 病気の為欠席日数が7日以上に及ぶ場合は、校医の診断書を添えなければならない。

(在学年限)

第17条 生徒の在学年限は、6年以内とする。

(休学・復学)

- 第18条 生徒が病気又は、事故により3ヶ月以上休学しようとする場合は、その事由を証明する書類を添え、保証人連署で休学を願い出なければならない。ただし休学期間は引き続き1年を越えることはできない。
- 前項の者が復学しようとする時は、保証人連署で復学願書を提出し、学校長の承認を受けなければならない。

(退学)

第19条 生徒が退学しようとする時は、その事由を明らかにし、必要書類を添え保証人連署で願い出、学校長の許可をうけなければならない。

(転入学)

第20条 転入学を希望する者がある場合には、教育計画及び学科実習の進度が同程度であり、かつ、やむを得ない事情があると認めた場合には、選考により許可することがある。

第5章 学習の評価及び単位認定並びに卒業

(試験及び成績評価)

- 第21条 生徒の成績は、学科試験及び実習の評価によって決める。
- 学科試験及び実習の評価は、授業科目終了後その都度これを行う。
 - 学科試験及び実習の評価は、100点満点とし、60点以上を合格とする。その他については、別に定める。
 - 学科試験または実習の評価が合格点に達しない場合は、願

い出により再試験又は補習を行うことがある。

- 5 病気その他やむを得ない事情により学科試験が受けられなかった者には願い出により追試験を許可することがある。

(単位認定)

第22条 学科目及び臨地実習の単位認定に関しては、次の各号に該当するものでなければならない。

- (1) 学科試験及び実習に合格した者
- (2) 出席すべき時間数の3分の2以上である者
- (3) 前号の出席時間数を満たし、各科目にかかる出席時間数が所定の時間数に満たない者で、本校の行う補習を受け第1号の試験に合格した者

(既修得授業科目の単位認定)

第23条 新たに本校の第1学年次に入学した生徒が、他の大学、短期大学、高等専門学校又は専修学校専門課程において修得している授業科目（以下「既修得授業科目」という。）については、教育上有益と認めるときは、その学力を確認し、本校において修得した授業科目として単位を認定することができる。

- 2 前項の規定により単位認定することができる授業科目は、基礎分野の授業科目に限定する。
- 3 前2項に定めるものその他、既修得授業科目の単位認定に関し必要な事項は、運営会議の議を経て、学校長が別に定める。

(卒業の認定および称号の授与)

第24条 生徒が本校所定の全課程を終了して、学科試験および実習に合格し、かつ出席時間数を満たした者に対して、学校長が卒業の認定を行い、別記の様式による卒業証書ならびに専門士（医療専門課程）の称号を授与する。

第6章 賞罰

(褒賞)

第25条 学業、操行共に優れ精勤者で他の模範となる者、また善行があった者に対して褒賞することができる。

(懲戒)

第26条 学校長が教育上必要と認めるときは、生徒に対して懲戒を加える事ができる。

- 2 懲戒の種類は次のとおりとする。

- (1) 訓告
- (2) 停学
- (3) 退学

- 3 前項第3号の退学は次の各号のいずれかに該当する生徒に対して行う。

- (1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
- (2) 学力劣等で成績向上の見込みがないと認められる者
- (3) 正当な理由がなく出席が常でない者
- (4) 学校の秩序を乱し、その他生徒としての本分に反した者

第7章 入学金、授業料、その他

(納付金)

第27条 本校の入学金及び授業料等は別表2のとおりとする。

- 2 納付金の納入時期及び方法については学校長が別に定める。

(奨学金)

第28条 本校に入学を許可された者には、奨学金を貸与する。

- 2 奨学金に関する規定は別に定める。

第29条 削除

(健康管理)

第30条 健康診断は毎年1回別に定めるところにより実施する。

- 2 定期診断以外の生徒の診療については別に定めるところによる。

(改廃)

第31条 この学則の改廃は、学校長が起案し、理事会の承認をもって行うものとする。

附則

この学則は、昭和53年4月1日より実施する。

附則

この改正は、昭和55年4月1日より実施する。ただし、昭和54年度以前より在学する者については改正後の第24条別表2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、昭和58年4月1日より施行する。ただし、経過措置として第5条の第一看護学科の総定員は、昭和58年度に限り40名、昭和59年度に限り80名とし、同条第二看護学科二部の総定員は、昭和58年度に限り80名、昭和59年度に限り40名とする。

附則

この改正は、昭和58年11月29日から施行する。

附則

この改正は、昭和60年4月1日より施行する。

附則

この改正は、昭和63年4月1日より施行する。

附則

この改正は、平成元年4月1日より施行する。

附則

この改正は、平成2年9月1日より施行する。

附則

この改正は、平成3年10月1日より施行する。

附則

この改正は、平成4年7月10日より施行する。

附則

この改正は、平成7年2月14日から施行する。

附則

この改正は、平成7年4月1日から施行する。ただし、平成6年度以前より在学する者については、改正後の第24条別紙2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成9年4月1日から施行する。ただし、平成8年度以前から在学する者については、改正後の第8条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成9年4月1日から施行する。ただし、平成8年度以前から在学する者については、改正後の第19条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成10年4月1日から施行する。ただし、平成9年度以前から在学する者については、改正後の第24条別表2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成11年4月1日から施行する。ただし、平成10年度以前から在学する者については、改正後の第8条別表1-2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成12年4月1日から施行する。

附則

この改正は、平成13年3月1日から施行する。

附則

この改正は、平成13年4月1日から施行する。ただし、平成12年度以前から在学する者については、改正後の第8条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成14年4月1日から施行する。ただし、平成13年度以前から在学する者については、改正後の第15条、第20条、第21条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成17年4月1日から施行する。ただし、平成16年度以前から在学する者については、改正後の第9条別表1、第17条、第24条様式、第27条別表2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第6条の経過処置として看護学科の総定員は、平成17年度に限り80名、平成18年度に限り160名とし、第一看護学科の総定員は平成17年度に限り80名、平成18年度40名とし、第二看護学科の総定員は平成17年度に限り40名とする。

附則

この改正は、平成17年4月1日から施行する。

附則

この改正は、平成18年4月1日から施行する。

附則

この改正は、平成19年4月1日から施行する。

附則

この改正は、平成21年4月1日から施行する。ただし、平成20年度以前から在学する者については、改正後の第9条別表1の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則

この改正は、平成22年4月1日から施行する。

なお、本校看護学科は平成22年4月1日をもって生徒募集を停止する。

人事・カリキュラムの変遷

	昭和4年度 (1929)	昭和5年度 (1930)	昭和6年度 (1931)	昭和7年度 (1932)	昭和8年度 (1933)	昭和9年度 (1934)	昭和10年度 (1935)	昭和11年度 (1936)	昭和12年度 (1937)	昭和13年度 (1938)	昭和14年度 (1939)
理事長	吉津 度	吉津 度	藤堂 献三 S7.3.15～理事長代理	藤堂 献三 S7.4.1～	藤堂 献三 S8.5.28～理事長	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三
学校長	吉津 度 S4.3.26～ 池口 輝雄 S4.6.15～	池口 輝雄	池口 輝雄	大川三治郎 S7.4.1～	大川三治郎	大川三治郎	大川三治郎	山崎 春三 S11.7.7～	山崎 春三	山崎 春三	山崎 春三
① ※旧制看護婦学校 S4年度～S25年度	カリキュラム1 旧制看護婦学校 計360名卒業	旧制看護婦学校 1回生 23名	旧制看護婦学校 2回生 23名	旧制看護婦学校 3回生 11名	旧制看護婦学校 4回生 23名	旧制看護婦学校 5回生 19名	旧制看護婦学校 6回生 17名	旧制看護婦学校 7回生 19名	旧制看護婦学校 8回生 15名	旧制看護婦学校 9回生 13名	旧制看護婦学校 10回生 12名
② 産婆講習会 助産婦学校 S10年度～S27年度				小田島栄子 S7.4～教育主任 新野 イト S7.4.29～兼教育主任	小田島栄子	小田島栄子	小田島栄子	小田島栄子	小田島栄子	小田島栄子	池本キヨコ S14.9.1～舎監・教育主任
③ 新制看護婦学校 S25年度～S28年度							産婆講習会 計193名受講 29名	産婆講習会 13名	産婆講習会 19名	産婆講習会 11名	産婆講習会 14名
④ 准看護婦学校 S28年度～S50年度											
⑤ 二年課程（全日制） S33年度～H17年度											
⑥ 二年課程（定時制） S40年度～S59年度											
⑦ 三年課程 S58年度～H23年度											
専任教員											
事務室											
図書室											
寄宿舎											
総婦長											

※旧制看護婦学校
正式名称は「大阪高等医学専門学校附属看護婦学校」
のちに助産婦学校が併設される
大阪医科大学設置認可に伴い「大阪医科大学附属看護婦学校」
となる

昭和10年より昭和21年まで
旧制看護婦学校卒業生を
対象に産婆講習会

昭和5年
三島病院(附属病院)開院
病床数120床

人事については発令簿により
不明の部分は空欄とした
カリキュラム は別表（p88～p97）参照

	昭和28年度 (1953)	昭和29年度 (1954)	昭和30年度 (1955)	昭和31年度 (1956)	昭和32年度 (1957)	昭和33年度 (1958)	昭和34年度 (1959)	昭和35年度 (1960)	昭和36年度 (1961)	昭和37年度 (1962)	昭和38年度 (1963)
理事長	藤堂 猷三	藤堂 猷三	藤堂 猷三	藤堂 猷三	藤堂 猷三						
学校長	原 亨	原 亨	原 亨	原 亨	原 亨	原 亨	満田 久敏 S34.5.26～	巽 稔 S35.9.1～	巽 稔	岩田 繁雄 S37.9.1～	岩田 繁雄
① 旧制看護婦学校 S4年度～S25年度											
② 産婆講習会 助産婦学校 S10年度～S27年度											
③ 新制看護婦学校 S25年度～S28年度											
④ 准看護婦学校 S28年度～S50年度											
⑤ 二年課程（全日制） S33年度～H17年度											
⑥ 二年課程（定時制） S40年度～S59年度											
⑦ 三年課程 S58年度～H23年度											
専任教員	寺尾 和子	有馬 英子	有馬 英子	有馬 英子	有馬 英子 新野瑠美子	新野瑠美子 市原伊勢子	新野瑠美子	新野瑠美子 大北シズ子	新野瑠美子 三好 淳子	三好 淳子	三好 淳子 堀畑奈里子 倉田 充子
事務室 主任 事務員											
図書室											
寄宿舎											
総婦長	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ						

昭和29年
愛泉寮新築竣工
昭和32年
愛泉寮別館新築竣工

昭和35年
病院1号館新築竣工
病床数150床増床
1階に中央材料室、回復室
2階に中央手術室
3階以上は病棟

昭和37年
愛泉寮1号館新築竣工
昭和39年
愛泉寮2号館新築竣工
昭和42年
愛泉寮3号館増改築竣工

昭和35年度
一時募集停止
昭和36年度
募集再開

カリキュラム4
准看護婦学校
計597名卒業
三好トラキ
S28.5.1～准看教務主任

カリキュラム5
看護婦学校
二年課程
計1,247名卒業

市原伊勢子
S34.4.1～看護婦学校教務主任

昭和39年度 (1964)	昭和40年度 (1965)	昭和41年度 (1966)	昭和42年度 (1967)	昭和43年度 (1968)	昭和44年度 (1969)	昭和45年度 (1970)	昭和46年度 (1971)	昭和47年度 (1972)	昭和48年度 (1973)	昭和49年度 (1974)	昭和50年度 (1975)	昭和51年度 (1976)	
藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	藤堂 献三	廣瀬 藤介 S46.5.31～	廣瀬 藤介	廣瀬 藤介	廣瀬 藤介	廣瀬 藤介	廣瀬 藤介	
岩田 繁雄	岩田 繁雄	岩田 繁雄	岩田 繁雄	有原 康次 S44.2.19～	有原 康次	有原 康次	有原 康次	有原 康次	武田 一雄 S48.4.1～	武田 一雄	武田 一雄	武内 敦郎 S51.4.1～	
		濱田春次郎 S41.4.1～主事	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎	濱田春次郎			
昭和39年 看護婦学校舎新築竣工 鉄筋3階建 (現在の八丁畷町3番3号)		昭和39年 結核病床20床減少・ 一般病棟138床増床した 病院2号館増築竣工		昭和41年 病院3号館新築竣工 病床数914床		昭和44年 清泉寮1号館新築竣工 昭和48年 清泉寮2号館新築竣工 昭和53年 清泉寮3号館新築竣工		昭和49年 病院5号館新築竣工 病床数992床					
第1次カリキュラム改正 昭和42年 包括医療・総合看護の考え方の普及、 医学の枠組みから看護学の枠組みへの転換													
准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	准 看護婦学校	
10回生	11回生	12回生	13回生	14回生	15回生	16回生	17回生	18回生	19回生	20回生	21回生		
34名	48名	47名	46名	41名	45名	41名	22名	19名	11名	15名	15名		
新野瑠美子	三好 淳子 S40.9.1～准 看護教務主任	三好 淳子	三好 淳子	三好 淳子	三好 淳子	三好 淳子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	
看護婦学校 二年課程	看護婦学校 二年課程 (1部)	昭和40年度から 一時募集停止								昭和50年から 再開校	カリキュラム7 看護婦学校 二年課程 (1部)	看護婦学校 二年課程 (1部)	
6回生 13名	7回生 10名										8回生 17名	8回生 17名	
新野瑠美子											橋本 豊子 S50.12.16～ 1部教務主任	橋本 豊子 1部教務主任	
	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	カリキュラム6 看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	カリキュラム8 看護婦学校 二年課程 (2部)	看護婦学校 二年課程 (2部)	
計527名卒業			1回生 13名	2回生 10名	3回生 10名	4回生 30名	5回生 20名	6回生 38名	7回生 38名	8回生 38名	9回生 40名	10回生 25名	
勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	
三好 淳子 堀畑奈里子 佐藤 敏子	堀畑奈里子 佐藤 敏子 藤井美枝子	堀畑奈里子 佐藤 敏子	堀畑奈里子	井芹 稔子 菅原 恵子	菅原 恵子 野島 豊子	菅原 恵子 野島 陽子 松田 辰巳	菅原 恵子 野島 陽子 松田 辰巳	菅原 恵子 野島 陽子 松田 辰巳	菅原 恵子 野島 陽子 松田 辰巳	菅原 恵子 野島 陽子 松田 辰巳	橋本 豊子 辰巳 恵子 岩 ちづる 神谷美佐子 陣内美樹子	辰巳 恵子 岩 ちづる 神谷美佐子 陣内美樹子 樋口喜久代 大谷 滝枝 小林千恵子 宮本 誠子	辰巳 恵子 神谷美佐子 大坪喜久代 城戸 滝枝 山下美智子
											安田 武夫	後藤 司郎	
											安田 武夫	安田 武夫	
											戸澤 信義	戸澤 信義	
					宮崎 久子	宮崎 久子	馬場 龍也 馬場 彌善	馬場 龍也 馬場 彌善	馬場 龍也 馬場 彌善	馬場 龍也 馬場 彌善	馬場 龍也 馬場 彌善	馬場 龍也 馬場 彌善	
三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	三好トラキ	

		平成2年度 (1990)	平成3年度 (1991)	平成4年度 (1992)	平成5年度 (1993)	平成6年度 (1994)
理事長		堀井五十雄	宮崎 重 H3.6.1～	宮崎 重	宮崎 重	宮崎 重
学校長		武内 敦郎	武内 敦郎	武内 敦郎	武内 敦郎	小野村敏信 H6.4.1～
教務課長		宮武 明	橋本 豊子 H3.9.1～教務課長代理	橋本 豊子	橋本 豊子 H5.4.1～教務課長	橋本 豊子
①	旧制看護婦学校 S4年度～S25年度					
②	産婆講習会 助産婦学校 S10年度～S27年度					
③	新制看護婦学校 S25年度～S28年度					
④	准看護婦学校 S28年度～S50年度					
⑤	二年課程（全日制） S33年度～H17年度	カリキュラム12 看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科
		22回生 44名 橋本 豊子 城戸 滝枝	23回生 38名 城戸 滝枝 H3.9.1～教務主任	24回生 45名 城戸 滝枝	25回生 46名 城戸 滝枝	26回生 46名 城戸 滝枝
⑥	二年課程（定時制） S40年度～S59年度					
⑦	三年課程 S58年度～H23年度	カリキュラム13 看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科
		6回生 39名 井原美保子 橋本 豊子 H2.4.1～教務主任代理	7回生 39名 井原美保子 H3.9.1～教務主任	8回生 29名 井原美保子	9回生 44名 井原美保子	10回生 47名 井原美保子
専任教員		小谷智恵子 緒方 巧 大平 佳子 榎園美知子 井上 悦子 吉岡 恵子 灘 久代 西山 裕子 是澤 佳恵 三輪田隆子 高山 妙子 小島サツキ	小谷智恵子 西山 裕子 榎園美知子 高山 妙子 灘 久代 大平 佳子 三輪田隆子 吉岡 恵子 緒方 巧 是澤 佳恵 井上 悦子 小島サツキ	小谷智恵子 西山 裕子 榎園美知子 高山 妙子 灘 久代 吉岡 恵子 三輪田隆子 是澤 佳恵 緒方 巧 中山サツキ 井上 悦子 柴田裕見子	小谷智恵子 高山 妙子 灘 久代 吉岡 恵子 三輪田隆子 是澤 佳恵 緒方 巧 中山サツキ 井上 悦子 柴田裕見子 西山 裕子 藤川 千洋	小谷智恵子 吉岡 恵子 灘 久代 是澤 佳恵 三輪田隆子 中山サツキ 緒方 巧 柴田裕見子 井上 悦子 藤川 千洋 西山 裕子 浅野 民子 高山 妙子 児玉 初美
事務局	事務局長付	鈴木 豊明	鈴木 豊明	鈴木 豊明	鈴木 豊明	鈴木 豊明
	事務局長 事務局長代理					
事務局	事務員	白石真里子 平手 千鶴 藤川 純子 白川 葉子	平手 千鶴 藤川 純子 中村 葉子 濱田 恵子 谷川 知里	平手 千鶴 谷川 知里 中村 葉子 前中 美佳 濱田 恵子	平手 千鶴 濱田 恵子 谷川 知里 前中 美佳	平手 千鶴 濱田 恵子 谷川 知里 前中 美佳
	図書室	崔 照子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子
寄宿舎		西村 榮 川口 房二 岡田喜久代 塚本恵美子	西村 榮 川口 房二 塚本恵美子	西村 榮 川口 房二 塚本恵美子 笹山 節子	西村 榮 川口 房二 笹山 節子 伊豆丸 剛	西村 榮 笹山 節子 伊豆丸 剛
看護部長		勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子

平成7年度 (1995)	平成8年度 (1996)	平成9年度 (1997)	平成10年度 (1998)	平成11年度 (1999)
田中 忠彌	田中 忠彌	田中 忠彌	田中 忠彌	田中 忠彌
H7.12.1～ 小野村敏信	H8.4.1～ 堺 俊明	H9.4.1～ 東 郁郎	東 郁郎	H11.4.1～ 勢川瑠美子
橋本 豊子	橋本 豊子	橋本 豊子	橋本 豊子	橋本 豊子
	平成8年 白友会(同窓会)設立			平成11年 専修学校の専門課程卒業者に大学 編入資格
		第3次カリキュラム改正 平成8年 在宅医療や精神保健等国民の ニーズの拡大への対応・看護 大学の増加を踏まえて自由裁 量の拡大		
看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	看護専門学校 第二看護学科	カリキュラム15 看護専門学校 第二看護学科
27回生 41名	28回生 36名	29回生 41名	30回生 34名	31回生 33名
城戸 滝枝	井原美保子	井原美保子	井原美保子	井原美保子
看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科	カリキュラム14 看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科	看護専門学校 第一看護学科
11回生 43名	12回生 55名	13回生 41名	14回生 40名	15回生 48名
井原美保子	城戸 滝枝	城戸 滝枝	城戸 滝枝	城戸 滝枝
灘 久代 中山サツキ 三輪田隆子 柴田裕見子 緒方 巧 藤川 千洋 井上 悦子 児玉 初美 高山 妙子 安德 秀子 吉岡 恵子 藤田 幸子 是澤 佳恵 小牟田美幸	灘 久代 藤川 千洋 三輪田隆子 安德 秀子 緒方 巧 森山 幸子 井上 悦子 小牟田美幸 高山 妙子 明田 朋子 吉岡 恵子 山本 俊子 中山サツキ	灘 久代 森山 幸子 三輪田隆子 小牟田美幸 井上 悦子 明田 朋子 高山 妙子 守本 俊子 中山サツキ 黒岩 真紀 藤川 千洋 黒岩 真紀 藤川 秀子 宗田真理子 安德 秀子	灘 久代 小牟田美幸 三輪田隆子 明田 朋子 高山 妙子 守本 俊子 中山サツキ 黒岩 真紀 藤川 千洋 谷口真理子 安德 秀子 須藤 葵 森山 幸子	三輪田隆子 明田 朋子 高山 妙子 守本 俊子 中山サツキ 須藤 葵 藤川 千洋 山川 由加 安德 秀子 佐藤真由美 森山 幸子 川西いづみ 小牟田美幸
絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一
平手 千鶴 濱田 恵子 谷川 知里 前中 美佳	平手 千鶴 濱田 恵子 小村 知里 前中 美佳	平手 千鶴 濱田 恵子 小村 知里 前中 美佳	平手 千鶴 濱田 恵子 小村 知里 前中 美佳	平手 千鶴 濱田 恵子 小村 知里 前中 美佳 河内 紀子
松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子
西村 榮 笹山 節子 伊豆丸 剛	笹山 節子 伊豆丸 剛	笹山 節子	笹山 節子	笹山 節子
勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子

		平成12年度 (2000)	平成13年度 (2001)	平成14年度 (2002)	平成15年度 (2003)	平成16年度 (2004)	
理事長		田中 忠彌	田中 忠彌	田中 忠彌	國澤 隆雄 H15.12.1～	國澤 隆雄	
学校長		勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	勢川瑠美子	
教務課長		西山 裕子 H12.4.1～教務課長	西山 裕子	西山 裕子	西山 裕子	西山 裕子	
①	旧制看護婦学校 S4年度～S25年度						
②	産婆講習会 助産婦学校 S10年度～S27年度		平成13年 清泉寮閉鎖	平成14年 看護師に呼称変更			
③	新制看護婦学校 S25年度～S28年度						
④	准看護婦学校 S28年度～S50年度						
⑤	二年課程 (全日制) S33年度～H17年度	看護専門学校 第二看護学科 32回生 40名 城戸 滝枝	看護専門学校 第二看護学科 33回生 38名 城戸 滝枝	看護専門学校 第二看護学科 34回生 45名 城戸 滝枝	看護専門学校 第二看護学科 35回生 39名 城戸 滝枝	看護専門学校 第二看護学科 36回生 39名 城戸 滝枝	
	⑥	二年課程 (定時制) S40年度～S59年度					
	⑦	三年課程 S58年度～H23年度	看護専門学校 第一看護学科 16回生 39名 三輪田隆子 H12.4.1～教務主任	看護専門学校 第一看護学科 17回生 45名 三輪田隆子	看護専門学校 第一看護学科 18回生 41名 三輪田隆子	看護専門学校 第一看護学科 19回生 35名 三輪田隆子	看護専門学校 第一看護学科 20回生 42名 三輪田隆子
専任教員		高山 妙子 山川 由加 森山 幸子 佐藤眞由美 小牟田美幸 細谷 千晶 明田 朋子 濱本由美子 守本 俊子 田代マツコ 須藤 葵	高山 妙子 山川 由加 森山 幸子 佐藤眞由美 小牟田美幸 細谷 千晶 明田 朋子 濱本由美子 守本 俊子 田代マツコ 須藤 葵	高山 妙子 佐藤眞由美 森山 幸子 細谷 千晶 小牟田美幸 濱本由美子 明田 朋子 田代マツコ 守本 俊子 由藤久美子 山川 由加	高山 妙子 佐藤眞由美 森山 幸子 濱本由美子 小牟田美幸 田代マツコ 明田 朋子 由藤久美子 守本 俊子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美	森山 幸子 濱本由美子 小牟田美幸 明田マツコ 明田 朋子 由藤久美子 守本 俊子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美	濱本由美子 田代マツコ 由藤久美子 重年 清香 高田 仁美 洋子 幸子 朋子 由加 幸子 由藤久美子 重年 清香 高田 仁美 洋子
事務室		事務長	絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一	絹見 紀一
	事務長代理					藤永 孝	
	事務長補佐		森本真佐子	森本真佐子	森本真佐子	森本真佐子	
	主任					宮本 りか	
事務員	平手 千鶴 濱田 恵子 小村 知里 前中 美佳	平手 千鶴 小村 知里 前中 美佳	小村 知里 前中 美佳	小村 知里 前中 美佳	小村 知里 前中 美佳		
図書室	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子		
寄宿舎	笹山 節子						
看護部長	神谷美佐子 H12.4.1～	神谷美佐子	神谷美佐子	神谷美佐子	神谷美佐子		

平成17年度 (2005)	平成18年度 (2006)	平成19年度 (2007)	平成20年度 (2008)	平成21年度 (2009)	平成22年度 (2010)	平成23年度 (2011)
國澤 隆雄	國澤 隆雄	國澤 隆雄	國澤 隆雄	國澤 隆雄	植木 實 H22.4.1～	植木 實
佐野 浩一 H17.4.1～	佐野 浩一	佐野 浩一	佐野 浩一	神谷美佐子 H21.4.1～	神谷美佐子	神谷美佐子
西山 裕子 H17.4.1～副学校長	西山 裕子	西山 裕子	西山 裕子	西山 裕子 ～H21.12.31		
	城戸 滝枝 H18.11.1～担当課長 三輪田隆子 H18.11.1～担当課長	城戸 滝枝 三輪田隆子	城戸 滝枝	森山 幸子 H21.5.1～教務課長代理 小牟田美幸 H21.5.1～教務課長代理	森山 幸子 小牟田美幸	森山 幸子
平成17年 看護専門学校校舎新築竣工 (八丁西町7番6号) ホームページ開設 病院7号館新築竣工 病床数1,026床 新講義実習棟 (PA会館) 新築竣工	平成18年 第一回白友祭 (学校祭) 開催		平成20年 愛泉寮閉鎖	平成21年 大阪医科大学看護学部看護学科 設置認可 平成22年 看護専門課程・看護学科の生徒 募集停止 看護学部研究棟新築竣工		
			第4次カリキュラム改正 平成20年 安心・安全な医療の再構築に 向けた看護師等の資質向上・ 看護実践能力の強化と卒業時 の到達目標の明確化			
看護専門学校 第二看護学科						
37回生						
43名						
城戸 滝枝						
看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科	看護専門学校 看護学科
21回生	22回生	23回生	24回生	25回生	26回生	27回生
40名	39名	80名	80名	71名	73名	60名
三輪田隆子		森山 幸子 H19.4.1～教務主幹 小牟田美幸 H19.4.1～教務主幹 守本 俊子 H19.4.1～教務主幹	森山 幸子 小牟田美幸 守本 俊子	守本 俊子	守本 俊子	守本 俊子
森山 幸子 濱本由美子 小牟田美幸 田代マツコ 明田 朋子 重年 清香 守本 俊子 高田 仁美 山川 由加 牟禮 洋子 佐藤眞由美 平井由里子	森山 幸子 田代マツコ 小牟田美幸 重年 清香 明田 朋子 高田 仁美 守本 俊子 牟禮 洋子 山川 由加 平井由里子 佐藤眞由美 吉田さとみ 濱本由美子	明田 朋子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美 牟禮 洋子 濱本由美子 平井由里子 田代マツコ 吉田さとみ	森安 朋子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美 牟禮 洋子 濱本由美子 平井由里子 田代マツコ 吉田さとみ	森安 朋子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美 牟禮 洋子 濱本由美子 平井由里子 田代マツコ 吉田さとみ	森安 朋子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美 牟禮 洋子 濱本由美子 平井由里子 藤澤由里子 吉田さとみ	森安 朋子 重年 清香 山川 由加 高田 仁美 佐藤眞由美 牟禮 洋子 濱本由美子 平井由里子 吉田さとみ
藤永 孝	藤永 孝	藤永 孝 田原 一也 中尾 基克	中尾 基克	中尾 基克	中尾 基克	中尾 基克
宮本 りか 小村 知里 前中 美佳 星加 圭子	宮本 りか 星加 圭子	星加 圭子 長谷川麻衣 造作 光	星加 圭子 長谷川麻衣 造作 光	造作 光 星加 圭子 長谷川麻衣	星加 圭子 長谷川麻衣	星加 圭子 吉田 麻衣
松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子	松本 玲子
神谷美佐子	神谷美佐子	神谷美佐子	神谷美佐子	小野恵美子 H21.4.1～	小野恵美子	小野恵美子

別表

カリキュラム 1

大阪高等醫學専門學校附属看護婦學校（昭和4年度～昭和24年度入学）

學期 學科	第一學年		第二學年	
	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数
修身	1	1	1	1
國語	2	2	1	1
解剖學大意	2	1		
生理學大意	2	1		
一般看護法	2	2		
消毒法	1			
繃帶學大意	1			
衛生學大意		2		
傳染病患者看護法		1		
醫療器械學大意		1		
治療介補法			1	
救急法			1	
藥餌			1	
小兒病看護法			1	
産婦看護法				1
精神病患者看護法				1
諸規則要領				無定時
實習	18以内	18以内	25以内	27以内

カリキュラム 2

大阪醫科大學助産婦看護婦學校（昭和21年度～昭和26年度入学）

看護婦科

學期 學科	第一學年		第二學年	
	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数
公民科	1	1	1	1
國語	1	1	1	1
物象	1	1	1	1
外國語（英・獨）	1	1	1	1
解剖學	2	2		
生理學	2	2		
一般看護法	1	1		
消毒學	1			
繃帶學	1			
患者運搬法	1			
衛生學		1		
傳染病患者看護法		1		
醫療器械學		1		
治療介補法			1	
救急法			1	
藥餌			1	
小兒看護法			1	
産婦看護法				1
精神病患者看護法				1
諸規則要領				1
實地見習	22	22	24	24
計	34	34	32	31

助産婦科

學期 學科	第一學年		第二學年	
	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数	第一學期 每週教授 時数	第二學期 每週教授 時数
公民科	1	2	1	1
外國語（英・獨）	1	2	1	1
解剖學大意	2			
生理學大意	2			
看護學大意	1			
細菌・消毒學大意	1			
正規妊娠分娩産褥 及其ノ取扱法	6			
異常妊娠分娩産褥 及其ノ取扱法		6		
新産兒取扱法及 新産兒疾病看護法		4		
産婆學臨床講義		4		
模型演習		4		
婦人科疾病一般 取扱		2		
産婆心得		1		
看護實地修練	20			
臨床實習			24	24
臨床講義			4	4
計	34	25	30	30

カリキュラム3

新制看護婦学校（昭和25年度～昭和27年度入学）

学 科 目	第一学年（週）			第二学年（週）		
	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期
解剖生理学	3					
細菌及消毒法	2					
個人及病院衛生	2					
食餌療法（調理法を含む）	2					
薬物学	2					
一般看護法	13	17	1		1	
看護史及看護倫理	2					
看護法理論及実地	6	6				
内科疾患及看護法（傳染病精神病を含む）	3	3				
外科疾患及看護法（整形外科包帯法救護法を含む）	2	2				
小児科疾患及看護法		2				
産婦人科疾患及看護法並びに新生児		2				
皮膚泌尿器疾患及看護法			1			
眼科齒科及耳鼻咽喉科疾患		2				
理学療法					1	
疾病と健康の社会的考察				1	1	1
衛生法規						1
家事家政	2	2				
小児保健指導				2		
英語		1	1	1	1	1
国語	1					
計	27	20	2	4	3	3

課外学科

音楽・体育・活花

臨床実習

病室其の他

科 目	週
内科(結核を含む)	16
外科	16
小児科	6
産婦人科	4
手術室	4
調理室	4
計	50

外来

科 目	週
内科	2
外科	2
小児科	2
産婦人科	2
皮膚泌尿器科	2
眼科	2
耳鼻科	2
計	14

総計週数（64）

カリキュラム4

准看護婦学校（昭和28年度～昭和49年度入学）

学 科 目	第一学年（週）			第二学年（週）		
	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期
解剖生理学	3					
細菌及消毒法	2					
個人及病院衛生	2					
食餌療法（調理法を含む）	2					
薬物学	2					
一般看護法	13	15	2	1	2	1
看護史及看護倫理	2					
看護法理論及実地	4	4				
内科疾患及看護法（傳染病精神病を含む）	3	3				
外科疾患及看護法（整形外科包帯法救護法を含む）	2	2	1			
小児科疾患及看護法	2	2				
精神科疾患及看護法				1	1	
産婦人科疾患及看護法並びに新生児		2				
皮膚泌尿器疾患及看護法			1			1
眼科齒科及耳鼻咽喉科疾患		2				
理学療法					1	
疾病と健康の社会的考察				1	1	
衛生法規						1
家事家政	2	2				
小児保健指導				2		
英語		1	1	1	1	1
国語	1					
計	27	18	3	5	4	3

課外学科

音楽・体育

臨床実習

病室其の他

科 目	週
内科(結核を含む)	16
外科	16
小児科	8
産婦人科	6
(精神科)(看護人)	(6)
手術室	4
調理室	4
計	54

外来

科 目	週
内科	2
外科	2
小児科	2
産婦人科	2
(精神科)(看護人)	(2)
皮膚泌尿器科	2
眼科、齒科及耳鼻咽喉科	5
計	15

総計週数（69）

看護婦学校

学 科 目	第一学年 (週)		第二学年 (週)		総数
	前期	後期	前期	後期	
医 学 概 論	1				15
解 剖 生 理 学	5				30
細 菌 学	2				30
病 理 学	3	3			30
生 化 学	3	3			30
教 育 学		3	3		45
心 理 学		3			45
精 神 衛 生		1			15
統 計		3	3		45
社 会 学		3			45
社 会 福 祉				1	30
公 衆 衛 生 概 論		3			30
栄 養	2				30
薬 理	2				30
化 学	3				45
物 理	3				45
生 物	3				45
看 護 学	4	11	28	21	620
看 護 史	2				15
職 業 的 調 整		2	2		45
看 護 原 理 及 び 実 際	2	2			90
公 衆 衛 生 看 護 概 論			2		15
内 科 学 及 び 看 護 法		3			60
外 科 学 及 び 看 護 法		4	5		80
伝 染 病 学 及 び 看 護 法				3	75
小 児 科 学 及 び 看 護 法			3	5	60
産 婦 人 科 学 及 び 看 護 法			3	5	60
精 神 病 学 及 び 看 護 法			3		30
眼 科 学			3		15
歯 科 学			2	2	15
耳 鼻 咽 喉 科 学			2		15
皮 膚 泌 尿 器 科 学				6	30
理 学 療 法			3		15
英 語	1	1	1	1	80
独 語			1	1	40
音 楽	1	1	1	1	80
体 育	1	1	1	1	80
計	34	36	38	26	1,485

病室その他の実習

科 目	週
内 科	8
外 科	8
小 児 科	8
産 婦 人 科	8
伝 染 病	4
手 術 室	4
精 神 科	4
計	44

外来実習

科 目	週
内 科	2
外 科	2
小 児 科、産 婦 人 科	2
耳 鼻、眼 科	2
歯 科 及 び 皮 膚 泌 尿 器 科	2
保 健 所	1
計	11

第1次カリキュラム改正 医学の枠組みから看護学の枠組みへ

カリキュラム6

(二年課程定時制)

看護婦学校2部 (昭和43年度～昭和49年度入学)

	学 科 目	時間数	
基礎科目	物理学	30	
	化学	30	
	生物学	30	
	統計学	45	
	社会学	30	
	心理学	45	
	教育学	30	
	外国語	90	
	体育	45	
	音楽	30	
	小 計	405	
	専門基礎科目	医学概論	15
		解剖学	15
生理学		15	
生化学 (含栄養学)		45	
薬理学 (含薬剤学)		30	
病理学		45	
微生物学		30	
公衆衛生学		30	
社会福祉		15	
衛生法規		15	
小 計		255	

	学 科 目	時間数
専門科目	看護学総論	135
	看護概論	60
	看護技術 (講義)	75
	成人看護学	390
	成人看護概論	15
	成人保健	60
	成人疾患と看護	315
	内科疾患と看護	105
	精神科疾患と看護	30
	外科疾患と看護	60
	整形外科疾患と看護	30
	皮膚科疾患と看護	15
	泌尿器科疾患と看護	15
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	15
	耳鼻咽喉科疾患と看護	15
	歯科疾患と看護	15
	小児看護学	90
	小児看護概論	15
	小児保健	30
	小児疾患と看護	45
	母性看護学	90
	母性看護概論	15
	母性保健	60
	母性疾患と看護	15
	小 計	705

	学 科 目	時間数
実 習	看護学総論	150
	看護概論	
	看護技術	
	総合実習	
	成人看護学	515
	内科疾患と看護	200
	精神科疾患と看護	45
	外科疾患と看護	150
	整形外科疾患と看護	
	皮膚科疾患と看護	30
	泌尿器科疾患と看護	
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	30
	耳鼻咽喉科疾患と看護	
	歯科疾患と看護	
	保健所等実習	45
	小児看護学	120
	母性看護学	130
実習小計	915	
合 計	2,280	

カリキュラム7

(二年課程全日制)

看護婦学校1部 (昭和50年度～昭和52年度入学)

看護学科1部 (昭和53年度～昭和57年度入学)

	学 科 目	時間数
基礎科目	物理学	30
	化学	30
	生物学	30
	統計学	45
	社会学	30
	心理学	45
	教育学	30
	外国語 (英語)	90
	体育	45
	哲学	30
	音楽	30
	小 計	435
	専門基礎科目	医学概論
解剖学		30
生理学		30
生化学 (含栄養学)		45
薬理学 (含薬剤学)		30
病理学		45
微生物学		30
公衆衛生学		30
社会福祉		15
衛生法規		15
小 計		285

	学 科 目	時間数
専門科目	看護学総論	135
	看護概論	60
	看護技術 (講義)	75
	成人看護学	390
	成人看護概論	15
	成人保健	60
	成人疾患と看護	315
	内科疾患と看護	105
	精神科疾患と看護	30
	外科疾患と看護	60
	整形外科疾患と看護	30
	皮膚科疾患と看護	15
	泌尿器科疾患と看護	15
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	15
	耳鼻咽喉科疾患と看護	15
	歯科疾患と看護	15
	小児看護学	90
	小児看護概論	15
	小児保健	30
	小児疾患と看護	45
	母性看護学	90
	母性看護概論	15
	母性保健	60
	母性疾患と看護	15
	小 計	705

	学 科 目	時間数
実 習	看護学総論	150
	看護概論	
	看護技術	
	総合実習	
	成人看護学	515
	内科疾患と看護	200
	精神科疾患と看護	45
	外科疾患と看護	150
	整形外科疾患と看護	
	皮膚科疾患と看護	30
	泌尿器科疾患と看護	
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	30
	耳鼻咽喉科疾患と看護	
	歯科疾患と看護	
	保健所等実習	45
	小児看護学	120
	母性看護学	130
実習小計	915	
合 計	2,340	

看護婦学校2部(昭和50年度～昭和52年度入学)

	学 科 目	時間数
基礎科目	物理学	30
	化学	30
	生物学	30
	統計学	45
	社会学	30
	心理学	45
	教育学	30
	外国語	90
	体育	45
	哲学	30
	音楽	30
	小 計	435
	専門基礎科目	医学概論
解剖学		15
生理学		15
生化学(含栄養学)		45
薬理学(含薬剤学)		30
病理学		45
微生物学		30
公衆衛生学		30
社会福祉		15
衛生法規		15
小 計		255

	学 科 目	時間数
専門科目	看護学総論	135
	看護概論	60
	看護技術(講義)	75
	成人看護学	390
	成人看護概論	15
	成人保健	60
	成人疾患と看護	315
	内科疾患と看護	105
	精神科疾患と看護	30
	外科疾患と看護	60
	整形外科疾患と看護	30
	皮膚科疾患と看護	15
	泌尿器科疾患と看護	15
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	15
	耳鼻咽喉科疾患と看護	15
	歯科疾患と看護	15
	小児看護学	90
	小児看護概論	15
	小児保健	30
	小児疾患と看護	45
	母性看護学	90
	母性看護概論	15
母性保健	60	
母性疾患と看護	15	
小 計	705	

	学 科 目	時間数
実習	看護学総論	150
	看護概論	
	看護技術	
	総合実習	
	成人看護学	515
	内科疾患と看護	200
	精神科疾患と看護	45
	外科疾患と看護	150
	整形外科疾患と看護	
	皮膚科疾患と看護	30
	泌尿器科疾患と看護	
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	
	耳鼻咽喉科疾患と看護	30
	歯科疾患と看護	
	保健所等実習	45
	小児看護学	120
母性看護学	130	
実習小計	915	
合 計	2,310	

看護学科2部(昭和53年度～昭和57年度入学)

	学 科 目	時間数	
基礎科目	物理学	30	
	化学	30	
	生物学	30	
	統計学	45	
	社会学	30	
	心理学	45	
	教育学	30	
	外国語(英語)	90	
	体育	45	
	音楽	30	
	小 計	405	
	専門基礎科目	医学概論	15
		解剖学	30
生理学		30	
生化学(含栄養学)		45	
薬理学(含薬剤学)		30	
病理学		45	
微生物学		30	
公衆衛生学		30	
社会福祉		15	
衛生法規		15	
小 計		285	

	学 科 目	時間数
専門科目	看護学総論	135
	看護概論	60
	看護技術(講義)	75
	成人看護学	390
	成人看護概論	15
	成人保健	60
	成人疾患と看護	315
	内科疾患と看護	105
	精神科疾患と看護	30
	外科疾患と看護	60
	整形外科疾患と看護	30
	皮膚科疾患と看護	15
	泌尿器科疾患と看護	15
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	15
	耳鼻咽喉科疾患と看護	15
	歯科疾患と看護	15
	小児看護学	90
	小児看護概論	15
	小児保健	30
	小児疾患と看護	45
	母性看護学	90
	母性看護概論	15
母性保健	60	
母性疾患と看護	15	
小 計	705	

	学 科 目	時間数
実習	看護学総論	150
	看護概論	
	看護技術	
	総合実習	
	成人看護学	515
	内科疾患と看護	200
	精神科疾患と看護	45
	外科疾患と看護	150
	整形外科疾患と看護	
	皮膚科疾患と看護	30
	泌尿器科疾患と看護	
	婦人科疾患と看護	15
	眼科疾患と看護	
	耳鼻咽喉科疾患と看護	30
	歯科疾患と看護	
	保健所等実習	45
	小児看護学	120
母性看護学	130	
実習小計	915	
合 計	2,310	

第二看護学科1部(昭和58年度～平成元年度入学)

基礎科目			専門科目			実習		
学 科 目	時間数		学 科 目	時間数		学 科 目	時間数	
物理学	30	基礎科目	看護学総論	135	専門科目	看護学総論	150	実習
化学	30		看護概論	60		看護概論		
生物学	30		看護技術(講義)	75		看護技術		
統計学	45		成人看護学	400		総合実習		
社会学	30		成人看護概論	15		成人看護学	515	
心理学	45		成人保健	60		内科疾患と看護	200	
教育学	30		成人疾患と看護	325		精神科疾患と看護	45	
外国語(英語)	90		内科疾患と看護	105		外科疾患と看護	150	
体育	45		精神科疾患と看護	30		整形外科疾患と看護		
哲学	30		外科疾患と看護	70		皮膚科疾患と看護	30	
音楽	30		整形外科疾患と看護	30		泌尿器科疾患と看護		
小 計	435		皮膚科疾患と看護	15		婦人科疾患と看護	15	
医学概論	15		泌尿器科疾患と看護	15		眼科疾患と看護	30	
解剖学	30		婦人科疾患と看護	15		耳鼻咽喉科疾患と看護		
生理学	30		眼科疾患と看護	15		保健所等実習	45	
生化学(含栄養学)	45	耳鼻咽喉科疾患と看護	15	小児看護学	120			
薬理学(含薬剤学)	30	歯科疾患と看護	15	母性看護学	130			
病理学	45	小児看護学	90	実習小計	915			
微生物学	30	小児看護概論	15	合 計	2,350			
公衆衛生学	30	小児保健	30					
社会福祉	15	小児疾患と看護	45					
衛生法規	15	母性看護学	90					
小 計	285	母性看護概論	15					
		母性保健	60					
		母性疾患と看護	15					
		小 計	715					

第一看護学科(昭和58年度～平成元年度入学)

基礎科目			専門科目			実習		
学 科 目	時間数		学 科 目	時間数		学 科 目	時間数	
物理学	30	基礎科目	看護学総論	275	専門科目	看護学総論	210	実習
化学	30		看護概論	120		看護技術	90	
生物学	30		看護技術(講義)	155		総合実習	120	
統計学	30		成人看護学	540		成人看護学	1,173	
社会学	30		成人看護概論	30		内科疾患と看護	435	
心理学	30		成人保健	75		精神科疾患と看護	90	
教育学	30		成人疾患と看護	435		外科疾患と看護	330	
外国語(英語)	120		内科疾患と看護	135		整形外科疾患と看護	90	
体育	60		精神科疾患と看護	30		皮膚科疾患と看護	45	
哲学	30		外科疾患と看護	120		泌尿器科疾患と看護		
音楽	30		整形外科疾患と看護	45		婦人科疾患と看護	45	
小 計	450		皮膚科疾患と看護	15		眼科疾患と看護		
医学概論	15		泌尿器科疾患と看護	15		耳鼻咽喉科疾患と看護	90	
解剖学	45		婦人科疾患と看護	30		歯科疾患と看護		
生理学	45		眼科疾患と看護	15		保健所等実習	48	
生化学(含栄養学)	45	耳鼻咽喉科疾患と看護	15	小児看護学	180			
薬理学(含薬剤学)	30	歯科疾患と看護	15	母性看護学	210			
病理学	45	小児看護学	120	実習小計	1,773			
微生物学	45	小児看護概論	15	合 計	3,608			
公衆衛生学	30	小児保健	30					
社会福祉	15	小児疾患と看護	75					
衛生法規	15	母性看護学	120					
小 計	330	母性看護概論	15					
		母性保健	75					
		母性疾患と看護	30					
		小 計	1,055					

第2次カリキュラム改正 老人看護学の新設

カリキュラム12

(二年課程全日制)

第二看護学科 (平成2年度～平成10年度入学)

	学 科 目	時間数
基礎科目	教育学	30
	文学	30
	論理学	30
	社会学	30
	心理学	30
	生活科学	30
	人間工学	30
	英語 I	30
	英語 II	35
	英語 III	40
	保健体育	15
	保健実技	30
	小 計	360
	専門基礎科目	医学概論
解剖生理学		60
生化学 (含栄養学)		30
薬理学		30
病理学 I		20
病理学 II		90
微生物学		30
公衆衛生学		15
社会福祉		30
関係法規		15
精神保健		30
小 計		380

	学 科 目	時間数
専門科目	基礎看護学	165
	看護学概論	45
	基礎看護技術	45
	基礎看護技術演習	30
	臨床看護総論	30
	臨床看護演習	15
	成人看護学	225
	成人看護概論	15
	成人保健	30
	成人臨床看護	135
	成人臨床看護演習	45
	老人看護学	60
	老人看護概論	15
	老人保健	15
老人臨床看護	15	
老人臨床看護演習	15	
小児看護学	90	
小児看護概論	15	
小児保健	30	
小児臨床看護	20	
小児臨床看護演習	25	

	学 科 目	時間数
専門科目	母性看護学	90
	母性看護概論	15
	母性保健	30
	母性臨床看護	30
	母性臨床看護演習	15
	看護研究	40
小 計	670	
実習	基礎看護 I	60
	基礎看護 II	30
	成人看護	450
	老人看護	
	小児看護	90
	母性看護	90
実習小計	720	
合 計	2,130	

カリキュラム13

(三年課程)

第一看護学科 (平成2年度～平成8年度入学)

	学 科 目	時間数
基礎科目	教育学	30
	文学	30
	論理学	30
	社会学	30
	心理学	30
	生活科学	30
	人間工学	30
	英語 I	30
	英語 II	50
	英語 III	40
	保健体育	15
	保健実技	45
	小 計	390
	専門基礎科目	医学概論
解剖生理学		120
生化学		30
栄養学		30
薬理学		45
病理学 I		30
病理学 II		125
微生物学		45
公衆衛生学		30
社会福祉		30
関係法規		30
精神保健		45
小 計		590

	学 科 目	時間数
専門科目	基礎看護学	300
	看護学概論	45
	基礎看護技術	113
	基礎看護技術演習	82
	臨床看護総論	52
	臨床看護演習	8
	成人看護学	315
	成人看護概論	15
	成人保健	30
	成人臨床看護	220
	成人臨床看護演習	50
	老人看護学	90
	老人看護概論	15
	老人保健	15
老人臨床看護	40	
老人臨床看護演習	20	
小児看護学	120	
小児看護概論	15	
小児保健	30	
小児臨床看護	35	
小児臨床看護演習	40	

	学 科 目	時間数
専門科目	母性看護学	120
	母性看護概論	15
	母性保健	30
	母性臨床看護	45
	母性臨床看護演習	30
	看護研究	70
小 計	1,015	
実習	基礎看護 I	5
	基礎看護 II	100
	基礎看護 III	30
	成人看護	630
	老人看護	
	小児看護	135
母性看護	135	
実習小計	1,035	
合 計	3,030	

第3次カリキュラム改正 在宅看護論・精神看護学の新設

カリキュラム14

(三年課程)

第一看護学科 (平成9年度～平成16年度入学)
看護学科 (平成17年度～平成20年度入学)

	内 容	学 科 目	単位数	時間数
基礎分野	科学的思考の基盤	論理的思考	1	30
		情報科学	2	45
		外国語 (英語)	4	120
	人間と人間生活の理解	社会学	1	30
		心理学	1	30
		教育学	1	30
		人間関係論	1	30
		保健体育 (含実技)	2	45
		小 計	13	360
	専門基礎分野	人体の構造と機能	解剖生理学	4
代謝栄養学			2	45
疾病の成り立ちと回復の促進		病理学 (I・II)	6	180
		微生物学	2	45
社会保障制度と生活者の健康		保健医療論	1	15
		公衆衛生学	2	30
		社会福祉	2	30
		関係法規	1	15
		小 計	22	525
基礎看護学		看護学概論	2	45
	基礎看護技術	6	165	
	看護方法総論	2	60	
	看護過程			
	フィジカルアセスメント			
	経過別看護			
	治療処置別看護 (含蘇生)			
	ME機器			
在宅看護論	在宅看護論概論	1	15	
	在宅看護方法	3	90	
	看護方法			
	医療依存			
	通院治療			
	寝たきり			
	認知症			
	自宅で死			
成人看護学	成人看護学概論	1	30	
	成人看護方法	5	135	
	看護方法			
	身体一部喪失			
	生活行動に障害			
	感染により障害			
	生涯にわたりセルフコントロール			
	生命危機状態			
治癒困難				

	内 容	学 科 目	単位数	時間数
老年看護学	老年看護学概論	老年看護学概論	1	15
		老年看護方法	3	75
	看護方法	看護方法		
		依存と自立		
		老人と手術		
		死の尊厳		
	小児看護学	小児看護学概論	1	30
		小児看護方法	3	75
	母性看護学	母性看護学概論	1	15
		母性看護方法	3	90
精神看護学	精神看護学概論	1	15	
	精神看護方法	3	75	
	心の健康			
	看護1 全代償			
	看護2 一部代償			
	看護3 支持・教育 社会適応			
看護研究		2	60	
	小 計	38	990	
臨地実習	基礎看護学	3	135	
	在宅看護論	2	90	
	成人看護学	8	360	
	老年看護学	4	180	
	小児看護学	2	90	
	母性看護学	2	90	
	精神看護学	2	90	
	実習小計	23	1,035	
	合 計	96	2,910	

第二看護学科 (平成11年度～平成16年度入学)

	内 容	学 科 目	単位数	時間数	
基礎分野	科学的思考の基盤	論理的思考	1	45	
		情報科学	1	45	
	人間と人間生活の理解	外国語(英語)	2	75	
		家族社会学	1	30	
		教育学	1	30	
		人間関係の心理学	1	45	
		スポーツと健康(含実技)	1	45	
		小 計	8	315	
専門基礎分野	人体の構造と機能	解剖生理学	2	60	
		生化学	1	15	
	疾病の成り立ちと回復の促進	病理学(I・II)	5	135	
		微生物学	1	30	
		薬理学	1	30	
	社会保障制度と生活者の健康	保健医療論	1	15	
		公衆衛生学	1	15	
		社会福祉	1	15	
		関係法規	1	15	
	小 計	14	330		
基礎看護学		看護学概論	2	45	
		基礎看護技術	3	75	
		看護方法総論	2	60	
		看護過程			
		経過別看護			
		主要症状別看護			
		治療処置別看護(含蘇生)			
		ME機器			
		継続看護			
		在宅看護論	在宅看護論概論	1	15
			在宅看護方法I	1	15
			在宅看護方法II	1	45
			医療依存		
			通院治療		
		成人看護学	成人看護学概論	1	30
成人看護方法	5		135		
健康な成人の看護					
骨・関節・筋系障害患者の看護					
血液・造血器系疾患患者の看護					
免疫系障害患者の看護					
循環器系障害患者の看護					
感覚器系障害患者の看護					
末梢神経系障害患者の看護					
呼吸器系障害患者の看護					
消化器系障害患者の看護					
生殖器系障害患者の看護					
中枢神経系障害患者の看護					
泌尿器系障害患者の看護					
内分泌系障害患者の看護					

	内 容	学 科 目	単位数	時間数
老年看護学		老年看護学概論	1	15
		老年看護方法I	1	15
		老年看護方法II	1	30
		依存と自立		
		老人と手術		
		死の尊厳		
		小児看護学	小児看護学概論	1
	小児看護方法	2	60	
母性看護学		母性看護学概論	1	15
		母性看護方法	2	60
精神看護学		精神看護学概論	1	15
		精神看護方法	2	45
		心の健康		
		看護1 全代償		
		看護2 一部代償		
	社会適応			
看護研究			2	60
小 計			30	750
臨地実習		基礎看護学	3	135
		在宅看護論	2	90
		成人看護学	3	135
		老年看護学	2	90
		小児看護学	2	90
		母性看護学	2	90
		精神看護学	2	90
		実習小計	16	720
合 計			68	2,115

第4次カリキュラム改正 看護実践能力の強化

カリキュラム16

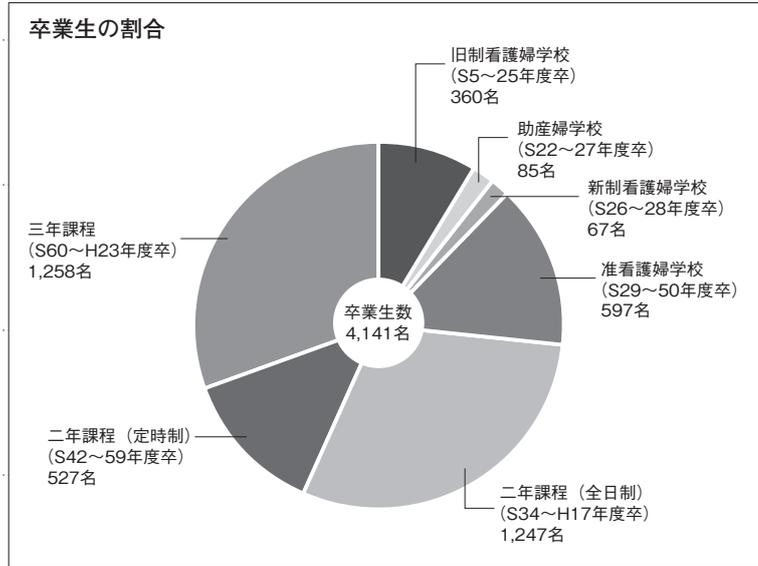
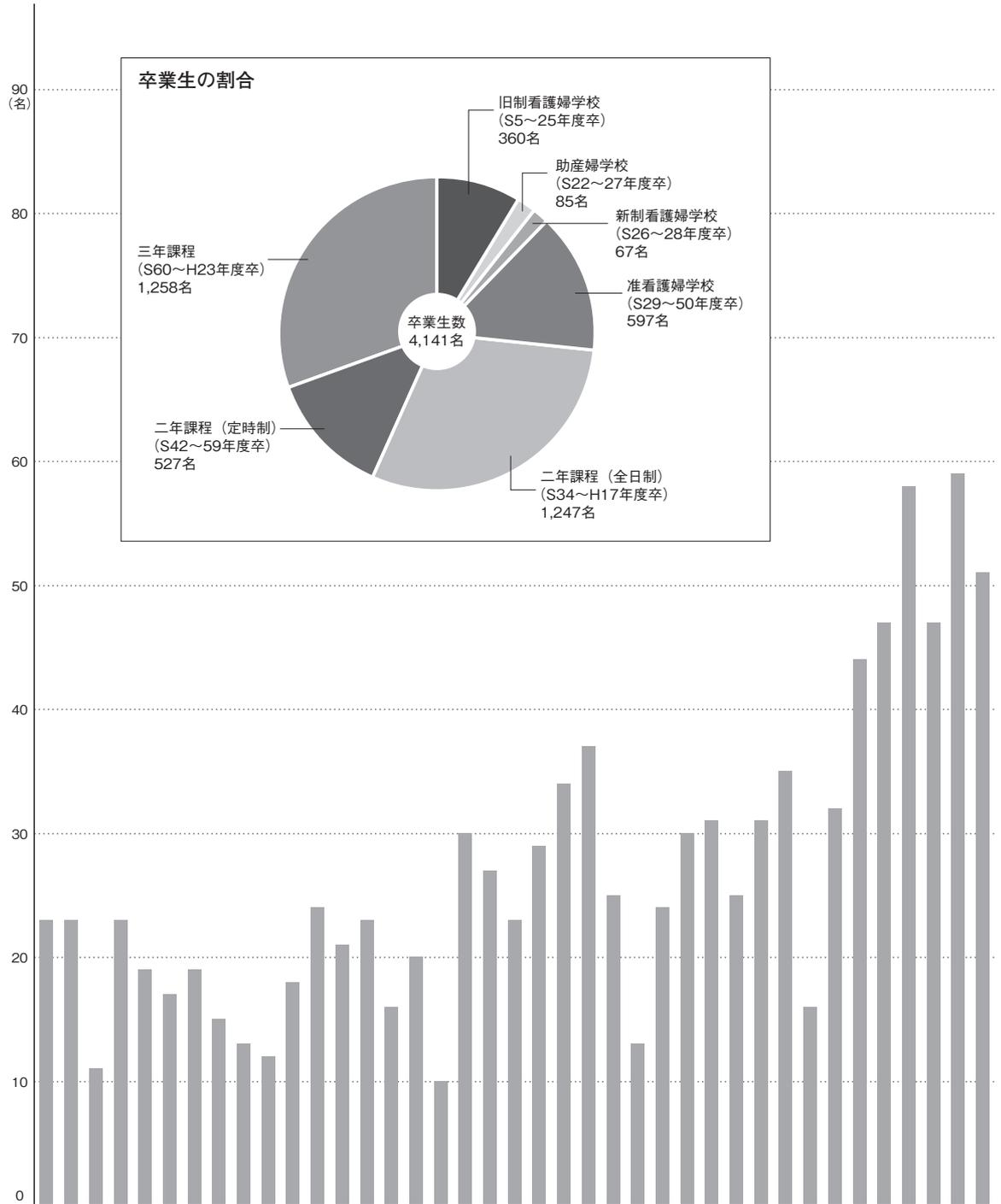
(三年課程)

看護学科 (平成21年度入学)

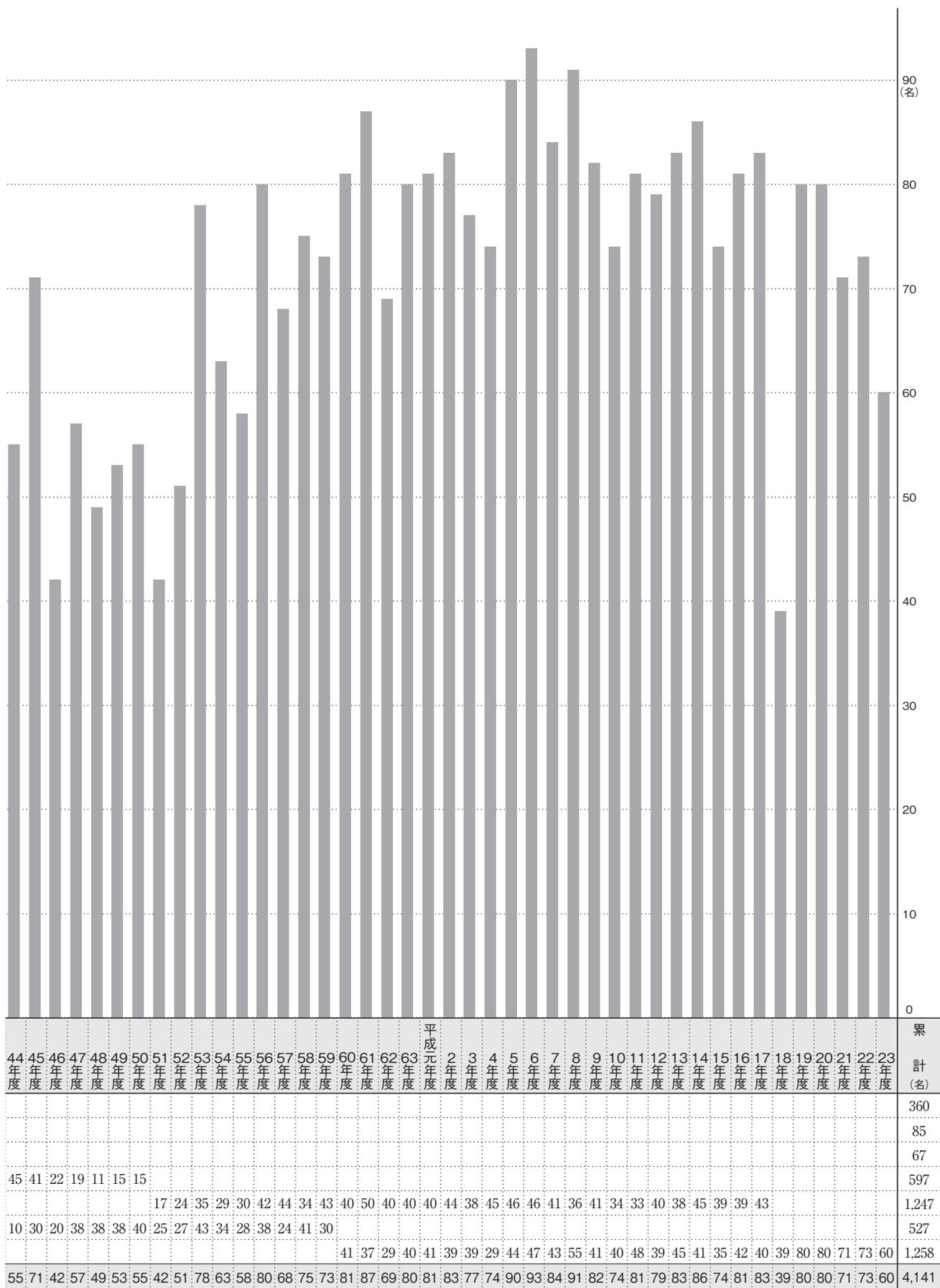
	学 科 目	単位数	時間数
基礎分野	論理的思考	1	30
	情報科学	2	45
	外国語 (英語)	4	120
	社会学	1	30
	心理学	1	30
	教育学	1	30
	人間関係論	1	30
	保健体育 (含実技)	2	45
	小 計	13	360
専門基礎分野	解剖生理学	4	120
	代謝栄養学	2	45
	病理学 (I・II)	6	180
	微生物学	2	45
	薬理学	2	45
	保健医療論	1	15
	公衆衛生学	2	30
	社会福祉	2	30
	関係法規	1	15
	小 計	22	525
専門 I	看護学概論	2	45
	基礎看護技術	6	175
	看護方法総論	2	50
	看護過程		
	フィジカルアセスメント		
	経過別看護		
	治療処置別看護 (含蘇生)		
ME機器			
専門 II	成人看護学概論	1	30
	成人看護方法	5	135
	看護方法		
	身体一部喪失		
	生活行動に障害		
	感染により障害		
	生涯にわたりセルフコントロール		
	生命危機状態		
	治療困難		
	老年看護学概論	1	15
	老年看護方法	3	75
	看護方法		
	依存と自立		
	老人と手術		
	死の尊厳		
	小児看護学概論	1	30
	小児看護方法	3	75
	母性看護学概論	1	15
	母性看護方法	3	90
	精神看護学概論	1	15
	精神看護方法	3	75
	心の健康		
	看護1 全代償		
看護2 一部代償			
看護3 支持・教育			
社会適応			
看護研究	2	60	

	学 科 目	単位数	時間数
統合分野	在宅看護論概論	1	20
	在宅看護方法	3	85
	看護方法		
	医療依存		
	通院治療		
	寝たきり		
	認知症		
	自宅で死		
	看護の統合と実践 I	1	30
	看護の統合と実践 II	1	30
看護の統合と実践 III	1	30	
看護管理と国際協力	1	30	
小 計	42	1,110	
臨地実習	基礎看護学	3	135
	成人看護学	6	270
	老年看護学	4	180
	小児看護学	2	90
	母性看護学	2	90
	精神看護学	2	90
	在宅看護論	2	90
	看護の統合と実践 (総合)	2	90
	実習小計	23	1,035
	合 計	100	3,030

卒業生数の推移



卒業年度	昭和5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度	37年度	38年度	39年度	40年度	41年度	42年度	43年度				
旧制看護婦学校	23	23	11	23	19	17	19	15	13	12	18	24	21	23	16	20	10	14	10	7	22																						
助産婦学校																		16	17	16	7	13	16																				
新制看護婦学校																						21	21	25																			
准看護婦学校																										13	24	30	31	25	23	22		18	27	34	48	47	46	41			
二年課程 (全日制)																													8	13	16	14	17	13	10								
二年課程 (定時制)																																											
三年課程																																											
卒業生数	23	23	11	23	19	17	19	15	13	12	18	24	21	23	16	20	10	30	27	23	29	34	37	25	13	24	30	31	25	31	35	16	32	44	47	58	47	59	51				
産婆講習会							29	13	19	11	14	10	23	23	19	21	11	計	193	名																							



44年度	45年度	46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	平成元年	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	累計 (名)						
																																																	360
																																																	85
45	41	22	19	11	15																																											67	
						17	24	35	29	30	42	44	34	43	40	50	40	40	40	44	38	45	46	46	41	36	41	34	33	40	38	45	39	39	43														597
10	30	20	38	38	38	40	25	27	43	34	28	38	24	41	30																																	1,247	
																41	37	29	40	41	39	39	29	44	47	43	55	41	40	48	39	45	41	35	42	40	39	80	80	71	73	60							1,258
55	71	42	57	49	53	55	42	51	78	63	58	80	68	75	73	81	87	69	80	81	83	77	74	90	93	84	91	82	74	81	79	83	86	74	81	83	39	80	80	71	73	60						4,141	

学校の変遷

年	月日	教育課程・大学・附属病院の変遷	月	関連法改正・社会情勢
昭和2年 (1927)	2.28 4.1	財団法人大阪高等医学専門学校設置認可 大阪高等医学専門学校開校（修業年限5年）	3 4 5	産婆規則の改正（勅令第39号） 聖路加女子専門学校発足 日本産婆会設立
昭和3年 (1928)			1	新京阪電鉄開通（現阪急電鉄京都線淡路～高槻町間）
昭和4年 (1929)	3.26 4.1	大阪高等医学専門学校附属看護婦学校設置認可（大阪市北区萬歳町） 旧制看護婦学校開校 梅田病院内	10	文部省の訓令第21号をもって学校看護婦に関する件を制定（学校看護婦の資格基準、職務内容を明示）
昭和5年 (1930)	1.22 3.15 5.15 8.-	本館、解剖館、別館、附属病院、臨床講堂竣工 三島病院開院準備（1,077坪、2階建） 三島病院（附属病院）開院 病床数120（開業局 医師 吉津度 大阪府知事宛） 萬歳町より移転 大阪府三島郡磐手村字古曾部350番地（現在の高槻市大学町2番7号）	4	聖路加女子専門学校に研究科（公衆衛生看護学科）を設置
昭和6年 (1931)			9	満州事変がおこる
昭和7年 (1932)	5.7	高槻ほか5ヶ町村組合立伝染病院（校内）竣工一般病棟増築、伝染病棟を併せて病床数205床	1	上海事変がおこる
昭和8年 (1933)				- 産婆規則の改正（内務省令第168号）
昭和9年 (1934)			9	室戸台風 近畿を襲う
昭和10年 (1935)	4.-	産婆講習会開講 ～昭和21年3月		
昭和14年 (1939)	12.7	病院病室、事務室の増築工事竣工	9	第2次世界大戦始まる
昭和16年 (1941)			10 12	看護婦規則改正（看護婦の資格年齢18歳から17歳に引下げ） ハワイ真珠湾攻撃、太平洋戦争が始まる
昭和18年 (1943)			1	高槻が市制を実施
昭和19年 (1944)			3	看護婦規則改正（看護婦の最低資格年齢を17歳から16歳に）
昭和20年 (1945)			10	連合軍総司令部（GHQ）の公衆衛生福祉局に看護課が設置された。初代課長にオルト大尉が着任。わが国の衛生制度、施設看護体制、看護教育などに改革が進められた
昭和21年 (1946)	3.30 4.1	大阪医科大学設置認可（旧制大学） 助産婦学校併設 ～昭和28年3月（昭和21年12月2日助産婦認可 文教2号）	6 11	聖路加・日赤の両女子専門学校が合併し、看護教育模範学院となる 日本産婆看護婦保健婦協会設立
昭和22年 (1947)			5 7	産婆規則が助産婦規則に改正 保健婦助産婦看護婦令公布
昭和23年 (1948)	2.20	大阪医科大学医学部認可	7	厚生省医務局に看護課設置。保助看令にかわり保健婦助産婦看護婦法公布（看護婦は甲種・乙種の2種類となる）
昭和24年 (1949)			6 - - 3 9 9 10	日本助産婦看護婦保健婦協会 ICN に再加入 保健婦助産婦看護婦養成所指定規則公布 短期大学設置基準に基づき天使女子専門学校が、4月には聖母厚生女子学院が最初の看護短期大学となる 国立病院に総婦長1名を置く（厚生省組織規程） 厚生省、完全看護・完全給食実施 第1回甲種看護婦国家試験実施
昭和25年 (1950)	4.1	新制看護婦学校開校	4 7 8	保助看法改正（甲乙2種の別を廃止、准看護婦制度新設） 日本助産婦看護婦保健婦協会は日本看護協会と改称 国立鯖江病院で誤注射事件
昭和26年 (1951)	3.2 3.- 5.24 8.31	学校法人大阪医科大学認可（組織変更による） 旧制看護婦学校廃止 病院に結核病棟50床附設 病院病床数267床 新制度の乙種看護婦学校指定（昭和26年8月31日付乙種指定校大541号文部大臣）	4 7 8	高知女子大学家政学部に看護学科開学、初の4年制大学 NHKがテレビの本放送を開始する 初の国立として東京大学医学部に衛生看護学科開設
昭和27年 (1952)	2.20 3.15 11.-	大阪医科大学設置認可（新制大学）現在に至る 大阪高等医学専門学校廃校 結核病棟82床に増 病院病床数287床	4	高知女子大学家政学部に看護学科開学、初の4年制大学
昭和28年 (1953)	4.1 6.- 9.12	准看護婦学校認可・開校（保助看法第22条第1号指定 昭和28年4月1日 地大87号文部大臣） 看護婦寄宿舎（愛泉寮）用地取得 臨床研究室と普通病室を増築 病院病床数334床	2 4	NHKがテレビの本放送を開始する 初の国立として東京大学医学部に衛生看護学科開設
昭和29年 (1954)	3.- 6.17 9.-	新制度の乙種看護婦学校廃止 神経科本館新築（病床22床）結核病床100床と神経科46床増 病院病床数502床 看護婦寄宿舎（愛泉寮木造本館）新築竣工	2 4	高槻市に市営バス運行 公立・私立の看護短期大学増加（京都市立・聖路加・日赤など）
昭和31年 (1956)	3.- 4.2 11.30 12.25	図書館新築 神経科病室増設により33床増 病院本館3階増築 普通病棟増設75床 病院病床数610床	3 4 10 12	厚生省看護課廃止される。看護課、歯科衛生課、医事課が統合され、医事課となる。 保助看養成所規則改正（2年制看護教育課程設置） 大学設置基準制定 国際連合に加盟

年	月日	教育課程・大学・附属病院の変遷	月	関連法改正・社会情勢
昭和 32 年 (1957)	3.	- 看護婦寄宿舎 (愛泉寮木造別館) 新築竣工 8. - 総合病院承認	10	ソ連が世界最初の人工衛星スプートニク 1 号の打ち上げに成功
昭和 33 年 (1958)	3.	- 恩賜館を附属看護婦学校に用途変更のため移設 (本館北側) 3.31 図書館二期 (第一会議室、職員食堂) 増築 4. - 看護婦学校 (二年課程) 開校 (昭和 34 年 1 月 29 日付認可: 保助看法第 21 条第 3 号に基づく学校指定 地大 27 号文部省) 6. - 看護婦学校増築工事竣工 10.10 結核病棟の 62 床を普通病床に改造	10	完全看護廃止、基準看護となる 10 東京タワー 333 m 完工 12 1 万円札の発行
昭和 34 年 (1959)	2.10	病院病床数 614 床 4.30 医局・研究室棟新築竣工	1	新国民健康保険法施行 (国民皆保険 2,300 万人加入) 9 伊勢湾台風 (死者不明者 5,000 人超) 明治以来最大
昭和 35 年 (1960)	1.22	病院 1 号館新築竣工 (中央手術室、病棟増築) 150 床増 病院病床数 764 床 4. - 准看護婦学校募集一時停止	1	経済の高度成長時代に入る - ヘンダーソン「看護の基本となるもの」を著す
昭和 36 年 (1961)	3. 4	分娩室改造竣工、病院分娩室他増 病院病床数 773 床 4. - 准看護婦学校募集再開	7	小児麻痺の大流行、ソ連の生ワクチン 1,300 人分輸入 8 国立病院の看護職員の勤務時間が週 44 時間制となる
昭和 37 年 (1962)	2.15	看護婦寄宿舎 (愛泉寮 1 号館) 新築竣工	1	看護婦不足が深刻となる。不足対策のため、厚生省、日本看護協会、日本医師会の 3 者で看護制度調査会を開催し検討する 9 2 年課程看護婦養成所 (定時制) 発足 - 流感 (A 2 型) が東京から全国に流行 (死者 5,868 人)
昭和 39 年 (1964)	3.	- 看護婦寄宿舎 (愛泉寮 2 号館) 新築竣工 5.26 病院 2 号館増築竣工 (結核病床 20 床減、一般 138 床増) 10.30 看護婦学校 (二年課程 2 部) 設置認可 (昭和 39 年 10 月 30 日付、学校教育法第 83 条 (各種学校) 大阪府) 12.10 看護婦学校校舎新築竣工 (現在の八丁畷町 3 番 3 号)	4	高等学校衛生看護科が誕生、専攻科卒は国試 4 聖路加女子短期大学が聖路加看護大学となる 4 東京大学医学部衛生看護学科を保健学科と改称、大学院設置 9 モノレール開通 (羽田～浜松町間) 10 東海道新幹線開業 (東京～大阪間 4 時間) 10 東京オリンピック開催
昭和 40 年 (1965)	4. 1	看護婦学校 (二年課程 2 部) 開校 (昭和 40 年 4 月 1 日付地大 33 号文部省) 4. - 名称変更: 看護婦学校 (二年課程) → 看護婦学校 (二年課程 1 部) 4. - 看護婦学校 (二年課程 1 部) 募集一時停止	7	名神高速道路全線開通
昭和 41 年 (1966)	5.15	病院 3 号館新築竣工 病院病床数 914 床	4	厚生省は看護婦学校養成所の看護教員養成講習会 (期間 6 か月) 開始 4 熊本大学教育学部に特別教科 (看護) 教員養成課程開設 (その後、徳島大学・弘前大学・千葉大学に開設) 4 日本の人口 1 億人を超える (1 億 55 万 4,894 人)
昭和 42 年 (1967)	3.31	看護婦寄宿舎 (愛泉寮 3 号館) 増改築竣工 11. 8 高槻市ほか 2 市町伝染病組合病院 用地貸与	4	国立大阪大学に最初の国立医療技術短期大学部看護学科開学 11 第 1 次カリキュラム改正 (包括医療・総合看護の考え方の普及、医学の枠組みから看護学の枠組みへの転換) 翌年から新カリキュラム実施 11 日本看護学会発足 12 C. バーナード世界初の心臓移植手術実施
昭和 43 年 (1968)	2. 20	病院外来棟 (外来診察室、薬局、管理室) 新築竣工 3.28 京都大学化学研究所跡土地建物と等価交換完了 9. - 看護婦学校寄宿舎 (清泉寮) 用地取得	3	二・八闘争が全国に波及 5 男子看護人を看護士に呼称変更 7 郵便番号制度発足 8 日本初の心臓移植手術 (札幌医大)
昭和 44 年 (1969)	3.30	看護婦学校寄宿舎 (清泉寮 1 号館) 新築竣工 11.30 職員厚生会館竣工	7	米宇宙船アポロ 11 号、月面に第 1 歩を印す
昭和 45 年 (1970)			3	大阪吹田市で日本万国博覧会開催 (半年間に 6,400 余万入場)
昭和 47 年 (1972)	12. -	工作所、病院 8 病棟、協和病棟取壊	4	日本看護協会看護研修学校開校 7 雇用の分野における男女均等な機会及び待遇の確保等に関する法律
昭和 48 年 (1973)	9.27	看護婦学校寄宿舎 (清泉寮 2 号館) 新築竣工	-	老人医療費無料化制度実施
昭和 49 年 (1974)	3.28	臨床講堂棟新築竣工 9.16 病院 5 号館新築竣工 病院病床数 992 床	2	ナースバンク制度創設
昭和 50 年 (1975)	4. -	看護婦学校 (二年課程 1 部) 募集再開 5.17 別館建物改造完了 (看護婦学校に転用) 9.20 講義実習棟新築竣工	3	新幹線、岡山・博多間開業 (東京～博多間全通) 4 千葉大学に国立大学として初の 4 年制看護学部が設置される 5 日本女性初のエベレスト初登頂 7 学校教育法の一部改正により専修学校制度が発足
昭和 51 年 (1976)	3. -	准看護婦学校廃止 (昭和 52 年 8 月 27 日付保助看法第 22 条第 1 号に規定する学校指定の取消し) 3. - 電気室、病院 7 病棟、病院調理室、病院浴室、給食休憩室、新講堂及び生理学実習室…取壊 4. 1 看護婦学校 (二年課程) 入学定員の変更 (二年課程 1 部 15 名 → 40 名、2 部 30 名 → 40 名) 10. - 病院輸血室設置	1	鹿児島で 5 つ児誕生 2 ロッキード事件発覚 5 国立病院事務部長制発足と併せて総婦長を看護部長と呼称
昭和 52 年 (1977)	5.14	大阪医科大学創立 50 周年記念式典挙行 11.30 中央診療棟竣工 12. - 中央手術部設置	5	第 16 回 ICN 大会、東京で開催 9 王貞治が通算 756 本塁打で世界最高記録を達成、国民栄誉賞第 1 号に

年	月日	教育課程・大学・附属病院の変遷	月	関連法改正・社会情勢
昭和53年 (1978)	2.15 4.1	看護専門学校寄宿舎(清泉寮3号館)新築竣工 看護専門学校看護専門課程認可・開校 名称変更:二年課程1部・2部→看護学科1部・2部	5 9	新東京国際空港(成田空港)開港 WHO、ソ連のアルマ・アタでプライマリー・ヘルスケアに関する国際会議開催(アルマ・アタ宣言)
昭和54年 (1979)	2. 3.29	- 病院人工腎臓センター設置 体育館新築竣工	4 6	千葉大学大学院看護研究科開設 第5回先進国首脳会議(東京サミット)開催
昭和55年 (1980)	6. 7. 12.	- 看護婦寄宿舎用地(八丁畷町3番3号)取得 - 看護婦寄宿舎(愛泉寮木造本館)取壊 - 看護婦寄宿舎(愛泉寮5号館)新築竣工	5 9	WHOが天然痘撲滅を宣言 イラン・イラク戦争勃発
昭和56年 (1981)	5. 6.26 6.	- 看護婦寄宿舎(愛泉寮木造別館)取壊 病院6号館新築竣工 病院病床数1,083床 - 病院リハビリテーションセンター、周産期センター設置	3 4 5	国家公務員に週休2日制(4週5休)導入 初のホスピス誕生 日本看護協会保健婦助産婦看護婦部会を統合し日本看護協会組織の一本化
昭和57年 (1982)	1.12 6. 12. 12.23	看護婦寄宿舎(愛泉寮6号館)新築竣工 - 病院本館取壊 - 病院管理棟新築竣工 第一看護学科(三年課程:高等学校普通科卒業)認可 名称変更:看護学科1部・2部→第二看護学科1部・2部	4 4 8 11	フォークランド紛争(6.14アルゼンチン軍降伏) 500円硬貨発行 老人保健法成立(医療費の本人一部負担、診療報酬一部改正) 日本看護協会出版会、創立10周年特別講演にヴァージニア・ヘンダーソンを招聘
昭和58年 (1983)	1.10 4. 4.	看護婦寄宿舎(愛泉寮7号館)新築竣工 - 第一看護学科(三年課程)開校 - 第二看護学科2部募集停止	4 6	放送大学開学 厚生省、エイズ(AIDS)研究班発足
昭和60年 (1985)			4 4 4	「男女雇用機会均等法」施行 ソ連、チェルノブイリ原子力発電所で大事故 日本赤十字看護大学開設
昭和62年 (1987)			4 6 9	国鉄、分割・民営化実施「JR」スタート 社会福祉士・介護福祉士・臨床工学技士法など制度化 精神保健法公布
平成元年 (1989)			1 4 12	昭和天皇崩御(87歳) 第2次カリキュラム改正(教育におけるゆとりと自由裁量の拡大・男女同一の教育の実現・高齢化社会への対応・老人看護学の新設) ゴールドプラン策定(高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略)
平成2年 (1990)	2.28 8.	総合研究棟新築竣工 - 大学本館、精神神経科本館、厨房休憩所、カルテ倉庫 取壊	1 4 10 12	初の大学入試センター試験実施 大阪で「国際花と緑の博覧会」開幕 東西ドイツ統一 5月12日を「看護の日」と制定(厚生省)
平成4年 (1992)			3 4 6 9	東海道新幹線「のぞみ」が登場 訪問看護制度創設(老人訪問看護療養費・訪問看護ステーション) 看護婦等の人材確保の促進に関する法律(都道府県ナースバンクを改組、中央及び都道府県ナースセンター事業実施) 毛利衛、スペースシャトル「エンデバー」で宇宙飛行
平成5年 (1993)	3.15	立体駐車場新築竣工	4 6 11	看護学教育の4年制大学化進む。7大学が開設 皇太子結婚 保健士誕生(平成5年11月)平成6年春の国家試験に67人の保健士が合格
平成6年 (1994)	2.1 5.30 -	特定機能病院承認 本館・図書館棟新築竣工 - 看護専門学校紀要(創刊号)発行	6 6 6 7 12	新看護体系(付添解消) 松本市でサリン中毒事件 専修学校の修了者に専門士の称号を付与 向井千秋、スペースシャトル「コロンビア」で初の日本人女性宇宙飛行 新ゴールドプラン策定(在宅制度の充実等) - 専門看護婦制度発足
平成7年 (1995)	11.28	エイズ拠点病院指定	1 2 5 6	阪神・淡路大震災(死者6,434人) 東京・地下鉄でサリン中毒事件 認定看護婦制度発足 介護休業法が成立
平成8年 (1996)	4. 6.1 6.1	- 保健管理室設置 白友会(同窓会)設立 白友会誌(創刊号)発行	4 5 6	第3次カリキュラム改正(在宅医療や精神保健等国民のニーズの拡大への対応・看護大学の増加を踏まえた自由裁量の拡大) 癩予防法廃止 初の専門看護婦誕生 第1回日本看護サミット開催(岐阜県)
平成9年 (1997)	3.25 3.31 4. 4. 10.4	災害拠点病院指定 病院西管理棟新築竣工 - 白友会会報(第一号)発行 - 指定規則の一部改正に伴う単位制の導入 大阪医科大学創立70周年記念式典挙行	5	初の認定看護婦誕生
平成11年 (1999)	4.1	高槻市ほか二市町伝染病院組合(旧伝染病棟)取得(無償譲渡)(呼称:共同利用会館)	4 6 6 7	専修学校の専門課程卒業者に大学編入資格 ICN創立100周年 初の認定看護管理者誕生 京都大学病院で世界初の生体ドミノ・分割肝移植はじまる

年	月日	教育課程・大学・附属病院の変遷	月	関連法改正・社会情勢
平成 12 年 (2000)	4.	- 臨床治験センター設置	2	大阪府知事に太田房江が当選、全国初の女性知事
			4	入院基本料の設定(看護料・入院時医学管理料・入院環境料の包括評価)
			4	「まちの保健室」事業開始
			4	介護保険制度発足
平成 13 年 (2001)	3.16	本部北キャンパス(日本鉄道建設公団用地)取得(看護専門学校校地)	12	皇太子ご夫妻に愛子さまご誕生
	3.27	清泉寮閉鎖		
	4. 1	臨床工学室設置		
	4. 1	大阪医科大学 LD センター開設(共同利用会館の一部を使用)		
	4.30	本部北西キャンパス(高槻 YMCA 土地・建物)取得(大学校地・校舎)		
	5. 1	病院医療相談部設置		
	5.15	人工腎臓センターを血液浄化センターに名称変更		
	7. 1	病院病理部設置		
平成 14 年 (2002)	7.	- 図書館、自転車置場、車庫、医局、研究室取壊	1	EU12 カ国でユーロの現金流通開始
	10. 1	物流センター、医療安全対策室設置 内視鏡センターを消化器内視鏡センターに病院事務部栄養給食課を栄養部栄養課に名称変更	3	看護師に呼称変更:平成 13 年保助看法改正 保健師、助産師、看護師、准看護師誕生
	11. 1	歴史資料館設置準備室設置	8	健康増進法
			9	「看護師等による静脈注射の実施について」厚生労働省医政局通知
平成 15 年 (2003)			3	「新たな看護のあり方に関する検討会」報告書(厚生労働省)
			3	WHO が SARS の集団発生を警告
			4	高槻市、中核市に移行
平成 16 年 (2004)	1. 1	病院卒後臨床研修センター設置	1	山口県の養鶏場で鳥インフルエンザ発生
	6. 1	診療情報管理室設置	3	看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標(文部科学省)
	11. 1	第一看護学科学則(入学定員・教育課程)、校舎の各室の用途及び面積、実習施設の変更承認	4	看護師養成所二年課程に通信制を適用
平成 17 年 (2005)	2.	- 看護専門学校校舎新築竣工	4	J R 西日本・福知山線脱線事故、107 名死亡
	4. 1	第一看護学科の入学定員を 40 名から 80 名に増員 名称変更:第一看護学科→看護学科	5	南裕子 ICN 会長就任
	4. 1	第二看護学科募集停止 新校舎完成に伴う所在地の変更:高槻市八丁西町 7 番 6 号		
	6.16	新総合棟(病院 7 号館)新築竣工 病院病床数 1,026 床		
	7.25	病院医療機能評価認定受領		
	12.	- 新講義実習棟(PA 会館)新築竣工		
平成 18 年 (2006)	3.31	第二看護学科廃止(指定取消:平成 18 年 6 月 20 日承認)(文部科学省平成 18 年 3 月 31 日付)	4	診療報酬改定で 7:1 入院基本料新設
	5.13	看護専門学校第 1 回白友祭開催(学校祭)	4	褥瘡ハイリスク患者ケア加算
	6. 1	歴史資料館設置	6	がん対策基本法成立
			6	看護基礎教育の充実に関する検討会
			12	教育基本法改正案成立
平成 19 年 (2007)	11.14	地域周産期母子医療センター認定	2	「東京マラソン 2007」開催、3 万人が都心を走る
			7	新潟中越沖地震発生
			9	第 12 回日本看護サミットおおさか'07 開催
平成 20 年 (2008)	3.	- 愛泉寮閉鎖	1	第 4 次カリキュラム改正(安心・安全な医療の再構築に向けた看護師等の資質向上・看護実践能力の強化と卒業時の到達目標の明確化) 93 単位→97 単位、看護の統合と実践
	7.10	大阪府肝疾患診療連携拠点病院指定	4	大分県立看護科学大学大学院でナース・プラクティショナー教育の開始
	10. 1	キャリア形成支援センター設置	7	看護基礎教員のあり方に関する懇談会(厚生労働省)
	11. 1	病院病棟療養環境整備 病院病床数 957 床	3	訪問看護 10 カ年戦略「在宅ケアの最前線～明日の在宅ケアを考えよう～」
	12. 7	救急病院指定	7	「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律案」衆参全会一致で可決 ・看護師国試資格に「大学」を明記 ・保健師・助産師の教育年限 1 年以上に ・卒後研修の努力義務化
平成 21 年 (2009)	4. 1	地域がん診療連携拠点病院に指定	12	新人看護職員研修ガイドライン(厚生労働省)
	6. 1	健康科学クリニック開所	2	今後の看護教員のあり方に関する報告書(厚生労働省)
	9. 1	許可病床数 935 床(HCU 設置)	3	チーム医療の推進について(チーム医療の推進に関する検討会報告書)厚生労働省
	10.30	大阪医科大学看護学部看護学科認可		
平成 22 年 (2010)	3.16	看護学部研究棟新築竣工		
	4. 1	大阪医科大学 看護学部看護学科 開設		
	4. 1	看護専門課程・看護学科の生徒募集停止		
	-	病院医療機能評価認定受領		
平成 23 年 (2011)	3.	- 周産期センターの充実(NICU・GCU の増床)	3	東日本大震災(死者 15,000 人超)
	5.28	健康科学クリニックが日本人間ドック学会認定	3	福島第一原子力発電所事故発生
			4	日本看護協会公益社団法人化
			6	FIFA ワールドカップサッカー日本女子優勝
			7	アナログ放送終了デジタル放送開始
平成 24 年 (2012)	3.31	大阪医科大学附属看護専門学校閉校		

編集後記

大阪医科大学附属看護専門学校は平成24年3月31日をもって閉校いたします。本校は昭和4年に大阪高等医学専門学校附属看護婦学校として設立以来83年、4,141名の卒業生を送り出したことをまずご報告いたします。閉校にあたり、今日までの歩みを一冊の記念誌にまとめて発刊させて頂きました。

本誌の編集に際しましては、可能な限り現存する資料により事実に基づいて作成いたしました。本校は昭和初期から戦前、戦中、戦後の混乱期を経て、平成への歴史変遷の中で、常に社会のニーズに応じて看護基礎教育に取り組んで参りました。それに合わせて校舎も、大阪市北区の梅田病院をはじめとして、高槻市大学町、八丁畷町、そして現在の八丁西町に至るまで移転を繰り返してきました。そのため、残された資料が少なく事実を確認するのに大変苦勞いたしました。遺漏、誤記があれば、何卒ご寛容下さいますようお願い申し上げます。

編集作業に取り掛かり間もない平成23年3月11日、東日本大震災が起きました。大震災は文明のはかなさと人間の非力をまざまざと見せつけるとともに、人間が人間であるかぎり変わらぬもの、すなわち人間の「生きる力と絆」、「倫理力」の存在を私たちに強く印象づけました。

本校はこれをもって閉校いたしますが、変わらぬ人間の心と80余年に亘り培われた看護精神と伝統は、看護学部へ引継がれさらに発展し、未来に向かって飛躍していくものであると確信しております。本校を巣立っていかれた多くの卒業生たちが、大阪医科大学附属看護専門学校の卒業生であることの誇りを胸に、保健・医療・福祉の看護実践活動や看護教育の各分野におかれまして、さらなるご活躍をされますことを祈念しまして本誌を閉じることいたします。今日まで本校を支えて下さった多くの方々に深く感謝申し上げますとともに心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、本誌は前学校長である学校法人大阪医科大学佐野浩一常務理事に監修をお願いいたしました。快く寄稿文をお寄せいただきました皆様、多くの写真や資料をご提供いただきました歴史資料館、成松正治課長、そして、最後までお話しいただきました大日本印刷の方々々に心から感謝申し上げます。

平成24年3月24日

大阪医科大学附属看護専門学校
閉校記念誌編集委員会

神谷美佐子・守本 俊子・中尾 基克
吉田 麻衣・星加 圭子

大阪医科大学附属看護専門学校 閉校記念誌

83年の航跡

平成24年3月24日発行

編集発行 大阪医科大学附属看護専門学校
閉校記念誌編集委員会
大阪府高槻市八丁西町7番6号

印刷・製本 大日本印刷株式会社
大阪市西区南堀江1丁目17番28号